
ルードシアの守り人～黒?～

九郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ルードシアの守り人〜黒?〜

【Nコード】

N0434X

【作者名】

九郎

【あらすじ】

赤茶色の鎧兜を身に纏い天馬を駆って一気に丘を駆け降りるその人が叫んだ。

「突破する!」

走り出した天馬の勢いを増すその先には数万の魔人が狂剣や狂光を帯びた武器を構え、城を背に行く手を塞ぎ一斉に向かってくる。

天馬に乗ったその人が刀を天に翳すとそれは赤黒い雷を帯び、天

の雷神を呼んだ。

同時に馬体を左に寝かせ、その魔人の群衆に向け雷神を解き放つ。

それは弧を描く刀波が幾つもの層を成し、一閃すべてを切り裂いた！

序章：ルードシア王国

序章：ルードシア王国

世界は今、主に三つの種族から成っている。

魔人、獣人、そして人間。

過去から現在に至るまでに多くの土地や種族争いの絶えない日々が続いていた。

彼らがようやく個々の国を持ち敵対する種族に対する知識や技術の限りを尽くし、

ようやく国の平定を得る事のできた国があらわれ始めた。

しかし巨大な大陸の中でそれはまだほんの一握りに過ぎなかった。

その中の一つにルードシア王国があった・・・

ルードシア王国は四方を海に囲まれ、唯一隣国のミンに通ずる陸地が伸びていたが、

その陸地もまた二つの巨大な山脈が国境を挟むように伸びており、ルードシア側の山脈は遠くハルデイスの国まで続いていた。

山の狩人でさえルードシアからミンの国に入るには、ゆづに10日を要した。

ルードシアの国益を産出していたのは主に漁業と畜産ではあったが、温暖な気候に恵まれたその地は野菜や果物も多く取れた。

長い間、戦も無く平和な生活を送るルードシアに、馬に乗った一人の旅人が辿りついた。

「ふう」

三日前に食事をしてから今日まで、'まとも'な物を口にしていない。喉の渴きと空腹を抑えながら夕日に消えかかる城門を目指した。

日が暮れた頃に城門に着くと、城内に入るために列に並んだ。

ようやく兵に呼ばれると馬の手綱を引き、城内に入るべく進んだ。

「お兄さん、１０００リリーだよ」

門番がニヤニヤと近づいて来ると手を出してきて言った。

その門番の身なりは御世辞にも立派な鎧ではなく、

どちらかといえあればあり合わせのモノで身を包み、護衛用の銃もだいぶ年季の入った代物である。

髭を蓄えたその顔は良く日に焼けて老けた感じもするが肌の艶から年の頃は恐らく３０歳前後という感じがした。

【城門で言われた１０００リリーはその国で働く人達のおよそ一日分の手当てであった】

どの国も入国するにはそれなりに金品を差し出すが、国によってはそのまま通れる国もある。

それでも一応はそれなりの手続きをするのだが、ここまであからさまに堂々と要求してくるのにはちょっと面喰った。一通り回りを見ると一応はそういう《決まり》になっている様子が見てとれた。

仕方なく馬に積んである荷の中からおもむろに、何本かあるうちの銃の一つを取り出して聞いてみた。

「これでいいかい？手持ちが無いんだ」

門番は少しの間考えたようだったが、銃を良く見るうちに笑みを浮かべた。

「んっ、まあしょうがないな。いいよ通りな」

（なるほど。このテの物はどうやら歓迎されるらしい）

活気のある大通りを進み、なだらかな坂道を登りながら左右に分かれる道を左に進んだ。

道が少し狭くなってきた所に食事ができそうな店を見つけると、馬から降りて馬止めに手綱を掛けた。

（いい匂いがする・・・）

夕食の時刻ともあつて、中から食事を楽しむ声が聞こえてきた。簡素なドアを開けて店に入ると、客が数人。

常連だろうか、テーブルを囲み食事をしていた。

カウンターには五つの椅子があり、そこには誰も座っていないかった。カウンター越しの若い女性に近づいて声をかけた。

「あの、すいませんが食事出来ますか？」

その若い女性は一瞬、身なりを確認すると笑顔で答えた。

「はい出来ますよ。メニューは無いから適当になりますけど、それで良ければ」

「そうですか、ではそれでお願いします」

カウンターの真ん中に座ると食器を片づけながら女性が聞いてきた。

「お客さん、旅の人ですか。どちらから？」

「はい、ちょっと人を探しながらあちこち」

「そうですか、見つかるといいですね」

何気ない会話をしていると裏から声がした。

「ライム、テーブルの料理上がったよ」

「はい、お客さん少し待っていてくださいね」

そう言つとコップに水を注いでから裏に行った。

いい匂いにつられて腹の虫が鳴き出した頃に

「お待たせ、やっと落ち着いたよ」

いいながら恰幅のよい女性が料理を運んできた。

「あら、見ない顔だね。旅の人かい？」

そこにライムが裏から料理を運んで来ると笑みを浮かべて言った。

「こちら私の母でマリーっていうの。母さんも私と同じこと聞いているわ」

マリーは、そうだったのかいと、笑つて返した。

「ハハ、この辺りで人を探していて」

すまなそうな返事をする

「それもさっき聞いたわ」

それはさておき久しぶりの‘まとも’な食事にスプーンを取った。
「いただきます！」

おいしそうな豆と鶏肉のスープそれとパン。
スープを一口飲んだ。

「おいしいですね」

自然と笑みがこぼれた。

それを見ていたマリーが微笑みながら聞いた。

「お客さんこれからどちらへ。北の方にも行くのかい？」

「そうですね、とりあえずこの街に居なければ」

「そういえば最近いい話は聞かないね。どこかで戦が始まったって聞いたよ。」

まあ商売人にはいい話だろうけど」

「そうですね。この辺りは大丈夫ですか？」

軽く微笑むとマリーは得意そうに答えた。

「ここはルドシア王家の一族が代々守ってきた国だからね。」

昔から争いの無い平和な国だよ。

回りは湖に囲まれているし、それに《守護神様》とやらが守ってくれているって話だよ」

「守護神様ですか、それは頼もしいですね」

マリーは満面の笑みを浮かべて答えた。

そこにテーブルのお客が呼んだ。

「マリー、水を頼むよ」

「はいよ」

コップに水を注いでいるマリーに聞いた。

「すいません、しばらくこの辺りに滞在したいのですが近くに宿はありますか」

「ああそんな事だったらうちでよければ泊っておくれ。」

部屋は空いているから。

たいしたものは無いけど飯はうまいよ」

いい匂いで目が覚めた。

外では鬼役の男の子が必死に坂を駆け上がっている。

部屋から出てきしむ階段を下りると、昨日のカウンターに食事の準備ができていた。

「おはようございます」

「ああオラルさんおはよう。」

そろそろ起きる時間だと思ってね、食事の支度は出来ているよ。食べたらあとは娘がやるから」

そう言いながらエプロンを外した。

「何か急ぎですか？」

「ええ。今日は姫様との恒例の行事で、そのお手伝いだよ」

「恒例の行事？」

「ハイキング。まあ平和な証拠かな」

そう言い残して足早に出て行った。

オラルは食事を終えると食器を洗い場に運んだ。

そこにライムが荷物を抱えて帰って来た。

「あらすいません、母は？」

「なにか急いで出掛けましたけど」

「そういえば今日は姫様の所ね」

「親しいのですか」

「家族みたいに接していますよ」

食事を終えたオラルは荷を抱えた。

（さてと何処から探そうか。とりあえずアイツの所にも行ってみる事にするか）

荷を馬に乗せると昨日の城門に向かった。

小麦の袋を抱えた子供がふらふらと前を確認しながらジグザグに進む。

あやうく野菜を積んだ荷車にぶつかりそうになる。しかし手慣れた様子でかき分けていく。

城門に近づくと昨日銃を渡した門番が来城者に話しかけているのを見た。

昨日は暗くてはつきりとは見えなかったが意外にもガツシリとした体形であることに気づいた。彼はお金を数えると手を振って見送った。

「おはよう、それ良い銃だね」

オラルは馬に乘せてある荷を軽く叩きながら聞いた。

「この荷を換金できるところ知らないかい？」

男は顎をさすった。

「ああ、知っているよ。でもちよいとばかりなあ」

横目で荷を見ている。

どうやら門番という仕事の味を占めているらしかった。

「案内してくれたら一つ譲るよ」

荷物を縛り直した。

「そうこなくっちゃ、ついてきなよ」

そう言うのと勝手に馬の手綱を引いていった。

「気前のいい兄さん名前はなんて言うんだい」

「ああ、オラルって名だ」

「そうかオラルさん。」

俺はサルージってんだ、よろしくな。

ところでその荷物どこで手に入れたんだい、

いい品物が揃っていいそうだけど」

ほほを緩ませ荷を見た。

「まあね。それより昨晚渡した銃は気に入ってくれたかい」

するとサルージはコートの中に大事そうに抱えている銃をさすって言った。

「そりゃあ気に入ったさあ。持っていたのを今朝、売っちゃったよ。それにしてもこれは初めて見る銃だ。

こんな立派なものをくれるなんて、あんた何者かね。

正直、荷の中身を知りたいくらいだよ」

「まあ俺には必要のないものさ。それよりも旅賃が無くなってきたから」

「そうかい、商売人には見えないが・・訳ありなんだろう、ここはそういう連中がたくさんいるからな」

話をしながらしばらく進むと丘にある1件の家を指した。

「あその店だ、俺が話しを通すよ。そうすりゃボラれないですむから、

そのかわりいいところをよろしくな」

サルージは昨日貰った銃より、それ以上のモノを貰えると信じて疑わなかった。

この辺りにはめずらしい赤煉瓦で敷地を囲っている換金屋に入っていた。

「おいラリエルじいさん、客人連れてきたぞ」

すると店の奥から杖を突いたじいさんが出てきた。

すでに80は超えているだろうラリエルが言った。

「なんじゃ、サルージ：ジエンタか。」

御客人、こいつに騙されたんじゃないのかい」

ラリエルは二人を見ると引き返していった。

「まった、とんでもねえ。」

こちらの兄さんは今までとは訳が違う、まあ見てやってくれよ」

オラルは二人を尻目に荷を抱えると一際大きいテーブルに「ドサッ」と置いた。

「これ全て旅賃に替えたのですが」

「ひゃゝこれは大したもんだ」

サルージは目を輝かせて言った。

ラリエルはオラルの顔をジロジロ見ながら一つ一つ確認した。

そのうちの一つの短剣を持ち、窓から入る日に反射した光は天井を

七色に染めた。

「これはどこで手に入れなさった」

オラルは陶器のティーカップをみながら答えた。

「それは西の大陸で知り合いから頂いたものです」

50センチほどの鈍い銀光を放つ短剣をジツと見つめていたがオラルに視線を移すと射抜くような眼差しで聞いてきた。

「これを頂いたと」

「何だじいさん知っているのか」サルージが口を挟んだ。

「いや、いい品だ。そうだな全部で10万リリーでどうだい」

「10万か。安いのか高いのか分からんな」サルージが代わりに答えた。

【サルージの以前持っていた銃は二万リリーほどだった。10万は平均三月分の生活費つてところだ。

並みの商人ならその5倍以上の換金するのが通例ではあった。】

「どうじゃ若いの、やめとくかい？」

その短剣を持ちながら聞いた。

「いえ、それでいいです」

するとサルージは納得がいかなかったらしく二人の間に割って入った。

「ちょっと待った、それだと俺の取り分がねえ」

「サルージ、そこから2万を取ればいい」そう言っつてサルージの肩をたたいた。

「あんだ、こいつに2万もやるのか。人がいいのかそれとも」金を数えていたラリエルはサルージに2万を渡した。

「話はついた、オラルさん感謝するよ」

オラルは残りの金を懐にしまつと軽く礼を言っつて外に出た。

「お客人、これからどこへ行かれるのじゃ」

帰り支度をしているオラルのもとへ近づいた。

「人を探していますので。」

でも北には行かないほうがいいって宿のマリーさんが言っていました。何だか危ないらしくて」

「そうか、西の大陸も危険な所じゃと聞いたことがあるのじゃが」

「そうですね。私は近づかないようにしていました・・・ではこれで」

ラリエルじいさんの視線を背に感じつつ

軽くなった馬を引いて来た道を戻る途中サルージが聞いてきた。

「オラルさん、いやだんな。このあとどちらへ行きますか、なんなら御供しますよ」

《だんな》と、調子よく呼ぶサルージは懐が温かくなったからなのか、

ベストの紐がゆるんでいないか見た。

「そうだな、そういえば腹へったな」

「分かりました、そういうことなら旨い店を知っています。行きましょう」

じんわり汗を感じたところに山脈の始まりの先端近くにある開けた場所に着いた。

「ここです。その階段を上がったところですよ」

そこは小さな丘を利用した開放的な店だった。

上を見ると白い柵に肘をついている男女がグラスを片手に見つめあっている。

「サルージ、そういうば仕事の途中だったのでは」

「いやいや、たいした仕事じゃないですよ。」

門番なんていてもいなくてもこの国には大して問題ありませんから気にしないでいいですよ。さあ、いきましよう」

そう言々と階段を上がって行った。

（守護神様とやらのおかげかな）

階段を半分ほど過ぎたときだった。

近くで狩猟でもしているのだろうか。

今度は森の方に耳を向けると4発聞こえた。

「狩猟にしては撃ちすぎだ」

異変を感じたオラルは階段を下りるとすかさず馬に乗り、銃声のする森に駆け出した。

「だんな、どこへ行くんですか」

サルージの声を聞き流しながら速度を上げた。

遠目に水面が見えるあたりまでくると何やら騒ぎ声や銃声が聞こえる。

道なき森へ馬を進めて近づいた。

どこかの兵隊だろうか。数人の女性を囲んで対峙しているがすでに湖を背に逃げ場を失い囲まれている状況だ。

馬を降り気配を殺しながら歩いて近づくと見覚えのある女性がいた。恰幅のいい姿、間違いない。マリーだ。

マリーは槍を構え中心の女性を守っている。

《朝、マリーさんが言っていたあの人が姫様ということか》

20人ほどの賊だろうか。

賊頭と思われる体格のよい男が後方に構え腕組みをして見ている。するとその男が怒鳴った。

「あきらめろ！そんな人数じゃ勝ち目はねえ、おとなしく渡せばおまえら見逃してやる」

湖

湖

姫の一行は恐らく奇襲に遭ったのだろう。

護衛兵の数人が森や湖に倒れていた。

残りの護衛兵は賊の半分もない。

オラルは馬を降り息を殺すと木の陰に隠れながらマリーのもとへ向かった。

森と砂浜の切れ目の大木に身を潜め、

飛び出す機会を伺いながら賊頭を見ると、

黒い影が‘スウゝツ’と、背後に付くのを見た。

（あれは誰だ、どうするつもりだ）

賊頭は気づいていない。

ハッとオラルは背後に気配を感じた。

「私が仕掛けたら姫を連れて安全な場所へ」

振り返ると誰もいない。

しかし、すぐに聞き間違いでは無いと確信した。

見るとその影が賊頭の口を塞ぎ、同時に首にナイフを当てていた。

「おい、おとなしく下がれ」

賊が振り返ると賊頭は引き離そうと、もがいている。

オラルは木の陰から飛び出し賊の手薄になっている後方からマリーに近づいた。

「マリーさん大丈夫ですか」

「あれ、オラルさんどうして」

「訳は後で、さあ早く」

水辺に沿って姫の一行を誘導したとき、賊の一人がニヤつき近づいてきた。

「おい、なめてもらってはこまるな」

賊が一斉に笑いだすと体が突然身震いを始め、全身の筋肉がボコボコと波打ち膨らみ、見る見るうちに見上げるほどの魔人となった。

侍女が恐怖のあまり叫んだが声にならなかった。

構えていた兵達が後ずさりをするなか、マリーが叫んだ。

「姫様、大丈夫です。私が御守りします」

オラルは、ふと目を賊頭に向けると先ほどの影はなかった。

やがて賊頭が一団に近づきながら声を張った。

「こうなったら容赦しないぞ、全員ひねりつぶす」

魔人たちが姫の一団を囲みながらジリジリと距離を縮めてきた。

「姫に指一本触れさせるな」

隊長は強気であつたが状況を変えることは出来そうにも無かつた。

（魔人か、だがここは仕方ないか）

オラルが兵の前に出ようとした時、空から怒鳴り声が一带に轟いた。

「おまえら、それはこっちのセリフだあ！」

見ると空に大きな黒い輪ができ、太陽の光を遮り影を落とした。

その黒い輪が徐々に中心に集まると魔人の人数と同じ球が弾けた！

それは一斉に魔人たちに降りかかり剣を持った人の姿に変わると魔人たちを切り裂いた。

あつという間の出来事だつた。

魔人たちは黒い煙を出しながら蒸発していった。

そして魔人たちを切り裂いた黒い人影は瞬く間に一人の影に戻った。深呼吸をしたその影は姫の一団を向き一礼すると無言のまま去って行った。

「なにが起きたの、助かつたの」

身を寄せ合っていた侍女の一人が辺りを見回していた。

「姫様、早く城へ戻りましょう」

姫の気持ちも同じであつたが周囲を確認するとオラルに近づいた。

「あの、助けに来てくれてありがとう」

姫は影の人の仲間だと思っていたらしく、気丈に振る舞いながらも笑みを浮かべていた。

「いえ、何も出来なくて、あの」

「さあ、オラルさんも早く」

返事の途中でマリーに急かされた。

城に戻る途中サルージと別れてしまった店の前を通ると

少し離れた森の中からサルージが現れた。

「だんな、忘れ物ですよ」

サルージは手を振りながらオラルの馬を引いてきた。

「サルージどうして」

「どうしてって、こっちが聞きたいですよ。」

急に行っちゃうから、だんなの後ろ追っかけて行ったらこいつだけ戻って来たので

びっくりしましたよ」

「そうか、悪かった」

「ところで何かあったんですか、あれ、姫様ですよ」

「いや、たまたま会っただけだよ」

「なんだ、そうですか」

日も暮れて一人宿に戻ったオラルはカウンターで食事しているとそこに客が入ってきた。

「ここに居りましたか、先ほどはどうも」

ラリエルじいさんだった。

「あなたに少し聞きたい事がありましたな」

「はい」

ラリエルは隣に腰掛けると持っていた包みを開いた。

「この短剣のことなのじゃが、本当に譲ってもらったのですかい」顔を覗き込むように聞いてきた。

「いや、あの、本当は拾ったものです」

「拾った、これを。西の国で、ですかい」

「はい。戦やら何やらで、戦場跡を見ていてそこで見つけました」
ラリエルは少し考えたと話しはじめた。

「そうか。わしも自慢じゃないがこの歳になるまで各国を色々見て聞いて回ってきたものじゃ。」

そしてこれが何かもわしは知っとる。

これは西の国のアルセルディムの王が懐刀として持ち歩いていたものじゃ。

恐らくあんたも聞いたことがあるじゃろう、アルセルディムは人の近づける所では無い。

あそこは魔人の国じゃ。

じゃがなにか激しい戦があつたのじゃろう。

しかしどう考えても戦場跡に落ちていたとは到底思えんのじゃよ。
ましてアルセルディムの王を倒せるものがこの世に存在するなどと何か知っているのなら少し話してはくれませんかいの」

ラリエルの目は昼間見せた鋭い目付きとは違っていた。

「そう言われても、そんな物だとは知りませんでした。

それもつと高い値がついたのですか」

ラリエルは返つて来た言葉に目をパチパチしてしまった。

その話をカウンター越しに聞いていたライムが話かけた。

「ラリエルじい、その魔人って人の姿をしていないかい」

「おおライム、知っとるのか」すかさず聞き返した。

「街の人が噂を、昼間姫の御供をしている時にそんな連中に襲われたって。」

護衛の兵もほとんど殺されたって」

ラリエルは立ち上がるとライムに顔を近づけた。

「それで姫はどうなった、無事なのかい」

「ええ、誰かに助けられたって聞いたわ。その人はすぐにどっかいつちやっただけ」

「なんと、この地にまで奴等がきているとは」

ラリエルは頭を抱えながら続けた。

「わしも商売柄、色々と耳にする。

わしの察するにアルセルデイルを始め

他の魔人の国々に何か大変な事態が起き始めているのではないだろうか。

その余波がいたる所で災いをもたらし始めたのではないかと感じる。この国ルードシアは昔から代々王家が守り、災いの無い平和な国を維持してきた。

それが今のライムの話聞くに何かよからぬ事が起こる気がする。」

言い終えるとゆっくり腰をおろした。

そこへ城からマリーが戻って来た。

「ただいま。あれ珍しい、ラリエルじいさんじゃないか」

「おおマリーよ、しばらくじゃったな」

「ええ、あらオラルさん大丈夫だったかい、

助けに来てくれてありがとうって姫様がお礼を言っていたわ。

一時はどうなることかと心配したよ」

ラリエルとライムがオラルを見た。

「いえ、マリーさんこそ無事で何よりです。それより何もできなくて」

「そんな事ないわよ、どれだけ心強かったか」
ライムが聞いた。

「母さん、昼間何があったの」

昼間の出来事

昼間の出来事

「この辺りにしましょう」

山脈から湖に小川が流れ込む少し手前の所を指差して姫が言った。

馬車から姫、侍女が降り湖を見渡した。

「綺麗ですこと。今日は風もなく穏やかですね」

兵がテントの設置を始めると侍女は食事の準備に取り掛かり始めた。

「あの船、漁をしているのかしら？」

少し沖に停泊している小舟の帆がこちらを向いていた。

「今日は天気もいいから大漁かもしれませんね」

「きつとそうですね。なんなら少し分けて頂きますか？」

「そうですね、もし近くに來たら聞いてみましょう」

「姫様、食事の準備が出来ました」

湖畔を散策している姫に侍女が近づいて言った。

「ありがとうございます。ではいきましよう」

テントではすでに宴の準備が整っていた。

「姫様、こちらにどうぞ」

準備された椅子に腰かけるとマリーがスープを差し出した。

「姫様、今日はカモのスープです。先ほど隊長さんが仕留めてくれました」

嬉しそうに言うマリーに隊長がカモを持って近くにきた。

「姫様のお好きなカモが捕れました。皆さんのもありますので今日は存分に召し上がって下さい」

「ありがとうございます。キシアは獵がお上手ね、いつも感謝しています」
するとマリーが嬉しそうに言った。

「隊長さん、私たちの分まで捕ってきてくれたのですよ」

「まあ、それでマリーは嬉しそうな顔していたのね」

「ごちそうさま。とってもおいしかったわ」

マリーがスープの皿を片づけ、紅茶を注ぎながら姫に話かけた。

「姫様、あの船・岸に着いていますね。漁、終わったのかしら？」
先ほど沖に停泊していた小舟が小川の少し先に泊まっていた。

紅茶を飲みながら談笑していると、そこへ森の中から男が一人出てきた。

見ると両手で持ったカゴに大きな魚を数匹携え、片づけをしている兵に近づいてきた。

「兵隊さん、今日は大漁でしたのでよかったですら食べてください」

「おお、こんなに！」

魚を持った男に気付いた周りの兵が寄って来た。

「隊長！」

一人の兵が呼ぶとキシアが歩み寄った。

「おお、これは大漁だな。姫様も喜ぶだろう」

カゴのなかの大きな魚を一匹持ち上げて言った。

「立派な大きさだ、今年は豊漁だな」

「ありがとうございます」

男は返事をしつつも森に向かって視線を送った。

すると突然、森の中から5人の男が剣を振りかざし一直線に姫を目掛けていった。

「殺すな、生け捕れ！」

何が起きたのか突然の事態に誰も動けなかった。が、キシアだけは違った。

持っていた魚を投げ捨てると、その先頭の男を目掛けて剣を抜き飛び出していった。

それを見た兵達も我に返るとキシアに続いて剣を抜いた。

するとカゴを持った男が忍ばせていた短刀で背を向いた兵の一人を切った。

兵たちが振り返ると、さらに森から飛び出して来た賊が切りかかった。

「雑魚に用は無い、姫を捕えろ！」

回りに指示を出しながらカゴを投げ捨てると男は姫の一団に突進していった。

不意を突かれ兵はバラバラになりながら応戦した。

同時にキシアは賊の先頭の男を倒すと姫に駆け寄った。

姫を侍女が囲み、その集団を背にキシアが構えた。

回りを見るとすでに数人の男が剣をかざし取り囲んでいた。

森で銃声が響くと応戦していた兵が倒れた。

賊は続けざまに銃を放ち、やがて勝ち戦と見るやゆっくりと歩いて近づいて来た。

「あきらめろ！そんな人数じゃ勝ち目はねえ、おとなしく渡せばおまえら見逃してやる」

スーラン

スーラン

「そうだったの、人ではないとすると・・・その滅んだ国の魔人？ そんな連中がうるついていたら不安で外も歩けないわ」

腕組みをしながらライムが言った。

「確かにそうじゃ。それに姫様を狙っていたのには何か理由があるはず」

マリーが続いた。

「そういう連中がこの城を攻めて来たら、城の兵隊じゃ太刀打ちできないんじゃないかね。まったくどうしたらいいものか」

「マリーよ、その助けてくれた人は誰じゃか分からんのかの？」

魔人を一瞬で倒すほどの腕じゃ。もしかしたらその方がアルセルデイムの魔王を倒したのかも知れん。

オラルさんもその場におったのじゃろう？ 何か見ていませんかいの？」

すでにオラルへの疑いを無くしたラリエルが聞いた。

「銃声が聞こえて、突然の事だったので・・・それに助けに来てくれた人もすぐに消えてしまつて」

「そうか・・・」

マリーはラリエルに酒を注ぎたした。

「明日になれば何か情報が入るかも知れないよ。城に行つて聞いてみるわ」

・ 次日の朝、オラルは食事を済ませると昨日の現場に向かった・・・

巨人のいたと思われる場所には人の形の焼け跡が残っていた。

《やはりアルセルデームの手の者か？　だが、何か違う気がする．．．》

回りを歩いてみると兵達の死体は無かった。

「おい！　そこで何をしている！」

森の中から馬に乗った兵が数人、近づいて来た。

「この街の者では無いな、どこから来た」兵に取り囲まれるとオラルは馬から降りた。

「あやしい物ではありません、人を探してこの街に来ました。マリーさんの宿に泊っている旅の者です」

「そうか。ところで昨日の巨人を知っているか？」

「．．．いえ」

「巨人は人の姿をしているらしい。『仲間』が心配で見に来たのではないのか？」

「そんな、巨人って何ですか？」

「そうか、では教えてやろう。おい捕えろ！」

最初からオラルを疑っていた兵達は縄を取り出すや、問答無用！とばかりにオラルを縛り付けた。

オラルは抵抗することなく縄をかけられ、兵に囲まれたまま城へ向かった。

城に通じる道で街の人々の視線を感じた。

無理もない．．．

何年も争いもなく過ごしてきた人達にとって、縄で縛られ連れて行かれるオラルを罪人として見る以外にはなかった。

指を指す者、ひそひそ話す者・にらみつける者。

知ってか知らずか子供達は笑いながらついて来ている。

やがて坂をのぼると徐々に森が深くなり、恐らく御城の中の北西に当たるその辺りは、ひっそりと生い茂る森に囲まれ、人を寄せ付けない静寂があった．．．

やがて行く手に小屋が見え、数人の兵が柵の回りで警備をしてい

た。

さらにオラルはそこから一人の警備兵と共に森の奥深くまで行くこととなった。

「どこまで行く気だ？」

オラルの問いかけには答えず無言のまましばらく進むと木々の間から城壁が見えてきた。

その城壁にはこの国の日常を描いた彫刻が施されている。

しばらく見ていくと、やがて入り口の門に着いた。

《この彫刻・・・姫様の顔に似ている》

すると何処からか話かけてきた。

< その方の縄を取りなさい >

それを聞くやいなや兵があわてて縄を外した。

その声に聞き覚えがあった。

すると扉がゆっくりと開いた。

入り口から真っ白な石畳みの道が、その階段の先にある宮邸まで続いていた。

< 中にいらしてください >

オラルは辺りを伺いながら中へ進むと扉がゆっくり閉じた。

辺りを伺いながら石畳みの道を進み、階段をしばらく上がると広い部屋に出た。

「先ほどは兵が失礼な事をしました」

横の通路から姫が侍女を引き連れてきた。

「あつ、いえ・・・気になさらないでください」

真っ白なドレスに身を包んだ姿が昨日とは別人に見えた。

急に胸が高鳴ったのを感じた。

《美しい・・・》

侍女が奥の部屋へ案内をした。

「昨日はお礼も出来ぬまま、助けてくれた方はお仲間ですか？」

「いえ、私も・・・誰だか分かりません。姫様の護衛の方だと思っております。」

お礼をするのは私のほうだと」

「そうですか。マリーに話を聞いていたものですから、もしかして思っていたので。」

では誰だか分からないのですね」

少し間を置くと姫に聞いてみた。

「あの、このお城は・・・入り口に姫様のお顔が」

「はい、この国では代々、姫を継ぐ者が守護神と契約をする事になっています。」

この国が平和でいられるのも守護神のおかげです」

「守護神・・・そうですか。それで街の人は明るい顔をしているのですね」

それを聞いた姫はにつこりとほほ笑んだ。

「ただ昨日のような事は初めてで、皆が不安にならなければ良いのですが・・・」

オラルさんはたしか人を探して旅をしていると聞きましたが？」

「はい。ですがまだ会えていません。もう少し探してみるつもりです」

言い終えると侍女が姫に近づいて耳元でささやいた。

「分かりました。ではオラルさん、探している人に会えるといいですね。そこまでお見送りします」

そう言うとき先ほどの扉の入り口まで案内された。

扉の外には先ほどの警備兵が馬を引いて待っていた。

「マリーによりしくお伝えください」

「はい」

オラルは返事をしつつも、その姿が脳裏にしっかりと焼き付いていた。

《 守護神・・・マリーさん達が言っていた事か？ 》

考えながらもオラルはまだ胸が高鳴っていた・・・

すでに街は夕暮れを迎えていた。

馬を引いて宿に戻る途中、大通りの真ん中に人だかりができていた。近くに行つて見ると、何やら男女のもめ事らしい。

「あんたと私が釣り合うと思つていいのかい？ 見るからに貧相で、お呼びでないよ！」

若い娘が数人の男ともめていた。

その娘は膝辺りまでのマントを身に着けてはいるが、着けているモノといえば・・・

カラフルな帯でその立派な上半身を巻き、下はブカブカのズボンを短く切つて履き、

それを宝石のような装飾付きのベルトで固定していた。

「そんな格好して男が欲しいのに決まつているんじゃないのかい？ そうだろう？」

「なあ、ねえちゃん。金ならあるからよゝちよつと付き合つてくれよゝ」

「何言つているんだい。見る限り私に合う男なんかいやしないねゝじゃー！」

ふり向いて行こうとすると囲まれた。

「こうなつたら力づくで連れていくしかないな」

回りの男がニヤニヤしだした。

「ああ、そうかい。だけど私に触れると怪我じゃすまないよ！」

彼女が回りを見ながら言い放つと視線の先にいたオラルと目が合った。

急に女の表情が一変した。

「ああ！ いたゝ！」

オラルを指差しながら叫ぶと人をかき分け近づいてきた。

「もおゝ探したんだからゝ！」言いながら抱きついた。

「退屈だったのよゝロクな男いないし。何処泊つているの？ 行きましょう！」

言われるがまま手を引かれ、苦笑いをしつつその場を離れようとした。

「ちょっと待ちなよ兄ちゃん！　うちらが先だろ」

そう言われながらまた囲まれた。

「すいません。妹が何か迷惑かけたみたいで」

「妹！」

ブウッとふくれ顔をすると

「私の旦那です！　なにか文句あるの！」と言いながらオラルの手を強引に引くと囲いを割って出た。

「けっ！　冷やかしやがって。おい、いくぞ！」

男達はぶつぶつ文句を言いながらその場を後にした。

女がオラルの腕を組んだまま離れずに歩いていると、

先ほどの城に向かう時とはまた違う視線を感じていた。

やれやれ、などと思いながらなるべく街の人と目を合わせないようにしながら宿に着いた。

「あれまあ探している人って旦那のコレ？　ですかい？」

二人を見つけるとサルージがカウンターから近寄って聞いた。

「コレじゃないの！　ダ・ン・ナ！」

「へえ、旦那もなかなかやるもんですね。見直しましたよ。で、お名前はなんと？」

彼女をジロジロ見ながら言った。

「だれ！　この変なの！」

オラルは二人を制して答えた。

「ああ、銃をあずけたサルージだよ。彼女はスーラン」

「サル？　やつぱりね。どう見ても人には見えないわ。

で、その銃は撃てたの？」冷やかし顔で聞いた。

「おいおい旦那、あずけたって？　くれたものでしょ。

そういえばこの銃まだ撃ってないけど」

スーランがサルージの顔を覗き込むように聞いた。

「ふん？　じゃあ撃ってみなよ。まっ、撃てれば？　の話・だ・け・ど？」

そこへカウンターで話を聞いていたマリーが割って入った。

「およし！ この国で銃を撃つときは戦争でも始まった時だよ。」

それよりオラルさん、その子が探していた人かい？」

「はい。あと彼女の他にも数人いまして、これからまた人探しです。明日、ミンの国の方に行くつもりです」

「えっ？ だんな明日旅に出るの？」

「ああ、サルージには色々世話になった。マリーさんも、ライムさんも。」

いろいろお世話になりました」そういうと軽く会釈した。

「そうかい、まあしょうがないものね。またいつでも遠慮なく寄ってね。」

ところで、今日は彼女も泊りかい？」

スーランが身を乗り出して言った。

「そうです！ もちろん一緒の部屋で！」

オラルがささず答えた。

「別々の部屋でお願いします」腕組みをしてスーランが答えた。

「冷たいのね」でもそういうところがいいんだけど！」

次の日の朝、まだ日も昇らぬうちに旅支度を終えた。

「気をつけてね」

「この街に来た時はまた寄ってください」

マリーとライムが見送ってくれた。

「はい、それでは……」

オラルが馬を引きスーランが後に続いた。

早朝にも関わらず大通りは荷を運ぶ人や店の準備をする人で賑わいを見せつつあった。

城門に近づくと荷を乗せた馬をなだめていたサルージがいた。

サルージはオラルに気付くと小走りで近づいてきて言った。

「だんな！ お供します。スーランさん、こいつに乗ってください」

！」

サルージが馬の背を叩きながら嬉しそうに言った。

「おいおい？ 門番はどうするんだ？ それに家族は？」

「家族なんてありません、門番は知り合いに任せました！ 俺も外の世界が見てみたくなっただですよ、いいでしょう？」

スーランが馬をなでながら「あらあら、また変なのに好かれたよね
くでもだめ」

冷やかし加減に覗きこんだ。

サルージはそこを何とか、と拝んで言った。

「そんな事言わないでくお願いしますよ。きつと何かの役に立ちますから」

断つても付いて来そうな勢いのサルージをみながら少し考えると
オラルはサルージの銃を指して言った。

「サルージ、その銃であの丘の鳥を撃つてみてくれ。それで連れて
いくか決めよう」

城門の外に見える小高い丘に数匹の鳥が群れをなしていた。

スーランはポン！ と手をたたいた。

「なるほど、そうね！ それがいい！ それなら文句ないよ！」

サルージが、よし！ とばかりに城門を出ると少し歩いた所で銃
を構えた。

「任せてください！ 俺の腕に勝る奴はいませんよ！」

オラルとスーランは互いに目を合わせると笑みを浮かべた。

「いきますよ！」

じつくりと、丘に居る鳥に照準を合わせると・・・サルージは引
き金を引いた。

銃口から月の形をした光が横に伸び、それが瞬時に縮まり丘に向
かって飛んだ！つと、同時にサルージも後ろへ飛んだ！

「いたた？ なにが起きた？」

サルージが体を起こすと二人が笑っていた。
何で？

見ると今までであった丘が無くなっていた。

「へっ？」

銃と消えた丘を何度も見た。

「へえ、撃てたね。やっぱりオラルは見る目が違うよ」
スーランが腰に手を掛けて言った。

「半信半疑だったけどね。まっ、よかった」

サルージが銃を持ち上げながら走ってくると聞いた。

「だんな、なんですか？ この銃？」

オラルが馬に乗るとサルージに言った。

「サルージ、行くぞ！ 先は長い」

「そうそう！ 先は長いよ！」

スーランもサルージの連れてきた馬に乗るとサルージを置いて駆けだした。

「ちよつと！ ワシも乗せてくださいよ！」

二人が走り出した後を、サルージが必死に追いかけて行った・・

第1章：アルミアの軍隊

第1章：アルミアの軍隊

アルミア王国はメルドール大陸の最南にある唯一の獣人の独立国である。

世界各地に獣人は住処を持っているが、それは人間も同じである。ただ魔人に関してはそれらに立ち入ることを許されず、各国々は魔人の対処法を独自に持っていた。

魔人の国は世界の中でもはっきりと区別されており、また、人間と獣人は魔人とは事を構えなかった。

ただ、どの国にも各国々に通ずる者があり、時には人に姿を変え、また獣人に姿を変えて活動をしていた。

アルミア国の北には人間の国メドル王国があり、アルミアとは親交が深く互いに共存共栄としていた。

そのメドル王国の北の隣国には魔人の国アルセルデウムがあった。

「国王陛下、たった今メドル国王の使者より文が届きました」
そう言うところエドス参謀は持っていた巻物を差し出した。

国王が巻物を広げ、読み終わるとエドスに言った。

「アルセルデウムが滅んだ・・・魔王も・・・」

「なんですと！」

周辺にいた従事者達がざわついた。

それを見たエドス参謀がゆっくりと手を挙げると・・・静まった。

「陛下、どこの国がアルセルデウムを？」

「そこには触れておらん。だが・・・たった1日で、と記しておく。」

にわかには信じられんが、どうやら真のようだ……」

「ならば周辺諸国にも同じように知らせが届いているはず。

陛下、残った魔人共が各地で暴れ出す前にアルセルディム国境を封じ込めなければ」

国王は巻物を返すと少しのあいだ目を閉じた。

「エドスよ、そなたは兵を連れメドル国王の力となってくれ」
続けて従事者たちに指示を出す。

「小隊ならびに魔術獣はメドルとアルセルディム国境を封鎖せよ。
このアルミアの地は絶対に魔人共には踏ませてはならん！」

次の日の朝、エドス参謀と約千人の兵はアルミアを出発した。

メドルとの国境付近には、日も沈みかけた頃に到着した。

エドスは小高い丘の上に立ち遠くに見える川を指して言った。

「シエル、あの川を渡ればメドル国だ。夜が明けてからメドルに入る。この辺りで宿営の準備を」

「はい！ 畏まりました！」

得意げに敬礼すると小柄なシエルは大きな鎧兜をカチャカチャと鳴らしながら各部隊長に指示を出しに行った。その姿はまるで子供が戦の真似事をしている様で滑稽だった。

「ハル獣隊長！」

エドスが造作なく呼ぶと部隊の後ろから人影が宙を飛びエドスの前に着地した。

その姿は一見、黒ヒョウの様であるが、すぐに人の姿になった。

「メドル国に行き、城周辺の状況を確認。同時にアルセルディムとの国境の状況を探って来てくれ」

ハル獣隊長は軽く頷くと飛んで消えた。

見送るエドスは風の匂いに眉を寄せた……

メドル王国

メドル王国

メドル国は魔人の国であるアルセルディムの隣国であるにも関わらず、

世界の中でも特に繁栄を重ねてきた国である。
そして、城はその象徴でもあった……

山の頂に造られた城は雲を突き抜けるほどの高さであった。

普段、地上からはその姿を見ることは出来なかった。

それを利用した城の防御は他に類を見ないほど強固な造りであり、幾つもの戦火を潜り抜けてきた証でもあった。

そして、その国王が絶対の信頼を置くのが大魔術師ドルガスであった。

ドルガスは魔術師の中でも特に対魔人術に精通しており、ここ数十年の平和の立役者でもあった。

また、隣国アルミアの信頼を得ており反してアルセルディムからは要注意人物とされていた。

今宵は満天の星の輝きが地を照らしていた。

ハル獣隊長はメドル国に入り、森の中を弟分のロージィと共に馬で駆けていた。

そして森の切れ目が近づくと速度を抑え止まった。

「ハル……」

「ああ、感じる……」

ロージィと目を合わせたあと木々の間から遠目にかすかに煙の上がつている城を見た。

「すでに魔人と戦いを始めているのかも知れない」

「そうかも知れませんが、急ぎましょう！」

ハルとロージイが森を出て小高い丘に登り、そこから城の近くまで伸びている山脈に沿って進んだ。

月の光が城までの道案内をしてくれた。

やがて山の中腹にある城壁に近づくとロージイが叫んだ。

「ハル、あれは！」

見ると城壁の一部が大きく崩れ、城門は瓦礫の山と化していた。さらに所々で煙が上がりモノの焼ける匂いがした。

二人は侵入出来そうな場所を探すため崩れた城門に向かった。

「ハル、人の気配がありませんね……」

「ああ……何かがおかしい」

ハルが返事をしつつ城を見上げた時だった。

城の上空から何かが飛び出し、二人に向かって急降下してきた。

とっさにロージイは剣を抜き構えたがハルは慌てる事もなく落ち着いていた。

それは地面に着く直前に大きな翼がふわりと開き、着地した。

その翼がマントに変わり人の姿に戻りながらハルに近づいて言った。

「ハル殿……ここはもうもたない。いずれ魔人の手に落ちるでしょう」

ハルに持っていた腕輪を差し出した。

「そうか……エルード御苦労だった。それで国王は？」

腕輪を受け取ると聞いた。

「だいぶ応戦したと……ですが国王そして大魔術師のドルガスも魔人の手に掛かり

恐らく国王、魔術師達は真っ先に狙われたのではないかと思われるです。

王の部屋、周辺には多くの魔人と魔術師達の亡骸がありました。しかし数だけ見ると魔人の方もかなりの痛手を負っていると見えます。

しばらくは攻め込んでこないものと」

ハルは装飾の施された腕輪を強く握りしめた。

それはドルガスの金の腕輪であった。

「ドルガスまでも・・・エルード！ このことを急ぎエドス参謀に伝えてくれ、

私とロージイはこれから城の様子を探る！」

エルードは頷くと翼を広げ飛び立って行った。

「ロージイ、これから城に入る。油断するなよ！」

「ああ！」

二人は馬を降り崩れた城壁に向かって走り出した。

城壁の内部に入るときには二人は二匹の黒ヒヨウに姿を変えていた。

城の中は焦げた臭いが立ち込めていた。

二匹は薄暗い通路を進み一つ二つと部屋を渡り歩いた。

どの部屋もエルードの言っていたように凄惨な状況だった。

歩いている先に螺旋階段のある広間を見つけた。

だが階段付近には兵、さらには魔術師までもが息絶えていた。

激しい戦いを思わせるように壁は焼け剥がれており、

術によって石化、あるいは壁の一部となった兵達の姿があった。

「ここまで侵入されているとは・・・」

慎重に辺りを見回すと二匹はそつと階段を上がって行った。すると広い吹き抜けの広間に出た。

そこは花の彫刻が施された腰の高さほどの石壁で囲まれており大きな支柱四本が、

同じく花の彫刻石の屋根を支えていた。

おそらくハレの日に使う場所なのだろう。

ロージイが北側の石壁に飛び乗り、その上を歩いた。

北側の石床は10メートルほど石屋根よりも月の明りを全面で受け止めていた。

柔らかい月の光がロージイを照らしていた。

「ハル、ここからだと遠くにアルセルデームが見えます」

南側の石壁を見回っていたハルがロージイのもとに近づこうと歩きだした時、

石屋根から黒い水がゆっくりと二人の間に降りてきた。

それは音を立てることなく静かに。

そして徐々に人の輪郭を描くとその全身が月の光に照らされた。

「ハル！」

叫ぶと同時にロージイが石壁から飛び降り、攻撃態勢に入った！

「魔人か！」

ハルも瞬時に何かを感じたのであろう、無意識の内に構えていた。その魔人は二匹を見て言った。

「ほーう……獣人か？　ここで何をしている？」

ハルは今までにない恐怖を覚えた。

それは真つ黒な体に、一つ一つが拳ほどの大きさの鱗のような皮膚、脈打つ筋肉、

まるで意思を持つように不気味にうねる鎧兜……

それを見てハルは黒ヒョウの姿から人の姿になるとロージイを見た。

ロージイも感づいている……この魔人は危険だと。

そしてロージイを見ると叫んだ。

「行け！」

ロージイは一瞬ためらったが理解したのだろう、この絶望に近い状況を。

そして必ず一人は生き残ってエドス参謀に伝えなくてはならないという使命感を。

ロージイは頷くと迷うことなく石壁を飛び越えた。

《頼んだぞロージイ！》

魔人は飛び降りて消えたロージイを目で追いながらつぶやいた。

「まあいいだろう。獣人の召使いは一匹でいい」

ニヤリと笑うとハルを見て言った。

「さあどうした？　かかってこい。きさまにふさわしい首輪を付けてやる」

ハルは両腰の短剣を抜くと攻撃態勢に入った。

「きさまに用は無い！」

ハルは叫びながら魔人に飛びかかっていった。

その頃エドス参謀率いる国境の兵士達は就寝前だった。

エドスは宿営のテントを出ると月を見た。

エドスに付き添っていたシエルも空を見た。

「エドス参謀？　どうかされましたか？」

「知らせが来た」

見ると星の輝く夜空を鳥が旋回しながら飛んでいた。

それはテントから出てきたエドスを見つけると急降下してきた。

慌てたシエルがエドスの背後に回った。

「エルード」

ふわりと着地してエドスに近づき耳元で話かけた。

そばにいたシエルはオドオドしつつも会話を聞きたろうとしたが

エルードに睨まれると大人しく下がった。

短く会話を終えるとエドスはエルードの肩に手を掛け頷いた。

エルードは会釈すると、すぐに飛び立っていった。

「シエル、すぐに出発する！　準備を致せ！」

「は？」

シエルを睨んだ。

「はっ、はい！　すぐに！」

あわててシエルは兵の元に向かいながら叫んだ。

「出発するぞー！　急げー！」

エドスは馬を呼びヒラリと乗ると出発準備をしている兵に向かって声をあげた。

「準備出来た者から付いてこい！」

日の出が近づいた頃、国境の川を越えたエドスについて来られた者は50人ほどだった。

その一番後ろにシエルがいた。

シエルは馬に振り落とされまいと必死に手綱にしがみ付いていた。エドスの部隊は森の手前の開けた草原に馬を止めシエルの到着を待った。

シエルはふらふらになりながらもようやくエドスの前に到着したが、追いついたところで馬から滑るように落ちた。

「どうした、すっかりしろ」

「もうバテたのか？」

微笑する兵達に支えられながらようやく起き上った。

「たいした事はないですよ……さあ行きましょう」
再び馬に乗ろうとした。

すると今度は馬が拒否してまた滑り落ちた。

みかねた兵の一人がシエルを抱えて馬に乗せた。

「ふうゝまだまだいけますよ」

「しょうがない奴だ。が、その心意気は認めてやる」

エドスにポンツ！ と肩を叩かれるとビシッ！ と姿勢を正した。そのやりとりが一团を和ませた時、遠くから声が聞こえた。

皆が声の方を見ると森を抜けて走って来る者がいた。

そして森の影から出ると朝日に照らされた。

「ロージイ！」

エドスは叫びながら駆けだしていた。

事が重大だと咄嗟に理解したのだろう。

黒ヒョウのロージイに駆け寄り、すばやく馬を降りた。

「ロージイ！ 何があった！？」

ロージイは息を切らしながら答えた。

「魔人が！ ハルが私を逃がして、ハルが！」

二人の回りを兵が囲み成り行きを見守った。

つい先ほどまでの笑顔は消えていた……

状況を皆が確認するとエドスが言った。

「その魔人アルセルディムの者では無いな……」
皆が神妙な顔つきになった。

そこへ上空からエルードが降り立った。

「エドス参謀！ あの魔人がすぐそこまで来ています！ ハル獣隊長も一緒です！」

「なんだと！」

皆、一斉に森の方を向いた。

温かかった風が冷たくなるのを感じ、その風が止むと今度は空気が重くなったような気がした。

森が一斉にざわつき始め、大きな音をたてるとまるで生きているかのごとく暴れた。

それらが突然、ピタッ！ と、止むと……

黒い水が森から川のように流れ出し一団に向かってきた。
それを見たエドスが叫んだ。

「牙の陣形をとれ！」

兵が一斉にエドスの後方で陣を組んだ。

その陣形は三つに分かれ、それぞれが三角形をしていた。
続けざまに叫んだ。

「エルード！ こちらに向かっている兵をアルミアに戻せ、我々だけで倒す！」

エルードはすぐに反応した。

「アルミアの勇者達よ！ 油断するな！」

兵たちは馬から降り、盾の壁をつくった。

そこへ流れてきた黒い水がエドスの手前で止まり大きな固まりとなった。

エドスは剣を抜き構えた。

すると黒い水の固まりが上部から流れ出すと中から魔人とハルが現れた。

「ハル！」

エドスの脇にいたロージイが叫んだ。

それを見たエドスがロージイを剣で制した。

ハルは黄金の鎧を身に付け、首には赤く光る輪が掛けられている。ハルを見ながら魔人が言った。

「先ほど良い召使を見つけてなあ。だが、やはり二匹でない様にならん。

おまえ、もう一匹知らないか？」

言い終えるとエドスを見た。

エドスは剣を魔人に向けると言い放った。

「きさまアルセルデイルの魔人では無いな、ここへ何しに来た！」
すると魔人がニヤリと笑みを浮かべて答えた。

「それを知ってどうする？　すぐに死が待っているというのに」
魔人が両手を広げると胸の辺りに白い煙が円を描きだした。

それを聞いていたロージイのプライドは我慢できなかった・・・

ハルとロージィ

ハルとロージィ

ハルとロージィは黒ヒョウの獣人でハルはロージィより三つ年上であった。

互いの両親はアルミアの海岸近くの田舎町で暮らしていた。

ハルは幼いころから狩りが得意で、狙った獲物を取り逃がす事が無かった。

そんなハルと何時も一緒に行動を共にしていたロージィはハルを「兄さん」と呼び、慕っていた。

ある時、いつものように狩りをしながら切り立った岸壁までくると大きな船が座礁しているのが見えた。

「兄さん、なんだろう？」

「この辺りでは見かけない船だ。行ってみよう」

近づくに船体はところどころ剥けており、継ぎ接ぎのあともみとれるが下からは上の様子はわからなかった。

「こんなに大きな輸送船はじめて見る・・・」

「兄さん、あそこから行けそうです」

2匹は船体から無造作に出ている縄はしごを使って船に乗り込むと話し声のする方に向かった。

気配をころしながら船内を移動していくと、大きな檻が幾つも重ねられている部屋に出た。

檻の前で言い合いをしているのは10人ほどの魔人兵だった。見ると檻の扉が【2つ】空いていた。

「お前達が寝ていなければこんな事にならなかったんだぞ！」

「なにを言うつ！ こいつらが逃げたのを見ていなかったのはだれだ！」

船が座礁した事で揉めているのだろうか？

なかなか収まらない言い合いの最中、一人の兵が『ネズミ』の様な生き物を捕まえて来た。

「おい、そこまでにしておけ！ あとの一匹、何が何でも探し出せ！」

それを聞いた兵達は大人しく散らばって行った。

「兄さん、あれ・・・」

「ああ、俺達と同じ仲間だ」

「魔人の国に連れて行かれるの？」

「そうみたいだな」

「じゃあ、助けないと！」

「まで！ 俺たちじゃ敵わない相手だ」

「でも・・・」

「ロージイ、いま見張りは一人だ」

ハルはロージイの耳元で囁いた。

「分かった、上手くやるよ」

「頼んだぞ！」

ロージイは頷くと駆けて行った。

ハルは物陰からその兵に近づいていった。

「まったく、つまらん役目だ」

兵は掴んでいた『ネズミ』を見ながら檻の中に入れると鍵を掛けた。

『ネズミ』は出せ！ と言わんばかりに檻を叩いていた。

「暴れる、どうせ短い命だ」

兵がそう言いながら睨みつけていると船内から爆発音が聞こえた。

「なんだ！」

立て続けに爆発音が聞こえるとその場に残っていた兵達は走って行

った。

《 さすがだロージィ！ 》

ハルは人の姿になると檻の扉を開けて回った。

「今のうちに反対から逃げてくれ！」

解放された仲間たちは他の檻を開けながら逃げて行った。

「きさま！ 何をしている！」

突然後ろから怒鳴りつけられたハルは檻を開けるのを躊躇したが、

「大丈夫だから逃げてくれ」そう言つてタヌキの獣人を逃がした。

「きさま、若造のくせにやってくれるじゃないか！ 生きて帰れると思うなよ！」

ハルは振り返りつつ、黒ヒョウに姿を変えた。

するとその兵もハルと似たような猛獣ではあるが黒い体毛は鎧に変わり、

その尾は別の意思を持ち、足元は沈んでいた。

《 まともに戦つては・・・ 》

ハルは突進してきた魔獣をかわすと、檻に突っ込んだその後ろの尾に向け口から火炎を放った。

その尾は似たようなモノを吐き出すとそれでかわした。

瓦礫の中から身を出した魔獣は再び突っ込んで来た。

ハルは続けざま火炎を放ったが、魔獣はそれをかわすこと無く受けて突進してきた。

それをヒラリとかわすが・・・伸びた尾がハルを捕らえ巻き付いた。

ハルは身動き出来ずに魔獣に引き寄せられた。

「獣人の分際で我らに歯向かうとは・・・見せしめにその皮を剥いでくれよう！」

魔獣は尾を伸ばすと宙でハルを締め上げた。

ハルは意識が遠のいていくのを感じ、覚悟をしたときだった。

目の前を影が走った瞬間、尾が切れた。

ハルは地面に叩きつけられると意識を戻し、何とか構えをとった。ハルが見上げる先に一匹の鳥が舞っている。

「・・・逃げていた奴か！ わざわざ殺されに戻って来るとは馬鹿な奴だ」

切れた尾が魔獣に戻ると、それは翼を持った魔鳥に姿を変え大きな翼を羽ばたかせてゆっくり上がっていった。

「逃がしはせん！ 覚悟しろ！」

魔鳥は大きく鋭い爪を伸ばし、そこに大きな火炎玉を造ると翼を持った獣人めがけて放った。

しかし火炎玉は抵抗される事無く船室の上部を破壊して空高くに消えていった。

翼を持った獣人はその穴から外に飛び出すと魔鳥もあとに続いた。

ハルが甲板に出ると、海岸に逃げた獣人達がロージイと共に居た。

「兄さん！」

ハルは上空で戦う魔鳥と獣人の姿を見ながらロージイの元に駆け寄った。

「ロージイ、怪我は無いか？」

「ええ、兄さんの言われた通りに魔人達を船尾に閉じ込めたあと爆破させました」

「良くやってくれた」ロージイはその言葉に頬を上げた。

ハルは後ろにいた一匹の老犬に歩み寄った。

「ところで、あなた達はどうして・・・」

「はい。我々は小さな漁師村に住んでおりました。そこに突然奴等が来て村を破壊し・・・」

なんとか女、子供は逃がしたのですが我々は捕まってしまいました」「そうでしたか」

「それと船の中で聞いたのですが、どうやら魔人達は我々を密偵用に改造すると言っていました」

「改造！　なんてことを！」

「幸いこの辺りは岩礁地帯でしてな、運よく座礁してくれました」

上空の二人の戦いはさらに激しさを増していた。

「あの方は？」

「はい、エルードといいます。まだ若いのですが戦いにおいては抜きん出たものをもっています」

エルードは海岸に降り立つと魔鳥も続いた。

「逃げ足の速さだけは認めてやる。だが次で終わりにしよう」

魔鳥は上空に向けて口から勢い良く水を噴き出すと、それは針の雨となりエルードを襲った。

エルードは広範囲に渡って降り注ぐ針の雨に逃げ道を失うと、つさに翼を盾にしてそれを受けた。

数本の針を受けたエルードの翼は傷つき、飛びながら戦える状態では無くなってしまった。

「おおっ！　エルード！」

「こうなったら我々が！」

仲間が心配そうに身を乗り出すがとても助太刀できそうな者は居なかった。

「観念しろ、これで楽にしてやる！」

そう言い放つと魔鳥は先ほどよりもさらに大きな火炎玉を造った。

エルードは構えをとったが、もはや翼に力はなかった。

「これで終わりだ！」

火炎玉がさらに大きくなったとき、魔鳥の顔面に『ネズミ』が飛びついた。

「ぐわっ！　こいつ！」

魔鳥は慌てて元の人型の魔人に戻るとネズミを顔面から引き剥がした。

「やってくれたな・・・」

みると魔人の左目から鮮血が溢れていた。

「くたばれ！」

魔人は両手でネズミを握りつぶしにかかった。

「ヂュウ！」

苦しそうに悶えたその時、魔人の背後からロージイが飛びかかり首を捕らえた。

「があっ！ きさまら！」

魔人はネズミを投げ飛ばし今度はロージイを引き剥がしにかかった。

「くそっ！ このっ！」

ようやくロージイの首を掴み、引き剥がそうとした時だった。

「離れる！」

ロージイはその声に瞬時に反応すると魔人を蹴飛ばし飛び退いた。

シュツ

エルードが魔人の脇をかすめていったあと、風を受けた魔人の首がゆっくりと落ちていった。

「いずれまた会うこともあるでしょう」

捕らわれていた仲間たちは、ハルとロージイに再開を約束して家族の待つ土地に帰って行った・・・。

「兄さん、俺もつと強くなりたい」

「ああ、俺もだ。さあ帰ろう！」

夕焼けを見ながら二匹は駆けて行った・・・

ロージイの怒りは頂点に来ていた！

ハルがいいように操られていること、そして何より魔人の『飼い犬』のような発言に！

ロージイは己のプライドに従った。

その場から魔人めがけて飛び出すと空中で人の姿になり剣を抜く

と渾身の力を込めて切りかかった！

ロージイの体は宙に浮いたままだった。

魔人の肩の辺りから体を覆うように黒い水の盾がロージイの剣を呑み込んでいた。

そしてそれが大きな固まりに変わると徐々にロージイも呑み込まれていった。

「そこまでだ！」

エドスが馬を降り、魔人に歩み寄って言った。

「2人を開放しろ！ お前の望みは何だ！」

魔人は息の切れかかっているロージイを目の前に放り出すと言った。
「望みだと？ この世界は近々魔人が支配する。」

その前に人間共と獣人を消してしまいたい、それだけだ」

「そうか、ならば最後に一つ教えてくれ。アルセルディムを滅ぼしたのはお前か！」

魔人が高笑いをして返した。

「最後か？ いいだろう教えてやる。」

確かに我々の送り込んだ仲間がアルセルディムを滅ぼした。

だが、そいつが魔王を倒した後に何者かによってそいつ自身も殺された。そこが謎だ。

なぜならこの世界に我々『闇の十人』を倒せる者など存在しないはずなのだ。

それで私が調査のために遣わされた、分かったか？」

エドスはロージイを抱き抱えると、ニヤリと笑みを浮かべて言った。

「そうか、お前のような奴を倒せる者がこの世界に存在するのか。」

ならばそれは我々獣人かも知れないな」

「なんだと？」

エドスはロージイを馬に乗せると、皆に向かって叫んだ。

「仲間達よ、遠慮はいらん！ 己自身のため、守るべきもののため

己を開放し、存分に戦え！」

エドスが魔人に振り向くと、その姿は全身が針の皮膚で覆われた鎧獣に変わっていた。

仲間も同様に、それぞれの獣の姿に変わっていた。

「それがどうした？」

魔人の体から黒い水の固まりが無数に伸び出てくると、それは1つ1つ魔人の顔になった。

その固まりの1つが言った。

「遠慮はいらんど、かかってこい！」

エドスは身構えると叫んだ。

「我々、獣人の力を見くびるなよ・・・一の陣！」

エドスの合図とともに右後方の三角の陣が一斉に飛びかかると宙を舞った獣人と地を駆ける2手にわかれた。宙を舞った獣人達は同時に火炎を放った。

魔人は黒い水の固まりの一つが盾に変化して防いだが、周辺は炎と煙で覆われた。

視界が利かなくなっている魔人に対し地を駆けた獣人達は3体が合体すると

漆黒の鎧兜を身に付けた鎧獣となり、炎と煙の中へ飛び込んで行った。

「くらえ！」

鎧の一つが巨大な斧に変わり、瞬時に振りかざすと魔人をなぎ払った。

「ぐっ！　こんなやつらに」

魔人が胸から2つに分かれると再び黒い水が地を覆った。

「やったか！？　控えていた獣人が言った。

すると黒い水は波打ち始め、それが無数の槍に形を変えると瞬時に飛び出し獣人達に襲いかかった。

宙を舞った獣人達はかろうじてかわしたが翼を撃ち抜かれた。

その撃ちぬいた槍が網に形を変え、反転して獣人を包み込むとその

まま勢いよく地に叩きつけた。

漆黒の鎧兜を身に付けた鎧獣は多少の傷を負ったものの鎧が防いだ。

「ぬうつ、油断するな！ 次が来るぞ！」エドスが叫んだ。

黒い水が再び固まると魔人が姿を現わした。

「なかなかの攻撃だった、次に期待するぞ」不吉な笑みを浮かべながらエドスを見た。

「そう言っていられるのも今のうちだ、第二陣！ やつを抑えこめ！ これで終わりにしてやる！」

左後方の8人が駆け出すと魔人を囲んだ。

「八方陣！」

8人の獣人の全身が輝きを放ち、星の形の円陣を描いた。

その中心にいる魔人は幾つもの回転する星のリングに囲われた。

「なんだ、その程度か？」それを見たエドスは叫んだ。

「十二方阵！」

エドスの後方にいた最後の部隊が飛び出し、八方陣の外側にさらに大きな円をつくった。

「魔人よ、油断したな！ これで塵にしてやる」

呪炎魂消

獣人たちの様々な攻撃が魔人に集約された。

「なにっ！ 何だこれは！」

魔人の予想に反して体が溶け出し、蒸発して消え始めた。

「物理的な攻撃が効かぬのならこの術は効くだろう、いま楽にしてやる！」

エドスの体が光り始めた。

「ぐうつ！ たしかに甘く見ていた・・・だが忘れてはいないか！ ? こいつの存在を！」

魔人の目が赤く光った。

すると輪から少し離れた所にいたハルの首輪がそれに反応した。

ハルは突然走り出し、囲いをつくっている獣人に向けて口から雷を放った。

それは『輪』全体に雷が轟き、それを受けた獣人達は痺れてその場に倒れた。

術の効力が切れたその瞬間、魔人の体が回転し術を弾き飛ばすと駆け寄ったハルが身を寄せた。

「いい子だ、それでいい。今度はこちらの番だ、確かに舐めてかかつては命とりになりそうだな」

魔人は呼吸を整えた。

「一切の手加減はせん！ 皆殺しだ！」

体を修復した魔人が胸の辺りで両手を合わせ、ゆっくり手を広げると真つ赤な雷が全身を覆った。

それをみるやエドスが反応した。

「いま一度、呪炎魂消！ 俺がとどめをさす！」

ふいをくらった獣人達が構えをとり直すと一斉に術を放った。

再び魔人とハルが術にかかったが、ハルの黄金の鎧が雷を放つとそれらを跳ね返し続けた。

「まさかこいつが役に立つとはな・・・」ハルの黄金の鎧をさすりながら言った。

魔人がエドスを凝視すると、全身を包んでいた雷の輪が高速で回転を始め、徐々に拡大していった。

内側に円を囲んでいた獣人たちは赤い雷の輪が近づくと後ずさりした。

魔人は胸の中心で手を合わせ、腰を落とし、力を込めると雷の輪が勢いよく広がり、術をかけていた獣人達は逃げる間もなく雷をくらい吹き飛んだ。

「覚悟しろ！」

魔人は合わせていた両手を少し広げると、そこには黒い水の固まりがあり、それを一気に押し出すとエドスに向かって飛び出した。エドスが避けようと動いた時、それは大きな網になり、エドスを包んだ。

「なにっ！」

さらに網が液状に変化するとエドスは呑み込まれた。

先のロージイと同じように黒い水に取り込まれ身動きできないでいるエドスに近づくと

魔人の両腕が天高く伸び、その手の形が鋭利な剣に変化した。

「どうだ苦しいか？　だが安心しろ、いま楽にしてやる！」

それはエドス目がけて勢いよく放たれた。

「ぐわっ！」

突然、魔人の顔に小柄な獣人が飛びついた。

それは両足で首を絞め、両手の爪が顔を捕えていた。

「エドス参謀！　今です！」

エドスは黒い水の中からそれを見てニヤリとした。

全身の皮膚を覆っていた針が白い光を放つと、体を丸めたエドスが魔人に向かって飛び出した。

魔人の顔を覆っていた小柄な獣人は、当たる直前に飛んで逃げた。

「なっ！　な・ん・だ・と」

魔人の胴にエドスが埋まっていた。

「この手の術が効かぬのは、おまえだけではない。そしてこの技は魔人に効くらしい」

エドスを覆っている無数の針が瞬時に伸びた。太く、長く伸びた針は魔人の体をはじき飛ばしその光を受けた白黒模様の水しぶきがボタボタと落ちていくと、それは徐々に蒸発し消えていった。

「終わったか・・・」

傷ついた獣人たちがエドスの元に集まってきた。

「参謀、やりましたね」

「今回は危なかったですよ」

傷を負った者たちも勝利を確信すると同時に笑顔が戻ってきた。そこへ小柄な獣人が割り込んで言った。

「エドス参謀！ ナイスな《タイミング》でしたしょう？」

「シエル、今回に限っては良い働きだった。たまには褒めてやらんとな！」

「そんな〜！ 毎回お役に立っているではないですか」

獣人達の笑い声が響くなか、川に背を向けているハルが叫んだ。

「今回は預けておく！ だが次はないぞ！ 楽しみに待っている！」

獣人達が見るとハルを覆っていた黄金の鎧は消え、

いつものハルに戻っていたが目は赤く光ったままだった。

ハルは振り返ると川に向かって走り出した。

「エルード！」 エドスが叫んだ。

ハルはエルードを見ながら不気味な笑顔を浮かべるとそのまま川に飛び込み、川と同化して消えていった。

エルードはハルが消えた辺りを探したが、とうとう見つからなかった。

そこにエドス達が集まってきた。

「エルード！ ハルは！？」

「駄目です！ 川と同化して消えました」

「そうか・・・どうやら一筋縄ではいかないか」

「くそっ！」

悔しがる獣人達にエドスが言った。

「一度アルミアに戻る！ このままでは終わらせん！ 態勢を整えてから奴らを叩く！」

獣人達が一斉に声を挙げた。

見上げるとすでに日は高く昇っていた・・・

第2章：ミンの剣王

第2章：ミンの剣王

ルードシアとミンの国境には山脈が双壁を成していた。

その谷の山深い所に、小さな集落があった。

集落とはいっても数件しかなく、家と家との間は徒歩で半日ほどかかる。

その1つに刀鍛冶師シンの家があった・・・

早朝、シンが旅支度をしていた。

「では行ってくる。また四・五日ほどかかると思うがよろしく頼む。ところでランは何処にいる？」

「はい、ランは相変わらず剣術修行です。今日はあなたが街に行く日だって伝えてあるのに」

「そうか。ではランを頼む。自分の技に自信を持つことは良いことだがそれだけでは世の中を渡ってはいけない。レイからもそのあたりを教えてやってくれ」

シンは大きな荷を背負うと家の外に出た。

「それでは頼んだぞ！」

「はい、気をつけて」レイは手を振りながらシンを見送った。

シンは獣道を歩き2つ目の山を過ぎたところに洞窟を住まいとしている家に着いた。

その穴に向かって呼んだ。

「おい、アキム！ いるか？」

（アキムとは鎧兜、装飾品などを作っている職人でシンの幼馴染でもある。）

シンの刀剣の鞘はアキムに拵えてもらっている)

道窟の中から反響を重ねた返事があり少しするとガシャガシャと音を立て、何やら大きな荷物を抱えて奥から出てきた。

「ごめん、ごめん、待たせたな！」

「いや、それにしても今日は多いな」

「ああ、しばらくここを離れる事にしたんだよ」

「どうして？」

「カズチの店を手伝う事にしてな、何だか景気が良いらしくてよ。そんで暫く手伝ってくれって」

「そうか、なら少し持つぞ」

そういうとシンは荷を一袋抱えた。

「ああ、すまねえ。これでまとまった金になるからよ、明日は一杯やろうな！」

二人で大きな荷を抱えると歩き出した。

「そついやゝ ランちゃんは何つになつた？」

「ああ、１７になった。最近は自信たつぷりに勝負してくれって言ってくる」

「そうかゝ 大きくなつたな。このあいだ見掛けたけど、だいぶ大人っぽくなっていたなゝ 何だかレイの若いころに似てきたよ。ありや男はほつとかないね」

「そうか？ だけどまだまだ世間知らずだ」

馴染みの小川からさらに山を越えると雑木林の中にある道に出た。

近くにだいぶひなびた社を見つけたアキムは日暮れも近づいていたので「今日はここいらで泊るか？」と、シンに聞いた。

「そうだな、じゃ食い物を取ってくる」

シンは荷を下ろすと、中から細い腕の長さほどの木の箱を背負った。「ああ、火熾して待っているよ」

シンは軽い足取りで山に入って行った。

小さな小川に着いた頃には日が沈みかけていた。

夕陽に照らされた小さな滝の上に一頭の鹿が水を飲んでいた。

「さてと・・・」

シンは呼吸を整えると、ふんっ！ と両手を合わせ、ゆっくりと手を広げていった。

すると背中の中箱から一振りの剣が手の動きに合わせて出てきた。

剣はシンの意のまま自在に宙を舞った。そしてシンが鹿に向かって腕を向けた瞬間、剣が鹿の首を貫いた。シンは仕留めた鹿に近づきながら剣を戻したときだった。

（誰かいる）

シンは悟られないよう気配を伺いながら獲物を担ぐと、ゆっくりとアキムの待つ場所へ歩きだした。

日が完全に沈み、月明かりの森の中を進むと大人一人ほどの高さの場所を飛び降りた。

（あれ？ 消えた？）

木の上に身を隠して見ていた人は、シンの姿を見失った。気配を殺しながらゆっくり降りていくと

慎重に辺りを伺いながら消えた所に近づいた。

（ここを降りて行つたのね・・・）

上から覗き込むと行き先の気配を探してみた。

ハッと後ろに気配を感じたときには振り返る間もなく腕を極められ口を塞がれていた。

「静かにラン、ここで何している」シンはゆっくりと口から手を離した。

「ああっびっくりした〜！ 気付かれないと思ったのに」

シンの顔を見ると少し安心した表情を浮かべた。

「バカなことをして、レイが心配するだろう？」

「母さんには言ってきたわ、駄目って言われたけど。それよりさっきの技は何！？ 私にも教えて！」

ランは目を輝かせて聞いた。

「見ていたのか？ でもこれはまだランには使いこなせない、まだ修行が必要だ。しょうがない、夜が明けたら帰るのだぞ！」

「ええっ！ 私も連れて行って！ もう退屈でしょうがないの！」

「駄目だ、約束だ」

すでにアキムは火を熾して待っていた。

「アキム、待たせたな。客が一人増えた」シンの影からランが顔を出した。

「こんばんは！ アキムさん。見つかつちやいました！」驚いた顔でアキムが言った。

「ランちゃんじゃないか！？ どうして!？」

「まあ、色々ありまして」

「どうしたかは知らないがランちゃんなら大歓迎だ！ 飯食べるだろ？ まっててな、いま美味いの作るから！」そういうと支度にかかった。

「それにしてもランちゃん綺麗になったな！ 俺がもうちょっと若かったら嫁に欲しいくらいだよ。誰か意中の人はいるのかい？」

「いませんよ！ 街に行けばそういう人がいるかもね。でも私、父さんよりも強い人じゃなきゃイヤだな」

「ランちゃん、そりゃ難しいな。シンより腕のたつ人はなかなかいないぞ？ わしもシンとは長い付き合いになるが、そんな奴は見た事ないな」それを聞いたシンは笑みを浮かべて言った。

「世の中、強い人は幾らでもいる。確かに身を守る強さも必要だが、人としての強さ、優しさを持っていないと世の中渡つてはいけない。ランはまだまだ目先の強さを求めすぎる、それしか見えていない。まだまだ色んな事を学んでいかなきゃいけない」

早朝ランが目覚めると二人は食事をしていた。

「ラン、これを食べたら家に帰るんだ」シンが器を渡すとランは頬

をふくらませた。

「私も行く！ もつと色んなもの見たいし知りたいもの！」

「次の時は連れていくから、だから今日は帰りなさい」

「毎回そう言つて・・・駄目って言つても付いて行くから、仕事の邪魔はしないわ！」

出発の支度が出来ると2人は荷を持った。

「ラン、街道に出たらそこから家に帰らない。この次は必ず連れていくから」

ランは返事をしなかった。ふてくされた顔をしながら歩きだした2人について行った。

街道が見えた頃、アキムがランの機嫌をとって話かけた。

「ランちゃん、シンも次は必ず連れていくって言っているから今回は家に戻った方がいいよ。」

レイも心配しているだろうし」

しばらく行くと街道に出た。人通りは無く鳥の鳴く声だけが聞こえた。

「ラン、ここでお別れだ。気をつけて帰るのだぞ」

ランは、むっ！とした顔で答えた。

「どうしても駄目なの！？」

「次は必ず連れて行くから、言う事を聞いてくれ」ランの肩をたたくと諭すように言った。

そこにアキムが口を挟んだ。

「シン、あいつ何だ！？」シンとランはアキムの見ている方を向いた。

「助けてくれ！」

街道の先から男が一人、着の身着のまま必死にシン達のもとに駆けてきた。何かとシンが荷を置いて、男のもとに駆け寄った。

「どうした！」

「こつちに来る化け物が！ 助けて！ 早く逃げないと！」

「落ち着け！ 何があつた！」

男は何かに脅えた様子で「あんたたちも早く逃げろ！」と言い放つとすぐに走り出した。

「おい！ まて！」走り去る男の脅え方は尋常ではなかった。

「シン、どうした」アキムとランはすれ違いに走り去る男を見ながら走り寄って聞いた。

「分からない、何かに脅えていた」シンは男を見送りながら答えた。「見て！」

ランが街道の先に現れた二人の女性を見つけた。

「その人、助けて」

近づいて来る女性は何やら街の客取りの格好をしたこの辺りには似つかわぬ姿だった。

それを見たアキムは前のめりになった。

「いやゝ いい女だな。こんなに綺麗な人は見たことないぞ」

三人の手前で、女が肌蹴た所を繕いながら言った。

「良かった、わたしたち追われているのです」

シンは女の首辺りが肌蹴ている所に目がいくと首の動脈が少し動いたのを見逃さなかった。

アキムとランを自分の後ろに下がるように手で指示した。

「誰に追われている？ それに汗をかいていないが？」シンの口調が変わった。

その変化に気付いたアキムとランは咄嗟に身構えた。

「そう？ 気付かれたのではありませんがね」女の手が瞬時に伸び、シンの首を掴んだ。

「父さん！」「シン！」

女の姿は蛇のような顔つき、体は一部が蛇のようではあるが女性の体を留めており、足の辺りはムカデのようであった。

シンは掴まれた腕から逃れようともがいた。

それを見たランがシンを飛び越えて切りかかったが気付いた蛇女がもう一方の腕を伸ばした。ランはそれを剣で払うと幾つかの小さな球を間髪入れずに蛇女の顔を目掛けて投げるが、それを硬い頭の頭部でうけた。

シンはそれを見逃さず腰の剣を抜くと掴まれている腕を切った。

「があっ！ やってくれるじゃないか！」女は切られた腕を戻すと体に取り込んだ。

「ひどいことするね〜！ こうなったらみんな食ってやる！」顔に似合わず色っぽい声だ。

シンは腕を外すと、投げ捨てて言った。

「きさまら魔人か！ なぜこの国にいる！」

「魔人！？」ランは剣を構えながらシンに近づいて聞いた。

シンは首をさすりながら続けた。

「世界には我々人間の他にも違う種類の人がいる。ただ魔人だけは悪でありそれ以外の何ものでもないとも聞いた」

すると、もう一人のまだ人の姿の女が言った。

「へえ〜 いい話じゃないか、こんな所にまで知られているとは。

魔人ね〜？ でもさっきの街の奴らは何にも知らなかったようだね
〜 おかげでいい食事にありつけたよ。まあ一匹逃がしたけどあと

の楽しみにしておこうじゃないか」

「なんだと！ じゃあ街の人達は！？」アキムが声を荒げて聞いた。

「もう消化したんじゃないのかね〜」

蛇の女が復元した手で腹を摩りながら言った。

「じきにお前達も同じ運命さ〜 覚悟しな！」

再び蛇の手が伸びると、シンとランに襲いかかった。それを互いにかわすとシンはアキムに言った。

「アキム！ 千術箱を！」

「分かった！」

アキムはシンの荷を取りに駆けだした。それを見た後ろの女が突

然蜘蛛のような顔つきの姿に変化して

口から白い糸のようなものを吐き出した。それはアキムとの距離を一気に縮め、アキムの背に張り付いた。

「なっ！」

アキムは抵抗出来ずに勢いよく引きずり戻されると蜘蛛女が口を大きく開いて待ち構えた。

「まずい！」

シンが白い糸に切りかかったが、切りかかろうとしたとき片足を掴まれた。

「あんたは私の獲物だよ！」蛇の手に捕まると、態勢を崩して倒れた。

シンは引きずられるのを必死に抑えつつ握っていた剣の柄を下に持ち替えると力を込めて剣を振りおろした。アキムの体は意思を失っていたがそれをシンがとらえた。

「アキム！ ランを連れて逃げろ！」シンは蛇の女に引き寄せられながらも叫んだ。

「舐めた事をしてくれるねー！ 逃げられると思っているのかい？」蜘蛛の女が口から無数の糸をチヨロチヨロ出しながら近づいて来た。

少し離れた所にいたランは、アキムが取りに行った千術箱を再び取りに駆けだした。

「何をしようってんだい？」

蜘蛛女がランに糸を放ったがランは飛んでかわすと荷の中に昨日シンが使っていた千術箱を見つけ、それ目掛けて飛びついた。が、同時に糸がランの胴から両足を囲うように捕え地に叩きつけた。

「ラン！」シンは引きずられながら叫んだ。

蜘蛛女はランを身動きさせぬまま引きずり寄せてきた。だがランの両手にはしっかりと千術箱が掴まれていた。

シンを手元に引き寄せた蛇の女は言った。

「姉さん、先にこいつ食ってもいいかい？」

「ああ食っちまいな、そいつもあんたにやるよ」シンを掴んで離さないアキムを見て言った。

ランは隙を見て千術箱をシンに向かって投げた。

「父さん！」必死の願いを込めた千術箱はアキムが掴んだ。しかしシンに渡した瞬間、蛇女の手が千術箱を奪い取った。

「そんなに大事な物なのかい？」

「ああ・・・」ランは絶望と自身の無力感を感じた。

「姉さんこれ大事な物らしいよ。どうする？」

すうっつと蛇の手が伸び、蜘蛛の女に渡した。それを少し眺めて言った。

「まさかこんな木の箱で私達をやるうってんじゃないだろうね」2人が笑いだした。

「これじゃ私らの世界になるのも時間の問題だよ。こんな物で殺りあおうってんだから」

言いつつ蜘蛛の女が千術箱を後ろに投げ飛ばした。

「くそっ！」アキムは、拳を地に叩きつけた。

シンはランを見たがランも無力感を感じた目でシンを見つめた。

「ラン、すまない」

「父さん」

2人の会話を聞いていた蜘蛛の女が言った。

「あらまあ？ 泣けてくるじゃないかい？」

「姉さん、さっさと食ってさっきの男食いにいこうよ」

「ああ、そうしよう」

蜘蛛の女が大きく口を開けた。ランは何とか引き寄せられまいと必死に地面にしがみ付いた。

「ラン！」「ランちゃん！」

2人の声も空しく蜘蛛の女の足もとまで引き寄せられたときだった。

《バシュ！》

青い閃光が蜘蛛の女を貫いた。

「なに！」

一瞬呆氣に取られた蛇の女が光の元を辿った。

「当たった！」

遠目から銃を構えた人が叫んだ。その人は続けざまに蛇の女に銃口を向けた。

咄嗟に蛇の女はシンを持ちあげると盾にした。

「なんだ！ きさま！」横で蜘蛛の女が蒸発していった。

「姉さん！」

次の瞬間、蛇の女はシンを離れた。

「なに！」蛇の女の腹から剣が突き抜けていた。

「お返しだ！」アキムは剣から手を離すと後ずさりした。

「父さん！ これ！」

逃げだしていたランは千術箱を持ってシンに駆け寄った。

「ラン、すまない！」

シンはランを掴むと蛇の女から離れた。そしてすばやく千術箱を背負うと手を合わせた。

《 むんっ！ 》

千術箱が金色の光を放ち剣が幾つも連なって勢いよく飛び出すと、宙で螺旋の花を描き中心の剣が蛇の女に向いた。

「なにを〜！」

蛇の女に刺さっていた剣は溶け、身震いを繰り返すと大蛇となり口から大量の炎を放った。

シンは数千の剣を操るとそれはシンとランの前で盾となった。その炎を弾きつつ次にシンが合図をすると剣は針のように飛び出し大蛇をとり囲んだ。

「私に剣など効かぬ！」

大蛇の鱗の1つ1つが異様に膨れあがると硬い皮膚へと変わり、それを見たシンは大蛇に叫んだ。

「ただの剣なら効かないだろう！　だがこれはただの剣ではない！」
シンはさらに力を込めると1つ1つの剣は赤黒い雷をまとった。

「そんなもの効かぬ！」

大蛇はどす黒い炎を吐き出した。だがシンの赤黒い雷をまとった剣は空に向けて螺旋に回転すると天高くそれらを送り出した。

「なんだと！」

「覚悟しろ！」

シンが合図をすると大蛇を取り囲む剣先をすべて大蛇に向け、竜巻の如くその輪が一気に縮まっていった。

「ぐあああああ！」

切り刻まれながら蛇の女の絶叫が少しずつ消えていくと螺旋の輪が徐々に回転を抑え、シンの合図で上空の剣から一本ずつ千術箱に戻っていった。大蛇の居たあとには黒い煙が立ち込めていた。

「父さん！　すごい！」ランがシンに飛びついた。そこにアキムも駆け寄り興奮冷めやらぬ様子で言った。

「相変わらず凄い破壊力だ、久々に戦ったシンを見たよ！」

「すまない、俺も油断していた。ラン、心配かけたな」

「そんなことない！　父さんがこんなに強いなんて知らなかった」
興奮が冷めないランはさらにシンに抱きついた。

「おーい！　大丈夫か？」銃を腰にぶら下げた男が走って来た。

「おお！　あんたか、さっき助けてくれたのは」アキムが笑顔で男の肩を叩いて聞いた。

「ああ、うまく当たってよかった！　それにしてもあんた強いな」
それにさっきのは何だったんだい？」

シンが答えた。

「あれは恐らく魔人だ。私も話に聞いていただけだったから油断してしまった。

危ない所だった、助けてくれて感謝する！」シンは男の肩をアキム同様に叩いた。

男は頭を掻きながら照れくさそうに返事をした。

「いやゝ そんなに褒められると、まいったな」

アキムはその男が気に入ったのか、今度は肩を抱いて言った。

「いやいや、本当に助かったよ！ あんた名前なんていうんだい？」

「ああつ、サルージっています」

「サルージか、いい名だ。お礼に今夜一杯おごらせてくれ」

「いいねゝ！ だけど連れがあとから来るから宿を探さないといか
んので」

「なら心配要らない。俺の知っている宿があるから、そこに案内す
るよ」

そこに先ほどの蛇女の言葉を思い出したランが心配そうに言った。

「アキムさん、さつき街が・・・」

アキムの顔が一転した。

「そうだった、知り合いが心配だ。シン急ごう！」

「そうだな！ サルージさん、一緒に来てくれると心強いのだが」

「ああ、一緒に行くよ！」

思いがけない状況ではあったがランは一緒に街に行くことになっ
た。

シンとレイ

シンとレイ

オラルとスーランは日も傾いたころ、その街に着いた。

「この辺り、何があつたのかしら？」

「ああ、誰もいないな」

通りの家には人影も無く静まりかえっていた。

「サルージは何処まで行つたのかしら？ 私が野宿嫌いなもの知つて
いると思うけど」

辺りを見ながら二人が馬を進めていると先に見える家の煙突から煙
が上がっているのが見えた。

「ねえ、あそこに誰かいるのかしら？」

「そうだね、行ってみよう」

小走りに馬を走らせ、その家に近づくと何やら笑い声が聞こえた。
聞き覚えのある声にスーランが気付いた。

「あの笑い声！ サルージだわ！」

スーランが駆けだすのを見て苦笑いをしながらオラルが呟いた。

「あいつ、もう飲んでいるな・・・」

その家の馬止めに着くとスーランはすかさず馬を降り勝手に家に入
るなり呼び捨てた。

「サルージ！」

家の中にいた全員が振り向いた。

サルージはスーランに気がつくにあわてて椅子から立ち上がった。

「ああ！ スーランさん、いま迎えに行こうとしていた所です」

だいぶ慌てたのか酔つた勢いもあつてスーランに近づいたとき転
んだ。

「あはは、大丈夫ですよ　ちょっとつまずいただけです」

「大丈夫かい？ だいぶ飲んだからな」言いながらアキムはサルージを起こした。

「こりやまたべっぴんさんじゃのう」サルージのいい女かい？」カズチがスーランを舐めるように見て言った。

「冗談じゃないよ！」

スーランはサルージに近づくと頭を撫でながら言った。

「だいぶご機嫌だね」どれだけ探したと思っっているの」徐々に頭を撫でる手に力が入った。

「すいません！ ちょっと飲んですぐに迎えに行こうと思っていたんです！ 信じてください！」

サルージはスーランを拝みながら必死に御願いをした。

「まあまあ娘さん、何があつたか知りませんが許してやってください。サルージさんは我々の命の恩人なのです」シンが近づいて言った。

横目でシンを見たが腹立ちが収まらないスーランはサルージを見ると「恩人？ こいつが？ 今度は何をやらかしたんだい！」言いながらスーランはサルージの首を絞めた。そこにオラルが入ってくるとすまなそうに頭をかいた。

「スーラン、もういいだろ。何か事情があるらしい」

落ちる寸前のサルージを見かねて言うとしーランが乱暴に手を離れた。

「だんな、助かった・・・」

オラルがサルージを立ち上がらせると聞いた。

「サルージ、こちらの方は？」

「はい。ここに来る途中で知り合つて、それで一緒に来ました」サルージは首を摩りながら答えた。

「私はシンと申します。こちらが娘のラン、仕事仲間のアキム、そしてこの家のカズチです」

シンが順に紹介をした。

「さきほど魔人と思われる女の2人組に襲われまして危うい所をサルージさんに救われました。」

サルージさんがいなければ我々は今頃どうなっていたか」

オラルはサルージが命の恩人と聞いて抱えていた肩を優しく叩いた。

「そうですか、サルージがお役に立てて何よりです。ところでこの街、何があつたのですか？」

「はい、恐らく先ほどの魔人達により・・・幸いカズチは街から出ていて助かりました」

「魔人、西の国と何か関係があるのでしょうか？」

二人の会話に、ほろ酔いのカズチが割って入った。

「教えてやろう、魔人の国のアルセルデームが滅んだのじゃ。魔王を含め力のあつた魔人達は皆ことごとくやられた。それに乗じて下っ端の奴らがここぞとばかりに好き勝手を始めたのじゃよ。アルセルデームを滅ぼしたのはどうやら魔界の者らしい。奴らこの世界を自分達の世界にするために動き出したようじゃ」

「そんな！　じゃあ私達みんな殺されちゃうの！」ランがカズチに聞いた。

「さて、この先どうなるかはわしにもわからん」

「そんな・・・」

そこに息を吹き返したサルージが言った。

「ランさん、大丈夫ですよ！　こちらのスーランにかなう奴なんていませんから。それにシンさんの2人がいれば敵なんてありやしません！」

「スーランさん、でしょ！　調子のいい事言つて！」スーランはサルージの耳を持ちあげた。

「いたた！　ホントです」

さらにカズチがランの心配を払うように声を掛けた。

「確かにシンが居れば安心じゃよ。シンは魔人よりも強いからの」シンはスーランとサルージのやりとりに笑みを浮かべながら背負

つていた千術箱を外した。

「私ではなくこの先祖から代々受け継がれた千術箱が命を救ってくれた。過去にも恐らく今回と同じような事があったのだと私は思う。今の平和があるのは先人達が勝ち取ったものかも知れません」

「確かにそうかも知れんな。それで、これから皆はどうするのじゃ？」

シンが答えた。

「これから私はランを連れて家に戻ります。レイが心配ですので」

「そうか、じゃが夜が明けてからにした方が良いのではないかの？ 他にもうつろっている奴が居るかも知れんし」

「確かに。しかしレイが心配です」少し考えたがやはり胸騒ぎが収まらないシンは決断していった。

「それなら私だけ戻ります。カズチ、ランを今夜預かってもらえませんか？」

明日、レイを連れて戻って来ますので」

「まあ、シンなら夜通し走れば着くじやろうが。レイを連れて戻って来るとなるとな、ここも無事とは限らんし」

そこにオラルがシンに近づいて声を掛けた。

「シンさん、私の馬を使つて下さい。明け方までにはレイさんを連れて戻って来られるはずですよ」

「良いのですか？」

「はい、急ぐ旅でもありませんから。それに今日はこの辺りで宿を取ります。ランさんも皆と一緒に心配無いでしょう」

「ありがたい！ 感謝します！」

一刻も早くレイのもとに駆けつけたかったシンは、その申し出に遠慮はしなかった。

カズチが言った。

「皆、今日はこの家に泊るといい。シンよ、心配しないで行って来い！ あとは任せておけ！」

シンは月明かりを頼りに駆けていた。

（この馬はまるで私の家を知っているかのように躊躇せずに駆けていく。オラルさん、何者かは知らないが良い馬を持っている）
感じていたよりも早くにアキムの家の辺りを過ぎた。

（あの峠を越えればすぐだ！）

シンは家との距離が近づいてくると、急にレイの事が心配になってきた。

（レイ、無事でいてくれ！）

近道である峠の獣道を降りていくと家の辺りに火が上がっているのが見えた。

「レイ！」

シンが叫ぶと馬もそれに反応して速度を上げた。

家の近くに来ると火は家から離れた所で数か所燃えていた。

家の前に駆け寄ると叫んだ。

「レイ！ どこにいる！」

シンは馬から飛び降りると家の戸を開けた。

「レイ・・・」中を見渡したが家には誰も居なかった。

ただ暖炉に火が燦ぶっているのを見るとついさっきまでいたらしい。

シンは家の回りを探した。

「レイ！ どこだー！」

シンの声は山に響いたが返事はなかった。

シンは必死にレイの行きそうな所を全て探したが、どこにもいなかった。

気がつくと、うつすら日が昇ってきていた。

（何処にいったのだレイ・・・）

重い足取りで家に戻ると明かりの射した家の中に入った。

家の中は特に荒れている様子もなかったが、普段は使うことの無いシンがレイの為に作った剣が無くなっていた。

（何があったのだ・・・）

剣の置いてあった場所を見ていたとき、ささやく声がした。

シンは一瞬、身構えた。恐る恐る振り向くと普段と変わらないレイがいた。

「レイ・・・」

レイが歩み寄ってくるとシンは無意識のうちに警戒しながらレイに近づいた。

「シン・・・」

レイの目を見たシンは、いつものレイを見ると優しく抱きよせた。レイの温もりを感じ、安心したシンはレイを見て言った。

「心配したぞ、何があったのだ」

「ええ、昨日畑から戻ってきて食事の準備をしていたら山の向こうのお婆ちゃんが訪ねて来てシンは居ますか？　って。私がシンは街に行きました、と答えると急に態度が変わって、なら都合がいいって」

「お婆ちゃん？　トマ婆さんの事か？」

「ええ・・・」

「確か、トマ婆さんはろくに歩くことも出来ないはずだが」

「そう。不思議に思っただけで見ていたら急に鉈を持ちだして・・・咄嗟に私も剣を持つて。そしたら『冗談じゃよ』って、そう言っただけで帰ったの。外に出たら誰も居なくて、それで怖くなってあなたを追って街の方に行ったわ。だけどランが戻って来たらと火を熾して遠くから見ているの」

「そうだったのか、無事で良かった。ランは無事だよ、街で待っている皆の所へ行こう」

「そう、良かった。街には人がいるの？」

「ああ、仲間以外にもまだ居ると思う」

「そう！　では早く行きましょう！」

急に元気になったレイを、その時は変に思わなかった。

シンとレイを乗せた馬は、昼過ぎ辺りに街に着いた。
外で帰りを待っていたランが気付いた。

「あつ！ 帰って来た、父さ〜ん！」

ランが全身で手を振るとシンも手を振って返した。

「母さん！ ごめんね心配かけて」

レイが馬から降りるとランを抱き寄せた。遠巻きに見ていたオラル達は互いに微笑んだ。

「あれがレイさんかい？ こりやまた別嬪さんじゃのう〜」カズチが手を翳し覗きこむようにして言った。

「相変わらずスケベなジジイだよ」スーランが言うと、横からサルージがシン達のもとに走っていった。

「シンさん、疲れたでしょう」そういうと馬の手綱を持った。

「ああ、すまない」

シンがオラルに寄って言った。

「オラルさん、ありがとう。助かりました」

「いえ、レイさんが無事で良かったですよ」

「皆さんに心配かけました」シンはレイの肩を寄せて言った。

「私の妻のレイです」

「レイです」軽く会釈をして答えた。

「近くで見るとますます綺麗じゃの〜」

「ジジイ！」

「ランちゃんも、レイに似て美人になること間違い無しだ！」アキムの一言には皆が頷いた。

オラルがシンに言った。

「シンさん、晩まで少し休んでいて下さい。我々ももう少しこの街で情報を得てから発つことにしました。今夜はゆっくり皆で飲みましょう」

「そうですか、ならあとで食糧を取って来ます」

「シンさんいいって！俺たちに任せてゆっくりしてくれよ！酒も飯も十分に用意出来るからよ！」

サルージがアキムの肩を抱きながら言った。

「あんた達は飲めればそれでいいのでしょうが、まったく！」スーランが腕組みをしながら言い放った。

「あの、私も行っていいですか」ランがオラルに聞いた。

「そうだね、シンさんさえ良ければ」

「オラルさん達と一緒になら安心です。ラン、迷惑掛けるなよ」

「はい！」

「では一応サルージの馬を置いていきます。スーランとランちゃん
は俺の馬に乗るといい」

二人が馬に乗ったのを見たサルージが言った。

「こりゃあいい、なんか美人の姉妹みたいだよ」

「そうかい？　かわいい妹に手を出すんじゃないよ！」

「そりゃあもう！　わしもまだ死にたくないですから、さあ行きま
すよ」

サルージが手綱を持って歩き出した。

「それでは夕暮れまでには戻ります」オラルが言うとシン達を残し
て4人は街に出て行った。

街の中心付近は誰も居なかった。

「この辺りも昨日の奴らにやられているのか」サルージが言った。

「少し調べてみよう。サルージ、この先に人がいるか見てきてくれ。

スーランはランちゃんとここに居て様子を見ていてくれ。俺はあの
丘の辺りを見てくる。何かあったらいつものように知らせてくれ」

「任してくれ！　ついでに酒でも買ってくるよ！」サルージは腰の
銃を叩くと走って行った。

「サルージ、なにか嬉しそうだよ。何かあったのかね？」

スーランが言うと「ああ、そんな感じだ。最近妙に自信つけたのか
も」オラルが笑って答えた。

「そうだランちゃん。これを使うといい」

そういうとオラルは馬に括りつけてある一本の刀を取り出した。

「何も無いよりはましだから」

ランは馬から降りてその刀を受け取った。

「これ、こんなに立派なもの。オラルさんではないのですか？」

馬上からスーランが優しい口調でランに声を掛けた。

「ランちゃんオラルはね、あんたが気に入ったんだ。だから遠慮することないよ！ それにオラルはさ、刀は使わないから」

「そうですか、でも」

「抜いてごらん」

「はい」

ランはそつと刀を抜いた。

「これ・・・」

その刀はシンが作る物とは違い漆黒の輝きを放っていた。

「この刀は使う人の技量によって強くもなれば弱くもなる。ランちゃんにピッタリの刀だと思うな」

ランは嬉しそうに鞘に納めた。

「ありがとうございます。大事に使います」

スーランが馬から降りて「こうやって付けるんだよ」いいながらランの背中に刀を結び付けた。

「いいじゃないかい！ 似合っているよ！」

「ああ、ピッタリだ！」ランはちよつと照れくさそうだった。

「慣れるまではスーラン姉さんに教わるといいよ！」

冗談交じりにオラルがいうと、スーランは満更でもない様子で「そう言われると何だか妹に見えてきたね」と笑みを浮かべて言った。

「それじゃあ、行つて来る」

軽く手を振ってオラルは丘に向かって行つた。

「あの、スーランさん？ オラルさんはどうゆう方なのですか？」

「そうだね・・・正直なところ私もよく知らないんだよ。ただ何か安心していられるんだよね。前に私も助けられてさ、それから探して追いかけて。そんなこんなでいま一緒にいるって所かな？」

「そうですか・・・」

「まっ、そのうちわかるでしょう！　さてと、この辺り見てみようか」

「はい！」

「ただいま」

「待たせたな！　酒とイノシシ持ってきた！」

オラル達は日暮れ前にカズチの家に戻ってきた。

「どうだった？」アキムがサルージに聞いた。

「まったく何処も彼処も誰もいやしない。まあ街外れに何人かはいたけど。皆逃げ出す支度をしていたよ」

「そうか。たいして人の多い街じゃあ無いから、何とか逃げ延びてくれればなあ」

「ラン？　それは？」シンがランの刀に気付いた。

ランは刀を外して見せた。

「オラルさんが使ってくれて」

オラルがランの肩をポンッとたたくとシンに言った。

「ランちゃんに使ってもらうのがいいと思って。大した物ではないので気にしないで下さい」

「そうですか、何から何まで」

それから皆の話では期待したほどの収穫もなかった。

日も暮れたころ食事を始めた。

「だんな、これからどうします？」サルージが聞いた。

「そうだな、ここでは情報が入らないから。カズチさん、ここから何処へ行けば情報など入りますか？」

「そうじゃの、イタリア川を渡ってヨマダイの国か南のハルディ

ス国か。ハルデイスはアルセルデームの隣の国じゃから危険じゃ。ヨマダイへみな逃げ出しておると思われるから、そちらの方がいいじゃろ」

「そうですか、ではそのヨマダイへ行ってみます。シンさん達はどうしますか？」

「この辺りも安全では無い以上、留まることは出来ませんし」

スーランがオラルに聞いた。

「ねえ、ルードシアのマリーさんの所なら安心なんじゃない？」

するとサルージが、ぽん！と、手を叩いて言った。

「そうだ！ あそこなら不自由しないさ！ なんせ守護神様もいるらしいからさっ」

「ルードシアですか。確か大きな湖に囲まれていて独立している国だとは聞いたことはありますが」

少し先の見通しが見えて顔の和らいだシンにスーランが言った。

「でもサルージみたいのがいっぱい居るから気を付けてよ！ ランちゃんは特に！」

「勘弁してくださいよ。まるで変人扱いじゃないですか。俺ぐらい良い男はなかなかいませんよ！」

「アハハ、サルージはいいやつだよ！ まあ好き嫌いはあるだろうけど？」

そこでカズチが言った。

「ルードシア、隣の国じゃがこの歳まで行った事がないしの。アキムよ、どうする？」

「ここも安心出来ないから、シンが行くのなら俺も一緒に行くよ」

「そうじゃのう。一度ここを離れた方が良いかも知れんな。そのオラルさんの知り合いのマリーさんのところへ暫く身を寄せてもらうかの」

「そうと決まれば今夜は一杯やろう！」サルージがうれしそうにコップを持ちあげていった。

マド様！現わる

マド様！現わる

深夜、皆が寝静まった頃にアキムが用を足しに外に出た。
外は雲一つなく満月の月明かりに照らされていた。

「はあ、きれいなお月様だよと！」

ブルブルと体を震わせ、まだ酔いも冷めやらぬなか鼻歌交じりに用を足し終えて振り返った時だった。

「うわっ！？ レイ？」

「ええ、驚かしたみたいね。なにかしら目が冴えちゃって。見て綺麗な月・・・」

酒で火照っているのか月明かりなのかは分からなかったが月を見上げたレイは妙な色気を出していた。

胸のふくらみが少し覗きスラリと伸びた足が月明かりでその輪郭をとらえていた。

アキムは変にドキドキしながら見惚れた。

「アキム、ねえ・・・少し歩かない？」

「えっ？ ああ、いいですよ」アキムには断る理由が無かった。

いまでこそシンとレイは夫婦ではあるが、幼馴染とはいえアキムも幼少の頃からレイに好意を持っていた。

歩くレイの後ろをついていきながらその色気のある腰付きに見入ってしまった。

家から少し離れた所でレイが聞いて来た。

「街に人は居なかったのでしたっけ？」

「ええ、昨日の２人組みの女に食われたのではないかと、何かおか

しなことになつてきていますね」

「その女を倒したのでしょうか？」

「ええ、サルージとシンが。そりゃあ見事なものでしたよ！ レイにも見せてやりたかった！」

酔いの勢いもあつてかアキムは得意げに答えた。

「そう・・・ではいま襲われたら・・・アキムは私を守ってくれる？」

じつと見つめてくるレイにアキムはドンッと胸を叩いた。

「もちろん！ 任せてください」

「よかった・・・」

そういうとレイはゆっくりとアキムに近づいて抱きしめた。

「なっ・・・」

アキムは金縛りに遭つたようにそれを拒否できなかった。

アキムはレイの胸のふくらみがゆっくりあたるのを感じるとそれに逆らえずレイの背に手を回し抱き寄せた。

肌の温もりをお互いが感じるとレイがささやいた。

「ちよつとお腹空いてきちゃった」

「えっ？」

すると抱いている手の感覚が硬くなるモノを感じた。

アキムはレイの腕以外にも全身を抑えられるのを感じ、酔いが一気に冷めた。

「なっ！」

危険を感じ咄嗟に助けを呼ぼうとしたが胸を圧迫されていて声が出せなかった。

「二人のお返しをさせてもらふよ」レイの声が低く擦れた声に変わった・・・

レイの顔はそのままに身に着けていた衣服は裂け背中には羽根が生えると腕は鎌の形に変わっていた。

さらにレイの口が横に大きく開くと鋭利な歯を持ったカマキリに姿を変え、シャー！と声を発するとアキムを丸飲みにするべく頭上で大きく口を開けた。

「まて！」

静かに歩み寄って来たオラルに気がつくのと口を縮めていった。

「なんだ・・・そこで待っている、次はお前だ」

「その前に聞きたい事がある。お前たちはアルセルディムの魔人達とは少し違う、何処から来た？」

「魔人だと？ そんな下等なモノと一緒にするのではない！ 我々はジェラ様より生を受けた妖魔人！」

そしてジェラ様の命によりこの世界を我々妖魔人のものとする！」

外の物音に気付いたシンが走ってくるとアキムを鎌で抑えつけている大きなカマキリを見上げた。

「オラルさん・・・これは」

「どうやらレイさんに摂り付いていたらしい」

「なっ！ これがレイだって！？ そんな・・・」

確かにレイだと気付いたのはアキムを抑え付けている辺りがまだ女の姿を残しさらに完全に顔は変化しておらず、かすかにレイの面影を残していた。

「なんだ？ 1人ずつ食ってやろうと思ったのに。まあいい、まとめて食ってくれるわ！」

カマキリになったレイが再びアキムを丸飲みにしようとしたとき、バシッバシッと大きく開けた口に石飛礫が当たり一瞬怯んだ。

「やめて！ 母さん！」

ランが駈け寄ってくると異変に気付いたサルージとカズチも続いた。「なんてこった！」

ランの声にカマキリの中のレイが少し正気を取り戻していた。

「ラン・・・いま・・・待って・・・いて」

「レイ、今助ける！ 待っている！」シンが飛び出そうとしたのをサルージが抑えた。

「まったシンさん！ 攻撃するとレイさんも死んじゃうよ！」

確かに手を出せばレイにも危害を加える事になってしまう。それはシンも良く分かっていたが気持ちを抑えられなかった。

再びカマキリが正気を取り戻すと一同を見渡していった。

「揃いも揃って、これでもくらないな！」カマキリは羽を広げ、間髪入れずに突風を送り出した。

それを2度、3度と受けた一帯は木もろ共なぎ倒されて吹き飛んだ。

ランは咄嗟に飛ばされる木から木へ飛び移って逃れ、シンとサルージは地に剣を突き立てなんとか凌いだ。カズチは家の辺りまで飛ばされ転がっていた。

「くそつ！ これじゃあ近づけない」シンが突き刺していた剣を抜くと構えをとった。

「母さんどうしたら・・・」ランがシンに寄り添って言った。

「近づいても手を出せない・・・」シンはランを抱き寄せて悔しさをにじませた。

「お前達が最初から勝てる望みなんて無かったのさ！ この体を手に入れた時からねえ！」

するとカマキリの後ろにいたスーランが声高々に言い放った。

「そうでもないさ！ 私達を誰だと思っているんだい！」
「なに！」

カマキリが振り向くと自信たっぷりに構えたスーランを見た。

スーランはランに手でこっちに来るように合図をした。

何の事か訳も分からずにスーランを見た。するとスーランはカマキリの羽に飛びつくとカマキリの全身を雷が走った。

カマキリは全身が痺れ掴んでいたアキムを離し、少しのあいだ身動きが取れなかった。

「スーラン、アキムまで痺れているぞ。可愛いそうに」オラルが何処からともなく現れた。

「そうかい？ だいぶ抑えたつもりだけど？」

「さてと・・・」

オラルは痺れて動けないカマキリの頭までトントントとのぼつていくと驚掴みにした。

「なっ！ なにを！？」

痺れて抵抗出来ないカマキリに言った。

「あんまり悪さするんじゃないよ。スーランが喜ぶだろう？」

オラルが含み笑いを浮かべ、両手に力を込めると黒い煙が立ち込めてきた。

「がああ！ やめろ！」

オラルがカマキリの口元から人のような黒い気体を引きだした。するとカマキリは見る見るうちにレイの姿に戻っていった。

「レイ！」

「母さん！」

シンとランが駆け寄り徐々に裸体になっていくレイにシンは自分のマントを掛けた。

「シンさん、大丈夫ですよ。少ししたら気を取り戻します」

オラルが声を掛けるとシンは涙を浮かべて微笑んだ。

「さあ、ランちゃん！ こいつを切ってくれ」

採り付く人がいなくなった黒い気体はオラルの手の上で風船のような気体に包まれその中で必死に逃げようとあがいていた。

「助けてくれ！ なんでも言う事聞くからたのむ！」

その中から逃げる事が出来ないと確信したシン達はオラルの回りに集まった。

「そうか、じゃあ一つ聞く。ジェラ様とは何者だ？ そいつは何処にいる？」

「でも本当に逃がしてくれるのだろうな！ 約束しろ！」

「いいだろう、わかった。俺は逃がしてやる」

「えっ？ 逃がすのですか？」ランがなぜ？ という顔で聞くとすかさずスーランが言った。

「まあ、見ていなよ！」

とりあえず逃げるのを止めた黒い気体はオラルを疑いながらも話し始めた。

「ジェラ様はザルギスに居られるただ一人の人間。そして大魔術師だ！ 魔人と共にこの世界を奪い、そしてそのあと魔人共を殲滅するためにひそかに我々が生み出された。だが魔人に匹敵するほどの戦力は今は無い。だから人間にとりついて戦力を増やす。食べた人間はジェラ様が妖魔人として新たに命を吹き込む。どうだ？ すばらしいだろう！ いずれこの世界は妖魔人のものとなる！」

今度は自慢げに風船の中をぐるぐると回り始めた。

「大魔術師のジェラ？ 誰か知っているかい？」オラルが皆に聞いた。

「さあ？」

「聞いたことない・・・」

「ジェラート？ なら」

「それをいうならジュレじゃないのかい？」

「・・・」

「おい誰も知らないぞ・・・」

「なに！ 知らないだと！？ 確かに海の方のそのまた大陸の方の」

声が徐々に小さくなるとスーランが黒い気体に近づきバチバチと雷を発する両手で言った。

「嘘つきは死刑だ・・・」

その仕草が楽しそうに見えたのはオラルだけでは無かった。

「ちよつと！ 本当ですって！ やめて！ 約束したでしょ！ このうそつき！ うんこたれ！ ばか！ あっ、いえ・・・うそです。ねえ」 ゆるして」 おねがい！」

「・・・元々の人格は・・・オカマ？」

スーランが覗き込むように見ると口が《へ》の字になって両手で胸を抑える仕草をしていた。何だかその仕草、愛嬌に少し同情した。

オラルが気体を撫でて言った。

「まっ、今度生まれ変わったらもっとマシな人生を送れよ！ さあ、ランちゃん！」

「やめて！ おねがい！」 まだ死にたくない・・・やめろ！ この野郎！ 食っちまうぞ！ この・・・出せたら出せ！ ちよつと聞いているの！」

ランはどうしたらいいか分からなかった。

「あの、私じゃなくて・・・父さんお願い」

「ラン、あいつを逃がしたら次に採り付かれた人を切らなくてはならない。それがもし父さんならランは切れるか？」

「えっ、でも・・・」

「ひと時の感情に流されるようだったら二度と剣は持つな。『生と死』この二つは共存出来ない」

「・・・わかった」

まだ決心のつかないランにオラルが言った。

「ランちゃん、俺はこいつを逃がすと約束した。だからこいつをランちゃんに向けて投げる。こいつが逃げる前にどうするかはランちゃん自身が決めてくれ」そういうとオラルはもう一方の手をかざした。

すると気体が真っ白になり、中は見えなくなった。

「ああ」 たすけて！ もうなんでもしますから！」

「それはランちゃんに聞いてくれ、いくぞ！」

そういうとオラルはランに向けて、真っ白な気体を投げた。

「えっ！？ あっ！」

近づく気体にランは思わず目をつぶり迷いながらも刀を振り切った。

2つに分かれた気体はランの後ろに流れていた。

刀に受けた感触を確かめるように恐る恐る振り返ると黒と白の入り混じった気体から少しずつ黒い気体だけが蒸発していった。残った白い気体が手のひらほどの大きさになってその場に漂っていた・・・

「んはあゝ！ あれ？ あたし何していたのかしら？ ここは誰？

私はどこ？ あなたかわいいわね」

でも化粧のノリがよろしくなくてよ！ やだみんなジロジロみて、食べちゃうぞ！ あは！」

その小さな気体はさらに小さな羽を一生懸命に動かしている。

綿のような体にマシユマロのような手足に化粧をしたオカマ？

の顔をしていた。

フワフワ飛ぶとランの肩に乗って来た。

「お譲ちゃんお歳いくつ？ お化粧のしかた教えてあげてもいいことよ」

新しいおもちゃ？ を見つけたスーランが走ってくると親指と人差し指で掴んで持ち上げた。

「なゝにゝ この生き物？」

「ちよつと痛いじゃないの！ もう変態！ わたしデリケートなの！ だれ、あんた！ ん・・・オバン！」

「誰がオバンよ！ 握りつぶすわよ！」

「うそですよゝ けどもう少し前髪上げた方がいいわねゝ！」

「かわいい・・・」

「えっ？ ランちゃん・・・これが？」

「はい！ かわいくないですか？」

ランが両手でスーランから受け取るとオラルが近づいてきて言った。

「アハハ、そいつはランちゃんが気に入ったみたいだよ！」

「はい！ でもこれなんですか？」

「たぶん、そのジエラとかいうのが人から抜き取った魂ってところかな。ランちゃんがその刀で切るときの心の迷いがそいつを成仏させなかったのかも」

「じゃあ私のせいで・・・」

「まあ、害は無いからランちゃんが面倒みてやってよ」

「はい、分かりました。よろしくね！ えっと名前・・・」

「お・か・ま・で、いいんじゃない？」 スーランが冷やかしかげに言った。

「だめです！ ちゃんと名前つけてあげないと」

「おゝおゝ 急に強く出たね」

「だって・・・」

スーランに押され気味のランをかばうようにそいつがスーランに言った。

「なにちよつと、あ・ん・た！ 私にだってちゃんと名前ぐらいあるのよ！ 今日からマド様！ とお呼び！」

「マド？ へんな名前」

「なによ、オバン！ やる気！」

「やってやるうじゃないか？」

「・・・ラン！ やっておしまい！」

「わたし？」

「そうよ！ ご主人様の言う事がきけなくて！？」

フワフワ飛びながら短い拳を振りまわすその姿にオラル達は笑いを

抑えられなかった。

「ラン、しっかり面倒をみるんだぞ」

そう言うシンの眼差しはとても優しくった。

「それにしてもサルージよ。あんた達は何者なんだい？」アキムが聞いた。

「何者つていわれてもなあ、旦那に聞いてみてくれ。俺も良く知らないんだ」

「そうだな、ぜひ私も聞きたい。」シンがオラルにたずねた。

「旅の目的は人探し。で、そいつら集めてこの世界を平和にする事かな。ありきたりだけど」

「平和ですか。しかしあなた方を見ていると信じられる気がします。なによりオラルさんにはなにか不思議な力を感じます」

「そんなことはないですよ、たいして一人では何も出来ませんし」

「いゝや！ あんたにはとてつもない何かを感じる！ わしの目に狂いはない！」

先ほど家の辺りまで飛ばされたカズチが杖をついてやって来た。

「カズチ大丈夫かい？」アキムが寄っていくと手を貸した。

「ああ大丈夫。オラルさん、あんた達なにかとてつもないことをやるうと考えてないか？ 『世界の平和』 あれは本心なのではないのかい？」

「さあ、正直なところ私にもわかりません。ただ時が来たと感じています」

「たしかに何か動き出しているようじゃ」

そこにフワフワとマドがきた。

「ちよっと！ いつまで食っちゃべっているの！ お腹が空いたわ！ 行くわよラン！」

みんな呆氣にとられたが、そのうち笑いが込み上げてくると一斉に笑いだした。

「なにちよっと？ 何がおかしいの！ ラン！ やっておしまい！」

山肌から朝日が昇るのを笑い声が迎えていた。

バトルシップ 武蔵！

バトルシップ 武蔵！

次の日の早朝、オラル達とシンの家族はそれぞれ別の道に進むことになった。

「ではシンさん達も気を付けて。それからマリーさんによろしく伝えてください」

「はい、色々とお世話になりました。ランの事、よろしく願います。ラン、オラルさん達と一緒にだからって修行を疎かにするのではないぞ」

「はい、今度父さんに会うときは・・・私の方が強くなっているわ！」

「それは頼もしい、十分に気をつけてな」

「はい・・・母さんも元気で」

「ラン、困ったらいつでも会いに来てね」

「ちょっと！？ 私のこと忘れてない？ 私がいれば鬼のキンタマでしょ！ 私を誰だと思っているの！まったくう！？ んっ！？」
スーランがマドの口を塞いだ。

「あんたは空気読めないの？ いいところなんだから邪魔しないの！」

「マド、ランを頼んだぞ」

シンがスーランからマドを受け取ると優しい口調で話した。

「おっ？ おう・・・任せなさい！ ブサイクな大人達からしっかりと守ってあげるわ！ 特にこのサルージ。だいたい髭の生やし方にセンスの欠片も感じられないわよ。まっ、そのうちわたしがっ！？ んっ！？ んん！」

今度はスーランが首を掴んだ。

「まったく調子に乗って！ さあ、ランちゃん後ろに乗って。いきましよう！」

互いに別々の道を進み始め街道の曲がる手前でランは大きく手を振った。

「ラン、一緒に行かなくて良かったのかい？」

『ランちゃん』とは呼ばずにスーランが気を使って声をかけた。

「別れるのは寂しいけど、でもこの世界の事もっと知りたいしオラルさんから頂いたこの刀を一人前に扱えるようになりたいから」

「あれ？ れれ？ ラン、私がいるから寂しくないんじゃない？
どうゆうこと？」

マドが、フワフワとランを中心に回った。スーランがランに「ラン、もう一度切ってみなよ。今度は大人しくなるかもよ？」という「ちよつと！ バカ言っているんじゃないわよ！ ハゲてんじやない！ ラン！ やっておしまい！」ランの影に隠れるように拳を突き上げてマドが返した。

そんなマドをランが優しく掴むと顔を近づけた。

「マドがいるから私、寂しくないわ」

ランに見つめられたマドはドキドキして言葉に詰まった。

「そつ、そ・・・そうでしょ！ わたしがいれば・・・ちよつとそこの変態！ 聞いたでしょ！」

フワフワ飛ぶとランの頭の上で中指立てスーランにいった。

「はいはい、カマのくせになく照れてんだか？」

「ランちゃんにとっては頼もしい相棒が出来たわけだ！」

サルージがマドを見ると「ちよつとそこ、相棒ですって？ ご主人様は、あ・た・し・！ 勘違いしないでちょうだい！」マドはサルージを指して注意した。

「アハハ、さすがのサルージも太刀打ちできないか。ところでマド、なにか出来るのか？」
オラルが訊ねた。

「何が出来るかですって？ 失礼しちゃう！ 私に出来ない事なんてあんまり・・・ない？ かな？ いやゝ あったりして！？ やっぱり謙虚でないといけないと思うのよね、人として？ それぞれ得意な事があっていいと思うの・・・違う？」横目でチラリと見ながら話すと「ああ、分かったよ」オラルは含み笑いで返した。

「ちよつと、なに！ 残念な顔して！ 出来ない事なんて無いわよ！ 失礼しちゃう！」

そこへ小走りに高台に駆けで行ったサルージが眼下に見える大きな川を指した。

「だんな、見えてきましたよ！ あれがイタール川ですよ！」

駆け寄ったスーランも「いやゝ 話に聞いていたよりも随分大きくないかい？」手を翳した。

「ああ、この大きさじゃ橋は無さそうだ。川沿いに沿って船を探すしか無いな」

川沿いまで来たオラル達一行は道行く人に訊ねた。

「この川を渡るには何処へ行けば良いですか？」

すると商売人風の三人組の中の一人が不思議な顔で答えた。

「この川は誰も渡らないよ？ あんたたち知らないのかい？」

「えっ？ はい、でもどうしてですか？」

「以前は船で渡れたのだが、ここ最近出る船がみんな帰って来なくなつたのさ。何か得体の知れないモノが沖に居るって噂だよ。だから河口近くの川幅が狭くなっている橋まで行くのさ」

「そうだったのですか。では、みなさんもそこへ？」

「ああ、そうだ。まあ、三日ほどかかるがね」

お礼を言うと三人は「気を付けて」というと歩いていった。

「だんな、どうします？」

「やはりその橋まで行かないと駄目かな」

「でもさ、近くに船でもあれば渡れるでしょ？ 川に居る奴を退治

すればいいんじゃない？」

「そのの！ あたし泳げないの！ 橋まで行くに決まっているでしょ！」スーランにマドが突っかった。

「へえ」 あんた水が苦手なんだ・・・というか飛べるやつが気にするか？ そうだ！ あんたちよつと行って船を探してきなよ！」

「はいっ？ そんな手には乗らないわ。そういうのはオバンが行けばいいんじゃない？」

スーランがこめかみをピクピクさせるのを見たランが言った。

「オラルさん、私とマドでちよつと先に行つて見てきます」

「ちよつとラン、なにを言っているの？ 船なんかで渡つたら危ないでしょう！」

マドがランの髪を少し引つ張りながら抵抗した。

「そうか・・・ならこの馬で行くといい」オラルが馬を降りるとランに手綱を渡した。

「いいのですか？」

「ああ。マドには今夜の宿を探してもらえると助かるのだが？」

「は」 しょうがない。やっぱり私が居ないと駄目ね」 いいわよ！ いいところ探しといてあげる。そのかわり高くつくわよ」ニヤリとマドの扱いを分かってきたオラルは脇のポケットから短い帯を出した。

「ランちゃんこれを着けて。それからこの小さい方はマドに」

「これは？」

「これはこの馬の尻尾で作った帯だよ。身に着けておけば離れていてもこいつが探し出してくれる」

ポンポンと馬を叩いた。

「そうなのですか、お利口なですね」

「ちよつと！ 尻尾つて！ ウンチとか付いているんじゃないか？ あんたそういう癖があるの！ ラン！ 騙されちゃだめよ！ ちよつと！ ラン！ やめっ！ あっ、こら・・・」

「アハハ、似合っているよ！」

強引にマドの首に巻き付けたランを見て『お揃いでいいじゃない？』スーランが笑っていた。

クンクンと匂いを嗅ぐマドに「では、船を見つけたら戻って来ます」そういうとマドを頭に乗つけた。

「ああ、ゆっくり追うから」

楽しそうにランとマドは駆けて行った。

「さてサルージ、ランちゃんが心配なんじゃないの？」

「えっ？ ああっ、わかりました。また見つからないように見ておけばいいのでしょうか？ 行きますよ」

「さすがはサルージ！ しっかり頼むよ！」スーランが馬を渡すとサルージは「はい、しっかりと仕事をしてきます」いいながら渋々駆けて行った。

「オラル、サルージもだいぶん分かってきたんじゃないかい？」

「ああ、でもまだまだ銃を扱えていない。今のままでは【奴ら】に太刀打ちできない」

「そうだね。で？ ランはどうなの？」

「ランちゃんは優しい子だから、あの優しさが強さに変われば刀の持っている力を発揮出来ると思うよ。」

俺が言うのも何だがあの刀はとんでもないから」

「へー その刀の本気を見てみたいね」

「そのうち見られるかも知れないよ。サルージにもなるべく早く使いこなしてもらいたいよ。さて、どっちが先に使いこなせるか」スーランは改まってオラルに聞いた。

「わたしはどう？ ちゃんと使いこなしている？」

「ああ、でもそれ以上は使い手次第だよ。なんなら相手をしようか？」スーランの目をジッと見た。

「ちよっと・・・ドキドキするからやめておく」

それなりに恥らいながらも胸に手を当ててスーランは照れ笑いで返

した。

「冗談だよ・・・」

「ちよつと！」

その頃、ランは川岸を気持ち良く走っていた。

「ラン？ 本気で船なんて探してない？ 適当に休憩すればいいんじゃないくて？」

「駄目！ マドは飛べるからいいけど私達は船で渡るしかないの。マドが大きい船にでもなつて私達を連れて行ってくれるならいいけど？」

「ん？ そうね、ランだけならいいけど？ 他は嫌ねゝ だって臭いから？」

あれっ！？

「えっ？ マド本当なの！？」

「ちよつと！ あたしあんたのご主人様でしょ！ あたしに出来ない事なんてないの！ でも皆には内緒よ！」

「そうなんだ！ すごいね！」

「ちよつと！ 内緒だつて言っているでしょ！」

「分かった！ 内緒にする。で、他には何が出来るの？」

「それは、ヒ・ミ・ツ。だつて謎めいている方が魅力的でしょ？」

「そっか、でもマドが人の姿だつたらこういう格好しているのかな？ 顔とか」

「ちよつと！ あたしが人の姿になったら世の中の男はイチコロよ！」

「そうなんだ？ 女性じゃなくて？」

「男も女もよ！ ランもあたしに惚れちゃうから！」

「へえゝ」

「あら？ なにラン？ 疑っているの？ まあいいわ、その時になつたら驚くんだから！」

マドの話に笑いながら走っていると視線の先に入江が見えてきた。

「マド、あそこに船がありそうね」

近づいていくと数艇の舟があり、その幾つかの舟には荷が積まれていた。そして入江の出口の辺りに一際大きな船があった。

ランは舟の男に近づいて聞いた。

「すみません、この舟はヨマダイの国に行かれるのですか？」

「ああ、でも舟は出せないよ。まだ死にたくないからな」

「でも、荷物を乗せていますよね？」

「ああそうだよ。ほらっ、あの船を見なよ。これから軍隊が沖の化け物を退治しに行くのさ」

男が沖の出口に泊っている大きな船を指していった。

「無事に済めばまた川を渡って商売が出来るのさ、だから荷を積んで待っているってわけさ」

「そうなのですか」

礼をするとランはその軍船に向かった。

「ラン？ あんたひょっとしてバカな事を考えてない？」マドはランの顔の回りをグルグルと回りながら聞いた。

「ちよっと話を聞くだけ、心配しないで」

軍船の近くに來たランはその大きさと造りに圧倒された。

「すごい！ こんな船はじめて見た」

「そう？ あたしどうかでこんなのがいっぱいあるのを見た事があるわ？」

「本当に？ どこで？」

「んゝ そうね・・・思い出せないわ」

「そう・・・でもこの船なら大丈夫ね！ すぐにも渡れるようになるんじゃないかな」

興奮気味のランはますます近くに寄って行った。

「おい、民間人は近づいてはならん！」近づいてきた兵がランに言った。

「おっ？　なんだ？　かわいい顔して。お嬢ちゃん、その剣はオモチャか？」

顔の大きな少し顎の長い兵がニヤニヤと冷やかしていった。

「えっ、いえ違います！」

「ちよつと！　そのあご！　あんた達じゃ殺されに行くようなもんでしょ！」

マドが冷やかし返しに自分の顎を伸ばした。

「なんだと？　この船に誰が乗るのか知らねえのか？」

「あごの顔じゃなければ誰でもいいんじゃないかって！？」マドはさらに長く自分の顎を餅のように伸ばした。

「ワハハハ・・・なに！？　こいつ燃やしてやる！」近くのかがり火を手に持つとマドに近づいてきた。

「ああ、違うんです！　マド！　誤って！」ランが馬から降りてマドをつかまえようとすると、ふんつ！

と上空に逃げた。

「すいません、悪気はないので・・・」

「まあいい、かわいい嬢ちゃんに免じて許してやる。それより危ないから帰んな」

男が、かがり火を戻すと視線の先に近づいてくる一団を見た。

「嬢ちゃん！　そこ邪魔だ、どいて！」ランはいわれるまま端に寄った。

すると待ち構えていた兵達が一斉に整列をし、その列は船の乗り口まで続いた。その一団がゆっくりと歩いて来るとその中に長身で地面に着きそうなマントを身に着けた人がいた。

その男は通り過ぎる時にランの馬を見、そしてランを見るとフツと微笑んだ。その一団が船に乗り込むのを見届けるとランが聞いた。「あの人は？」

「ああ、獣人界の貴公子、エルード様だ」

「獣人？」

「なんだ？ 知らんのか？ 嬢ちゃんどこから来たんだ？」当たり前前に聞かれて答えられないランは少し悔しくなつて返した。

「私はミンの・・・剣術師です」

「そうか。まあ、良く見りやそれオモチャには見えんな」

刀にプライドを救われたような気がして、さらに悔しくなった。

「お譲ちゃん、怪我しないうちに帰りな」

そう言い残すと整列をしていた兵達は順番に船に乗り込んで行つた。

ランは悔しさを滲ませつつもただ見送るしかなかった。

「ちよつと、ラン！ もつと言い返しなさいよ！」

マドが短い拳をブンブン振っているその後ろから声を掛けられた。

「ランちゃん悔しいんだろう？ だったら船に乗ろう！」振り向くと、なんとそこにサルージがいた。

「サルージさん？ どうして？」

「ちよつと、髭！ バカな事言うんじゃないわよ！」マドが食つてかかった。

「いいから、さっ！ 船が出ちまうよ！」さつさと馬の手綱を引っ張つて船に向かった。

「えっ、ちよつと！ サルージさん！？」

「ラン！ 行く必要もなくてよ！ ちよつと！」サルージはランを置いて走つて行くと、船と堤防を繋いでいる橋を外しにかかっている兵に慌てて駆け寄ると言つた。

「ちよつと待つてくれ！ 俺たちも乗る！」

「はあ？ という顔を兵がすると「なに言っているんだ？ 軍人以外は乗る事は出来ない」当然のように断られた。

ランが追いついてサルージを見ると「我々はエルード様の御供の者です！ これを・・・」そう言いながらサルージは包みを差し出した。それを見た兵は「・・・そうか、エルード様の御供か？」含み笑つと言つた。

「はい」

「まあ、それなら・・・ゴホン！ 急げ、すぐに出るぞ！」

「すまねえ！ ランちゃん、急いで！」

ラン達の乗りこんだ船はその世界に名を轟かせていた最強の名を持つ《MUSASI》という軍船だった。

四方八方に大砲や機銃を構え戦闘時に備えての小型から大型の戦闘艇を要し船の中央の辺りには見慣れない金属で出来ている柱があり、常に虹色に変化するその先端には幾つかの星座を模した球体があった。

その回りには魔術師と思われる数名が何やら話し合っている。

ラン達は、それらを見ながら船の端を歩いて後方のデッキに落ち着いた。

「凄いですね・・・」

「ああ、どの戦いでも負け知らずだって話だ。なに、心配いらないよ」

「ちよっと、髭！ ランに何かあったら責任取ってもらわよ！」

「マド、心配いらんよ。こいつがあればどんな奴でもイチコロさっ

！」サルージは得意げに脇に抱えている銃を叩いた。

「それ、この間私達を救ってくれた銃ですね」

「そうさ！ 魔人だろうが何だろうが、こいつで1発よ！」

「髭！ 調子に乗っているんじゃないわよ！ そんなもの本物の魔人衆には効かないわよ！」

「ワハハハ！ 心配するな！」サルージの高笑いが聞こえたのだろうか、あの長身のエルードが近づいて来た。

「ちよっと、髭！ タダ乗りがばれたんじゃないの！」慌ててマドがランの頭の後ろに隠れた。

エルードがランに歩み寄ると馬を撫でながら聞いた。

「お譲さん、この馬の持ち主ですか？」

「あつ、いえっ！ 借りています。あの、一緒に旅をしている人に」
「そうですか。この馬の持ち主はどういう御方ですか？」

「えっ、あの・・・」

「こいつはワシのだんなの馬ですよ！」横からサルージがいうと得意げに馬を叩いた。エルードはサルージを相手にせずにランに聞いた。

「後ろに隠れているのは一見、魔人のようだが？」

「いえっ、この子はマドつていいいます。元は妖魔人でしたがオラルさんの御蔭で今は私の友達です」

「妖魔人？」

「はい、妖魔人はオラルさんが倒しました。この子は妖魔人が摺り付いていた元の人の魂みたいなものです。いつか人に戻してみせます」ランはマドを見つめていうとマドは大粒の涙を流した。

エルードはマドを見ながらハル獣隊長を思い出していた。

「そうですか、そのオラルさん？ とは今何処に？」

「あの、あとから付いて来ていたんですけど・・・」

「なるほど、では用事が済んだら是非そのオラルさんに会わせていただきたいのですが」

「あつ、はい。分かりました」

エルードは馬を撫でると笑みを浮かべて行つた。

「まったく！ スカしたやろうだぜ」サルージが言うとマドが言った。

「なにさ！ いい男じゃないの、ねえラン？」

「ええ、そうね。でもこの馬のことを気にしていたけど」

「確かに。旦那といい何者なんだか！？」サルージとランが馬を撫でていると兵への号令が聞こえた。

「全員配置に着け！」

何やら、慌ただしくなってきた。

「ラン！ あれ見て！」マドが上空から叫んだ。

川を見ると軍船の先で小さい渦が幾つも巻いている。それが段々と近づいて来るのがわかった。

「こいつの出番か！」サルージが銃を渦に向かって構えた。渦は次第に船を囲んだ。するとバリバリと虹色の光が見る見るうちに船の回りを包んだ。

「これは！？」

ラン達が見上げると船の中央にあった虹色の柱が光を放っていた。それは魔術師達が柱を囲みそれぞれが手や杖を翳して船全体を包むように結界を創っていた。

「何が起こるの！？」

「分からないが、タダごとじゃ無さそうだ」

渦は様子を見ているのだろうか？　しばらく動かなかった。

「砲撃用意！」

砲台の指揮官が声を上げるとそれぞれの砲台が渦に狙いを定めた。

「撃て！」

一斉に渦を目がけて放たれたが、波しぶきを上げただけで終わった。

「どうなった？」

兵達が見ると、それぞれの渦の中心から撃ちこんだはずの砲弾が水面に出てきた。

そして水柱が砲弾を持ちあげ伸びると・・・その高さは船を見降ろした。すると何処からともなく声が聞こえた。

「こんなもので何をしようというのだ？」

水柱が弓状にになると一斉に船を目がけて放たれた。

その砲弾は船の結界に弾かれた。

「残念だったな！ この結界の中には誰も入る事は出来ないのだ！」
指揮台から船長が得意げに言い放った。やがて砲弾の煙が消え水柱がゆっくり下がっていくと、それは船の指揮台の高さ辺りで人の形に変わった。

「ランちゃん、何だあれ？」

サルージが船の回りを見渡すと同じモノが幾つもあつた。その指揮台に一番近い水柱の一つからさらに黒い水を纏った人の姿をしたモノが出てくるとそれが言つた。

「わざわざ殺されにくるとは人間とは愚かな生き物だな」

「あいつは！」

エルードがデッキを駆けあがると指揮台から身を乗り出した。

「さて、今回は御たいそうにそんな物持ちだして私を倒すつもりか？」するとエルードの隣にいた船長がそれにいった。

「お前か！ こんな幼稚な事をしているのは！ つまらない奴だ、とつと失せろ！」

黒い水は、結界に近づいて言った。

「ほーう？ 幼稚でつまらん、と言つたな？ ずいぶんと威勢がいかが何か私を倒す秘策でもあるのか？」

「ワハハハ、秘策も何もお前のような奴が我々を倒せると思つているのか！」

「そうか？ そこまで言うのならちよつと試してみることになよう」
言い終えると水柱が全て崩れ、川は何も無かつたように元の姿に戻つた。

「なんだ！？ 我々に怖気づいてとうとう逃げ出したか！」船長が笑いだすと兵達も続いて笑い出した。

「誰が逃げ出したつて？」

「なにっ！ どこだ！」

皆が一斉に声の主を探すと砲撃主の一人が船長を見た。その砲撃主の目は黒く光っていた。すると、ゆっくりと船長に向かって歩き

出した。

「なんだ！ おい！ 止まれ！」

「俺を倒すと言ったな？ やってみろ！」

砲撃主が指揮台に近づき階段に手を掛けて一歩その階段を上がった時、船長に付いていた魔術師が杖を翳し、いきなり火の玉を放つと砲撃主に直撃した。

「がああ！」

砲撃主は見る見るうちに焼け焦げて蒸発していき後には水が少し残っただけであった。

「口ほどにも無い奴め、思い知ったか！」

高笑いをする船長を尻目にエルードはその水を見て思いだした。

「こいつは、あの！？ まずい！」エルードが指揮台から飛び降りると同時にその水がウネリ始め魔人が姿を現した。

「きさまっ！ この結界の中には誰も入れないはず！」

「なにを脅えているのだ？ わざわざ出向いてやったのだぞ？」

「おいっ！ 何とかしろ！」船長は魔術師の後ろに隠れていた。

「なんだ、なぜ隠れる？ 俺を倒したいのだろう？ どうした？」

かかってこい、という仕草を魔人がすると、構えていた魔術師が船長と共に2人だけの結界を張った。

「守っているだけでは戦えないではないか？」

魔人が結界に手を翳すと黒い水が一気にその結界を包み込んだ。

船長と魔術師を包んだ水はスルスルと上空に伸びていった。

「なんだ、おい！ やめろ！」

次の瞬間、パツと包んでいた水が弾けた。すると2人は引力に従ってそのまま落下し、甲板に叩きつけられた。

「がはっ！」

船長と魔術師はそのまま息絶えた。それを見ていた者達は声を失った。

「なんともろい奴だ？ 所詮、口だけだったな。さて、その魔術師ども・・・次はどうする？」

魔術師達は態度を変えて言い始めた。

「我々はあなたに従います。ですから命だけは御救い下さい！」

それを聞いた兵達も、武器を捨てて口々に叫んだ。

「お願いします！ どうぞ命だけは！」

「助けてください！」

「そうか？ 助けて欲しいのか・・・ならばそれなりに代償を払ってもらうぞ。そうだな、その魔術師どもを殺した奴だけ助けてやるう」

魔人は魔術師を数えた。

「8人、それ以外は死んでもらおう！ さあつ、早い物勝ちだ！」

それを聞いた兵達は武器を拾うと魔術師達を囲んだ。

「やめろ！ お前達、敵はあいつだ！」それに聞き入る兵は一人も居る筈もなく追いつめられていった。

「いいぞ、これは見物だ・・・なんだ！？」

「どうした？」

「なんだ・・・」

異変に気がついた皆が魔人を見ると胴から真二つに分かれてバシヤバシヤ音を立て魔人は崩れていった。さらにシュウシュウと水が蒸発していき後には何も残らなかった。

下から指揮台を見上げていた者達には魔人よりも後ろにいたエルードの姿は見えなかった。

そこに獣人のエルードが姿を現わした。

「おおっ！ すごい！」

「エルード様！」

「さすがエルード様だ！」

一瞬で倒したエルードに皆が称賛の声を上げた。

「ランちゃん、俺達の出る幕は無かったな」

「えっ？ いえ、エルードさん。あれが獣人・・・」

「なによ、ラン！ あんたの刀はもつと凄いんじゃない！」

「マド、わたし自信ない」

「どうしてよ！？ もつと自分を信じて！」

「そうだよランちゃん！ 旦那がその刀をくれたんだろう？ ランちゃんを見込んでくれたんだからさ！」

「・・・でも」ランが言葉に詰まっていると声が聞こえた。

「その獣人！ 俺の分身を倒したぐらいでいい気になるなよ！」

「なんだ！」

それは船の側面から黒い水が這うように伸びてくるといきなり魔術師の一人に襲いかかった。

「ぐわっ！」

黒い水が魔術師の口から入っていくと魔術師はその場で倒れ込んだ。

「うわっ！」

「どうした！？」

すると、ビクン！と体を震わせると直立のまま起き上った。

「なんだ！」

「おい！ 逃げろ！」

逃げ出す兵を見ながら摺り付かれた魔術師がいった。

「この体は色々と妙な技を使えるらしい・・・試してみよう」すると杖を甲板にドンツ！と突いた。

その瞬間バチバチと赤い雷が広がりその回りにいた者は痺れて倒れた。

「まずいな・・・ランちゃん、そこに隠れよう！」

サルージは砲台の横に積んである荷の影に馬を引いていった。

「なによ、ラン！ あんな奴やつておしまい！」

「マド！ 黙って！」ラン達は隠れながらも隙間から覗いた。

「獣人、その剣をどこで手に入れた？ 分身とはいえ一切りで片づ

けるとは放つてはおけんな」

「魔人よ、俺を知らないのか？」

「なに？ 知らんな」

「そうか、ならば教えてやろう。俺はエドス参謀の配下、エルードだ！」

「エドス・・・！ きさま、あの場にいた獣人か！」

「そうだ！ だがお前とは戦っていない。だがお前の倒し方はエドス参謀が教えてくれた」

「・・・なるほどな、そうか？ だが倒し方を知ってその気になっているようだが私もお前らの倒し方を学んだぞ。それに今回はお前1人ではないか？ 残念だが、お前に勝ち目は無い！」

「そいつはどうか・・・おい、ハル獣隊長はどこだ！」

「なに？ あの召使の事か？ あいつには別の仕事をくれてやった。今頃港は火の海にでもなっている頃だ」

「なんだと！ そうか・・・おい！ 船を港に戻せ！ 着くまでにこいつを始末する！」

エルードは下にいる兵に合図をした。

「はっ、はい！ すぐに！」

「何を戯けた事を？ 今頃戻っても遅いわ！ エルードと言ったな、俺を始末するだと？」

「そうだ、手加減するつもりは無い！ すぐに終わらせてやる！ いくぞ！」

エルードは指揮台から飛び出すと魔人目がけて切りかかった。

ランの師匠

ランの師匠

その頃、オラルとスーランは港の手前まで来ていた。

「ランちゃん達、何処まで行っているのかしら？」

「だいぶ張り切っていたからな」

スーランがひとすじの煙を見つけると指した。「ねえ、あの港にいるんじゃない？ ほらっ、ちよつと遠いけどあそこでたき火しているし人が集まっているんじゃない？」

「たき火？ そうだね、行つて見よう」

二人が港に近づいた時、幾つもの火の玉が飛んでくるとそれは街道の脇に落ちその一帯が見る見るうちに火の海と化した。

「ちよつと！ なにこれ！？」

「たき火の正体だ！ 行くぞ！」

2人が走つて行くと港から逃げて来る人達とすれ違った。『何があつたのか』と着いた時には舟や荷などは灰と化していた。

「誰がこんなことを」

「見て！ あそこ！」スーランが燃える建物の中から出てきた一匹の黒ヒヨウを見つけた。

「あいつか？」

黒ヒヨウがこちらに気づきオラルと目が合うと走り出して向かってきた。

「こっちにくるよ！」

「スーラン、下がっていてくれ」そういうと黒ヒヨウに向かって歩き出した。

黒ヒヨウはオラルの少し手前で止まるといつでも飛びかかれる態勢

を取った。

その黒ヒヨウにはめられている赤く光る首輪を見てオラルは話しかけてみた。

「お前、誰かに操られているな？ 聞こえるか？ 俺が元に戻してやる。だから動くなよ！」

そう言いながら黒ヒヨウに近づいた。が、黒ヒヨウは瞬時に飛び掛かるとその鋭利な牙がオラルの首に食い込んだ。

「オラル！」

スーランが駆け寄るとオラルは黒ヒヨウを抱いたまま振り返った。

「大丈夫だスーラン、こいつの呪いを解いてやる」

「大丈夫って！ それっ・・・」スーランはオラルが首から血を流し、なおもその牙が食いちぎろうとする様を見て顔を覆った。それを見たオラルは黒ヒヨウを抱いたままその首輪に噛みついた。するとオラルの全身から黒い煙が立ち込め姿が見えなくなった。

スーランは何が起きているのか分からずに、その場に崩れ落ちた。やがて黒い煙を潮風が徐々にをさらっていくとそこには男の人を抱えたオラルが何も無かったように立っていた。噛まれたはずの首の傷もそこには無かった。

「オラル！」スーランは何が起きたのか分からなかった。

「ひよっとして心配をしてくれたのか？」

「ばか！」スーランは涙を堪えつつも安堵の表情を浮かべていた。

オラルはその人をそつと下ろすと軽く頬を叩いた。すると男は薄っすらと目を開けた。

「ここは・・・あなたは・・・」

「よかった、気がついた」スーランは持っていた水を男に飲ませた。それを飲み終えると大きく息をして二人を見た。

「何かひどく悪い夢を見ていた様な気がします・・・これはいい」

視界が開けた男が見たものは焼け野原となっている港だった。

「ああ、なにかの争いがあつたらしい」

「わたしは何を・・・何をしたんだ!?」以前の記憶が少しずつ戻つて来ると恐らくこれは自分のやった事だと感じた。

「あんたは何もしちゃいないよ。誰かに操られていたんだから」

「そうか、あの魔人に・・・なんてことをしてしまつたんだ」完全に以前の記憶を取り戻すと悔し涙を流した。

「なら、そいつに借りを返さないとな。何処に居るか思いだせるか?」

「ああ、確か・・・そうだ船! 軍艦だ!」男は力強く立ち上がり船を探した。しかしその船はどこにもなかった。

「軍艦か、ここに無いとすると恐らく出て行つたんじゃないかな?」

「くそっ! あいつだけは! あいつだけは絶対に許さない!」

「ねえ、ひよつとしてランちゃん達」

「ああ、たぶんな。恐らくサルージも一緒だ。どこかにまだ使える舟があるはずだ、手分けして探そう!」

その頃《MUSASI》のエルードと魔人は互角の戦いをしていた。

「獣人よ、なかなかやるではないか。だが本気でその程度なら俺には勝てんぞ」

「確かにこのままでは決着はつきそうも無いな。だが、お互いにまだ手の内は隠してあるようだ、違うか?」

「ああ、そうだな。どうやらお前はそこいらの獣人とは少し違うようだ。しかし港に着く前に俺を倒すと言つたな? それを証明して見せる!」

「言われなくとも!」

再び二人は激しく刃を交えた。

「エルードさん大丈夫かな」

「大丈夫だよ、ランちゃん。『いざ』という時にはこいつが火を噴く! 任せてくれっ!」

よほどの自信があるらしくサルードは銃を見せた。

「へんっ！ そんなモノじゃあいつには敵わないよ！ ただ水に穴開けておしまいだよ！」

「そんなことはない！ だったら試してみるか！？」

「駄目ですよエルードさんの邪魔をしちゃ！」

「いいから見ておけっ！」

サルージは撃ちたくて仕方ないといった感じで荷の隙間から狙いを付けた。

「魔人よ・・・次に止まった時がお前の最後だ！」サルージは照準を合わせた。

「なにいつているの！ サルージさん！ だめ！」

「ちよつと、髭！ バカな事はおよし！」

指揮台の上で魔人の一振りをエルードがヒラリと飛びあがってかわした時、魔人に一瞬のスキができた。

「くらえ！」サルージが引き金を引いてしまった。

『ドロドドド』と、それはいつものような光速のエネルギー波ではなく油のようなモノが波をうちながら魔人に向かっていった。

魔人は反射的にその音に気付くと振り返った。

「なんだ！」

それは軽かわせるほどの速さだった。魔人は体を反らして避ける。とサルージを凝視した。

「きさま！ 死にたいらしいな！」

魔人はエルードとの戦いを邪魔されたのが気に入らなかったらしく怒りを拳に集めた。

「だからいったでしょう！」

「ばかつ！ ばかつ！ 髭！」

とうとう見つかってしまったラン達は逃げ場を失った。

「なんで！ こんなはずは！？」

「髭！ なんとかしなよ！」

魔人は胸元に黒く光る玉を造り出した。

「まずい！」

エルードはその尋常ではない玉の威圧感を感じるとラン達の元へ飛び出して行った。

「なんだ、これは・・・」

魔人の動きが止まった。良く見ると魔人の足もとから蒸発して消えていつているのが分かった。

「なんだと！」

その蒸発して消える速さに『このままでは』と身の危険を感じた魔人は下半身まで消えかけた時、自らその胴を剣で斬り払った。

「きさま！ このままではすまさぬ！ 覚えておけ！」そう言い放つと片手で指揮台を掴み力任せに勢いよく川に身を投じた。

「ちょっと、なに？ どうしたの？」

エルードは魔人のいた指揮台に飛んだ。見ると蒸発は下の水までも徐々に消しながら進んでいた。

「そういうことか」エルードは理解した。

そこヘラン達が駆けよって来た。

「エルードさん」

「ああ、どうやらその銃に救われたらしい」サルージの銃を見て答えた。

「えっ？ こいつが？」

「あれがさっき銃から出たモノの正体だ」エルードは船の縁に付いているドロドロとした液体を指した。

その液体は徐々に蒸発して消えた。

「エルードさん、それがどうして」

「私も詳しい事は分からないがどうやらその液体には付着したモノ

を消滅させる力があるらしい」

「そうなの！？ こいつはすごい！」サルージは改めて銃を持ちあげていった。

「ちよつと、それ！ 髭にはもつたいないんじゃない？！」

「でも以前、私達を救ってくれたのもその銃の御蔭ですもの。なに不思議な力がありそうですね」

「たしかに。だんなも詳しい事は教えてくれないし・・・ランちゃんもその刀、そうだろう？」

「・・・はい」

「その方はオラルさん？ とか言う方ですか？」

「はい、そうです」

「そうですか、その方に会うのが楽しみになってきました」ランを見てエルードが微笑むと少し照れ笑いをして返した。

そこに兵がエルードに駆け寄ると言った。

「エルード様、小舟が近づいて来ています。いかがいたしましたしょう？」

「小舟？」

兵に船の縁まで案内されたエルード達は小舟に目を向けた。

「だんな！ スーランさんも！」

「オラルさん！ よかった」

「あれはまさか、ハル・・・ハル獣隊長！」

小舟からオラル、スーラン、ハルの順に梯を登って甲板に降り立った。

「ハル殿！」

エルードはハルに駆け寄ると手を握り締め涙を流して喜びを表した。

「エルード・・・どうしてここに！？」突然の再開にハルは目を疑った。

「はい！ この川にあの例の魔人が。それでエドス参謀より、私が

遣わされました」

「そうだったのか。すまなかったな」

「いえ、御無事でなにより！ それより、もう戻っては来られないのかと思っていました！」

「ああ、私もそう思っていた。こちらのオラル殿に救われた」

オラルは二人に近づくと会釈した。

「オラルと申します。こちらはスーランです」

「オラル・・・あなたが。何と感謝をすれば良いか」

再会を分かち合っているエルード達をよそ眼にスーランがキョロキョロと辺りを伺った。

「それより、ねえ？ 誰か馬を連れた女の子と髭ズラの男を見なかった？」

「ひよつとして」

エルードが物陰に隠れているラン達を見た。するとサルージ達は頭を掻きながら出てきた。

「サルージ・・・」

「ラン！ やつぱり！」

「だんな、すいません！ ちょっと訳があつて」

そこにマドがサルージの髪を引っ張りながら言った。

「この髭！ のせいで死ぬところだったのよ！」

「サルージ、また何か悪さをしたんじゃないのかい？」

慌てて手を振ると「だんな！ そうじゃなくて！ 信じて下さい！」
しっかり否定した。

そこにエルードが被せてきた。

「先ほどサルージ殿・・・いや、その銃に救われました。不思議な銃です。聞けばオラル殿より預かり受けたモノと聞いていますが？」
エルードがジワリと確信を突いて来た。

「その銃は誰でも扱えるモノではないのです。そいつは使う者、相手によって能力が変化する。だけどまだサルージは本当の使い方を

知らない。エルードさん、試してみますか？」

「いえ、そういうものでしたらやはりサルージ殿がふさわしいでしょう」

エルードがサルージの顔色を伺うと「アハハ、確かにこいつが勝手に倒してくれているようなものだからな」悔しいような悔しくないような複雑な笑みを浮かべていた。

そんな中、ハルが改めてオラルに面と向かって話かけた。

「しかしあの魔人、相当な痛手を負ったとはいえそのうちまた現れるでしょう。以前、エドス参謀との戦いでも一月ほどで回復していたのを私は見ていた。オラル殿、どうであれ私はあなたに救われたぜひ、礼をさせて頂きたい」

「いえ、礼なんて」

「ハル殿、私が」

エルードがハルに目配せをするとエルードは翼を広げて飛び立った。

「あの人・・・鳥？」スーランの問いにハルが答えた。

「お譲さん、獣人を御存じ無いですか？」

「あつ、いえ・・・」

「さてはスーラン？ 惚れたな？」オラルが冷やかしかげにいった。

「やだっ、そんなことないよ！」

「スーランさん、分かりやすい・・・」

港に着いた一行は焼け野原となった地に降りた。

「どうしたのこれ」ラン達は港で何が起きていたのかを知らなかった。

「ひどいな。戦でもあったのか？」

「すまない。これは私のやったことだ」ハルが目を伏せた。

それをかばうようにオラルがハルの肩に手をかけた。

「ハルさんは魔人に操られていただけだ。それよりもサルージ、今日の宿はどうした？ そろそろ日が沈むぞ」

「ああつ！　すぐに探して来ます！」ランも慌ててサルージについて行こうとしたのをハルが止めた。

「ご心配なく。そろそろエルードが戻って来るでしょう」ハルがそう言つとそれから間もなくエルードが戻って来た。

「すまなかつた、エルード。で、どうだった？」

「はい、隣街に宿をお願いしました。このまま街道沿いに進むとすぐです」

「助かる。ではオラル殿、色々と積もる話をしたいのですが？」

「お世話になります。良かったな、サルージ」

「すいません。ハル殿、助かりました」

「いえいえ、では行きましょう」

「ハル殿、私はこれからエドス参謀に伝えに行きます」

「そうか。ではご迷惑をお掛けしたと伝えてくれ。私はオラル殿と暫く一緒に行動を共にする」

「ハル殿？」

「オラル殿、この救われた命、少しでもお役に立たせて頂きたい。アルミアに戻るまでの間、私のわがままを聞いてください」その真剣な眼差しを見るとオラルも同様に返した。

「いえ、わがままなんて。どんなに助かることでしょう。では一つ御願があるのですが・・・」

「おお！　何でも言つて下さい！」

「こちらのランにご教授を頂ければ・・・剣術や世の中の理などを・・・」

「わたしの？」ランはオラルを見つめた。

「そのような事でよければ、喜んで御引き受けします」

「助かります。実はランの持っている力を引き出してくれる方を探していました。ラン、ハル殿なら間違いなく一流の剣術師に育ててくれる」

「あつ、はい！　よろしくお願いします！」突然の成り行きで剣

術の指導者ができたことにランは嬉しさを隠しつつ、深々と頭を下げた。

「こちらこそ。ではエルード、よろしく頼む！」

「はい、ハル殿も御無事で！」皆の顔を見て礼をすると飛んでいった。

スーランは誰よりも大きく手を振って見送った……

魔人国：ザルギス

魔人国：ザルギス

世界の中でも唯一、魔人だけが住まう大陸国ザルギス・・・

その大陸は海に囲まれ、他の一切のモノを寄せ付けなかった。

岩山がそびえ立つ内陸の、その地下深くには魔人の中でも特に選ばれた《闇の十人》と呼ばれる者達がいた。

魔人の中でもその頂点に立つ彼らは他の魔人には尊敬され、それを知る一部の人間と獣人は、その存在を恐怖と捉えていた。

その神殿の大広間の神座には人間と獣人の恐怖に怯える彫刻が施されており、中心の大きな椅子は何やら骨を組み合わせたような造りであった。

その椅子に全身を黒い衣で覆った魔人が座り、1人の魔人をその赤い目が見下ろしていた。

「ほーう、それでおめおめと逃げ帰って来たと言うわけか？ 見てみる、皆が笑っておる。のう？ ジュール？」

神座の下には上半身のみの姿のジュールがあり、それを囲っている8人の黒装束の魔人達はジュールの姿を見ながら体を揺らしていた。

「ハデス様！ 決つて逃げ帰った訳ではありません！ この体を修復し、必ず奴らに復讐するため、

そのために生き恥をさらして戻って来たのです！」

「二度もやられてまだ懲りぬか？ どうやら我々の組織の一員には相応しく無いようだ」

「ハデス様！ 次はとは言いません！ 最後のお願いです！ どうか！」

それを聞いた《闇の十人》の中の1人が言った。

「ハデス様、どうぞ最後の機会を御与え下さい。次もまたジュールが役目を果たせないようであれば、

このダイムが責任を持って処罰致します」

「そうか・・・いいだろう。ではジュールよ、最後の役目だ。その人間と獣人共を消したのち、アルミアまでを我に差し出せ、よいな！」

「はっ！ 必ずや手に入れる事を約束致します！」

砂漠の都：ヨマダイ

砂漠の都：ヨマダイ

メルドール大陸の北に位置するヨマダイ国。そこから先には陸地が無く大海が包み込んでいた。

ヨマダイ国は広大な砂漠に覆われている。

そのなかでもイタール川周辺は水の恩恵を受け、都市を支える重要な農作物の拠点でもあった。

オラル、スーラン、サルージ、ラン、ハル獣隊長の5人は、ひと時の平穏を取り戻したイタール川を渡りヨマダイ国に入った。

「だんな、見てください。ここから先は何処を見ても砂しかありませんよ。それでもその《メイロ》に行かれるのですか？」

オラル達一行はイタール川から首都メイロに続く砂漠の街道の入り口付近に着いていた。

「ああ、だけど見事に緑地と砂漠に分かれているものだな。ハルさん、ここからメイロまではどれくらいかかるのですか？」

「そうですね、私一人の時は2日ほどで着きましたが・・・荷を馬に乗せていくとなると、3・4日ほどみておけばでしょうか」

それを聞いたスーランはランの肩を寄せてハルに言った。

「3日？ あたしとランはシャワーが無いと駄目でしょ、野宿は御肌の敵だから」

「スーランさん、私は・・・」

するとマドがフワフワ浮きながら「オバン、たまにはいい事言うのね。レディーの身だしなみを忘れてもらっちゃ困るわ」ハルに向かってそう言うのと眉間をヒクヒクさせたスーランがマドを捕まえて「誰がオバンだって！？ あんたはシャワーとか関係ないでしょ！」

言いながら雑巾のように絞って伸ばした。

「ヒョツと！？ やめっ・・・このっ！ ぐんっ！」

『相変わらず』とそのやり取りを見て笑っていたオラルがサルージの肩を叩くと言った。

「スーランもランちゃんも心配しなくていいよ、このサルージ様が解決してくれる！ なっ、サルージ！」

「そう言われるんじゃないかって、思っていましたよ」

「そうか、いつもすまないな。明日にはここを発ちたいからそのつもりでよろしく！」

いいように使われるサルージを見かねて『御役に』とハルが言ってくれたが『修行の一環だから』と断った。

サルージは来た道を戻ると川沿いの店を探して回った。

「スーランがシャワーを浴びる所は見てみたいが、いかん！ いかん！ 今度こそ黒焦げにされてしまう！」

妄想しつつも『あわよくば』と妄想を膨らませつつ探していると馬車から荷を降ろし舟に運んでいる人を見つけた。親子だろうか、小さい男の子が手伝っていた。

「おっ？ あの馬車使える！」 駆けだして近づくと聞いた。

「よう兄弟！ 景気はどうだい？」

「なんだ？ 仕事の邪魔をせんでくれ」男はサルージを見るや否や不機嫌な顔をして荷を運んだ。

調子に乗って聞いた事を少し後悔しつつも続けた。

「すまねえ、ちよいと聞きたい事があってな。すまんがこの馬車を売っている所を知りたいのだから？」

「そんなとこは無い。みんな自分で造るんだからよ」

「そいつは知らなかった。何とか明日までに手に入れたいのだが・・・金なら用意出来るんだ。どこかに無いものかな」

金？ と聞いて少し興味を持ったのか男が聞いた。

「幾らなら用意出来るんだ？」

「うちのだんな次第だが、たぶんあんたの言い値で用意出来ると思う」

「そうか、ちょっと待っている」男は荷を全て積み込むと船頭に合図をした。

子供を馬車に乗せるとミンに向かう舟を見送った。

サルージは揺れる馬車の荷台で子供の相手をしていた。

「髭のおじちゃんは何処にいくの？」

「ああ、明日にはメイロにいくつもりだ」

「いいな　ねえ、パパも一緒に行くの？」

「いや、パパはこの人にこの馬車を売るんだ。そしたらメイロに行こう。ママもお婆ちゃんも御爺ちゃんも待っているからな！」

「ほんと！　やった！　ママに会える！　髭のおじちゃんも一緒にいくの？」

「いや、それはどうかな？」

「どうして？　メイロに行くんでしょう？　みんなと一緒に行けば楽しいよ！」

「そうだな、じゃあワシのだんなに聞いてみることにするかな」

サルージを乗せた馬車はオラル達の待っている場所に近づいた。

「ジュンさん、あそこで待っているのがだんな達です」

「若い娘もいるようだが、あんた達何やっている人なのだい？」

「まあ、話せば長くなるが詳しい事はだんな達に聞いてみてくれ」

馬車がオラル達の前で止まるとサルージが荷台から降りた。

「サルージにしては随分早かったじゃない？　ねえ、オラル？」

「そうだね。ところでサルージ、そちらの方は？」

「はい、この馬車を売ってくれるジュンさんです。この子はジュンさんの子でアラトって言います」

馬車を降りたジュンはアラトを寄せるとオラルに話した。

「馬車を買ってくれと聞いたので来ました。

私達親子はこの売ったお金で家族の待っているメイロに行くつもりです。

小さい家ですがもう1つ馬車があります。

そちらの方がこれよりも大きいのでよければそちらを持てきます。メイロに行くには水や食料を積んで行かなければなりませんのでよければ樽やテントも準備できますが？」

「旅の支度は全て出来ると？」

「はい。メイロは住むには良い所ですが仕事がありません。ですので季節毎にこうして出稼ぎに来ているわけです」

「パパ、この人達も一緒に行くの？」アラトがジュンの顔を見上げて聞いた。

「いや、そうではないが・・・」ジュンはオラルを見ると聞いた。

「メイロに行くのであれば道案内をしましょうか？ はじめて行くのであれば5日はかかります。

私は道を知っていますので3日で行く事ができます」

「そうですか・・・ハルさん、どうですか？」

オラルはハルが洞察力に長けている事を知り、ジュンという男を出会った時から注意深く観察していたので聞いてみた。

「この方の好意を受けましょう。準備して頂けると何より道を知っているというのは心強いです」

「そうですね、ではジュンさんをお願いします」

「わかりました。では明日の早朝までに準備をしますので、よろしければ私の友人の宿があります。

今日はそちらに泊って頂ければ」

朝靄の残る頃、2台目の馬車にオラル達の馬をつけると旅の支度を終えて乗りこんだ一行はヨマダイの首都メイロを目指した。いよいよ緑の地から砂地へ、という頃にサルージが呟いた。

「俺も、ジュンさんの馬車に乗りたかった・・・」

ジュンの馬車には御者のジュン、隣にアラト、そして荷台にはスーランとラン・マドが乗っていた。

サルージはもう1台の馬車の荷台に乗っていた。

御者のハルと隣にオラルがいたが2人はそれを聞くと「まったく、しょうがない奴だ」と言わんばかりだった。

だいぶ日も照りつけてきたのでそれぞれ馬車の荷台の上に日よけの布を被せた。

ジュンが少し遠くの岩山を指して言った。

「皆さん、あの山の麓で休憩をしましょう」

山の麓に近づくのと日陰の重なる場所を選んだ。

「ふう〜 それにしても暑いな、こんなに違うものかい？」サルージがジュンに聞いた。

「このヨマダイは元々緑の豊かな土地でした。

それが10年ほど前から地底の熱によって植物が育たなくなってしまった。

そのために川の水の届かない所は全て砂漠と化してしまった。

この辺りも当時は普通に人々が生活をしていたのです。

ヨマダイだけではなく、他の国でも同じような事が起こっていると聞いています」

「そうだったのか・・・」

「ここから見える所、全てが緑豊かな土地であつたのに・・・」

一行は道なき砂の平野をジュンの案内で進んだ。

「ジュンさんの案内が無ければこの辺りで迷子になっていたかも」
荷台から立ち上がると見渡す限り一面の砂漠だった。

「私は砂漠になる前の光景が焼き付いていますから、はじめて来てこの状況だったら私も迷っていたでしょう」

「ああ、こんなときエルードさんのような翼があつたらもう着いているころね」スーランは両手を羽ばたかせてみた。

「お姉ちゃん、誰？ それ？」アラトがワクワクして聞いた。

「エルードはね、獣人なんだけど大きい翼を持っていて空を自由に飛べるの！ うらやましい！」

「はしゃぐスーランにマドが、負けてたまるか！」と言わんばかりに声を張った。

「あんなスカした奴の何処がいいんだか！？ 私の方が何倍もいい男なのに！」

スーランが、ふんっ！ とすると「あんたはフワフワ浮いているだけでしょうが！ 偉そうに言わないの」それを聞いたマドは暑さも手伝ってか「そんなことないわ！ だったら見てなさい！」

そういうとランの腰から両手の間を8の字に体を伸ばして結び、それらが鈍い光を放つとランの背に大きな翼が現れた。

「うわっ！ なにそれ！」

突然の変わりようにスーランだけでなく一同の目がそれに釘づけになった。

「ラン！ 飛ぶわよ！」

「えっ！？」

マドは翼を大きく羽ばたかせるとランは空中から小さくなった馬車を見ていた。

「マド！？」

「大丈夫よ、私に任せて！」そういうと大空を自由自在に飛び回っ

た。

「あいつ、隠していたな……」それを見ていたオラルが、ボソツと呟いた。

皆が馬車から降りて待つている所へ上空から降りてきたマドはご機嫌だった。

「どう？　びつくりしたでしょう？」マドはスーランに得意げに言った。

「あんた、黙っていたね……他にも何ができるんだい！？」

「あら？　呼び方が違うんじゃない？　マ・ド・様でしょ！？」

スーランはどうにかしてやろうと構えた時「すっげー　姉ちゃんたち何者？」アラトが初めて見る光景に目を輝かせて聞いてきた。

「私達はねー　なんだろう？　良くわかんない」

「へー　すごいんだ！」

子供のアラトには見るもの全てが好奇心の対象になっていた。

「マド、良いモノ持っているな。他にも何かに姿を変える事が出来るのか？」オラルがその翼を触りながら聞いた。

「んっ！？」

オラルと目が合うと、しまった！　と思った時にはおそかった。

オラルは面白いオモチャを見る目で「例えばここに居る全員を乗せて飛べるモノとか？」と聞いて来た。

「そんなことはできないわっ！　ランだけよ！　なによあなた達……」

・「冷やかな視線を浴びるマドはゆつくりと元の姿に戻っていた。

「ランだけ？　だけって何だ！？」オラルが両手でマドを掴むとじつと見た。

「いや、だから……あの……」目をキョロキョロさせていると「ランちゃん何か聞いているかい？」ランに視線を向けた。

「えっ！？　いえ、私は……」ランはマドとの約束した事を思い出していた。

「……そうか」

オラルはそれを察してか手を離すとマドはフワフワとランの頭の上に落ち着いた。

「ちよつと！ 縛りあげて吐かせようよ！」スーランは納得出来ない風で言った。

「まあ、それは次の楽しみに残しておこう。さあ、まだ先は長い」そう言うつと馬車に乗り込んだ。

スーランは荷台に揺られながらランの頭上にいるマドを見ていた。

「ちよつと、そんなに見ないでちょうだい！ 幾ら私がいい男だからって」

ランはその場の空気に落ち着けなかった。

辺りがすっかり暗くなった頃、テントを張ったオラル達一行は食事を済ませると早々に床に着いた。

そんな深夜の星空の輝いている中を無数の飛行物体がメイロに向かって飛んで行った。

一行の誰ひとりとしてそれには気がつかなかった。オラルを除いては・・・

翌朝、ようやく日が昇りかけた頃、ジュンは一人荷を片づけ馬車に乗せていた。

その音に起こされて、皆が目を覚ました。

「ジュンさん、早いですね」ハルが荷を運ぶのを手伝いながら挨拶をした。

「ああ、起こしてしまいましたか。私は雇われていますから、このぐらいはさせて頂かないと」

「雇われだなんて、旅の仲間ではないですか」ジュンは笑みを浮かべると黙々と荷を積んだ。

日の暑さを感じ始めた頃、今は川の面影すらない土手にたどり着い

た。

「ここまで暑いと喋るのもしんどいな・・・」

オラル達の馬車は天布が日を遮ってくれてはいるが横からの熱風には対処出来ないでいた。

マドは荷台の後ろに体を括りつけ伸ばした体の先には風船のように顔を膨らませ馬車の揺れに身を任せていた。そこから少し先に橋が渡してあるのが見えた。

「あの橋の下で休みましょう」ジュンのその一言で皆が頷いた。それなりに大きな橋で日を十分に遮ってくれる。

暑さに疲れを感じたのか馬車を橋の下に着けると皆、影に腰を下ろした。

「なかなか堪えるな。ジュンさん、あとどれくらいかかるものかな？」水を飲んで一息ついたサルージが横になりながら聞いた。

「距離だけなら半日ほど馬を走らせれば着くと思います。ただここから先は日を遮る場所が無いのです。ここで夕暮れまで休んでそれから出発すれば、明日の朝方にはメイロに着きます」

「そうかい、じゃそれまでひと眠りでもしようかね」

サルージが横になって大きないびきを始めた頃、橋を渡る馬車や人の行き交う声をきいた。

「んん・・・どうした？ もう飯か？」

サルージが起きるとジュンが土手を上がっているところだった。

サルージはジュンを追いかけて土手を上がると既にオラル達がその様子に異変を感じていた。

「ジュンさん、これは・・・」

「おかしい、この道を使うのにはよほどの訳が無いと」

サルージは橋に近づいて来た馬車に駆け寄るとそれを止めて聞いた。

「どうしたんだい！？　だいぶ急いでいるようだ？」

「あんた達、メイロに行くのか！？」

「そうだが」

「なら、すぐに引き返したほうがいい！　奴等が攻め込んできた！」
駈け寄ったハルが聞いた。

「奴らとは？　魔人達の事か！？」

「魔人、かも知れんが街のあちこちで火の手が上がっていた。

逃げるときに空に居た奴が城に向かって火の玉のようなもので城を攻撃をしているのが見えた。

それつきりで逃げてきた、悪いが先を急ぐよ」そう言うと馬車を走らせていった。

それを追いかけるように逃げてくる人の道がはつきり見えるようになっていた。

「何が起きているのだ・・・」

アラトがジュンに聞いた。「ママ達、大丈夫かな」それを聞くや否や「すぐにここを発ちましょう！　メイロに居る家族が心配です！」
ジュンが慌てるのをオラルが止めた。

「ジュンさん、ここから急いでも半日はかかるのでしょう？」

「そうだが、じつとしては無理じゃない！」

少し考えてオラルは言った。

「マド！　先にジュンさんとアラトを連れてメイロに飛んでくれ。それからスーランとランちゃん俺の馬でメイロに向かってくれ。そいつなら大して時間をかけないで行ける。残った馬で俺とハルさん、サルージで後を追う」

「ちよつと！」と言いかけてマドはやめた。この状況で断ったら・・・マドは大人しくジュンとアラトに巻き付いた。

「マド、ジュンさんの家族を見つけたら必ず安全な場所にお連れしろ。何があってもだぞ！」

「分かったわ、まかせて頂戴」半分納得のいかないマドは一応、答

えた。

「オラルさん、すまない。このお礼は必ず！」ジューンはアラトをしつかり抱いた。

「大丈夫ですよ、あとでまた会いましょう！」軽く手を上げるとマドに合図をした。

「はいはい、では行くわよ！」

マドは昨日とは違う大きな鳥に姿を変えると空高く舞い上がって行った。

「我々、獣人のようだ・・・」

ハルは大空に消えていく鳥を見て呟いた。

首都メイロ

首都メイロ

その頃、ヨマダイの首都メイロでは大魔術師でもあり《 闇の十人 》の1人でもあるジェラの配下が既に城を占拠していた。

大魔術師ジェラの計画では、密かにこのヨマダイを手に入れこの城を拠点にして《 闇の十人 》が世界を収めた後にそれらを殲滅し我がモノとする為の準備に入っていた。

ジェラの配下であるメギアドスはジェラの命によりメイロの城の占拠とこの事態が外部に漏れないよう指示を受けていた。

「まったく、手こずらせやがって」そう言つとメギアドスは既に息の無い魔術師の首から手を離した。

「メギアドス様、こちらも片付きました。すでに逃げた人間共もガルの部隊が捕えるでしょう」メギアドスの配下であるベルムグが報告をした。

「そうか。ではこれより全ての城門を閉じメイロに続く一切の通路を断て！ 残った人間は全てジェラ様が妖魔人にしてくださる！」

「御命令通りに・・・」

一方、メイロに近づいていたマド達は一気に急降下をすると雲を突き抜けた。

視界が開けたその光景に幾つもの煙の上がる街を見た。

「なんだ！？」

「パパ、街が・・・」

涙ぐむアラトの目にも徐々にはつきりとその全貌が見えてきた時だった。

城門の砦から怪しげな鳥のようなモノが飛び出すと真つすぐに向

かっってきた。

マドは咄嗟に距離をとったがそれはマドの直ぐ横で静止をした。それは蝙蝠のような人の姿をしており今のマドの半分の体格であった。そいつがマドに話かけた。

「おい、おまえ見ない顔だが？ 俺に黙ってジェラ様のご機嫌でもとろうつて魂胆か？」

「なっ！ ジェラ様！？ そっ、そうよ！ 私の手柄を奪う気！」

「お前、なんかおかしいな？ おい、お前が取り付いた人間はどうした？」マドの回りをゆっくり回りながら疑いの目で見た。

「そっ！ そんなの、気に入らないからとつくに捨てちゃったわよ！ ジェラ様に新しい人間を用意してもらったから！ この人間はその為の貢物よ！ 文句ある！？」

マドは自身が妖魔人であつたためジェラの行動を理解していたので何とかその場をやり過ごそうと強気に出た。

「まあいい、人間は1人でも多く集めないと我々妖魔人の世界を築けないからな。おい、人間は街の中心の広間に集める事になっている。そいつらを下ろしたら逃げた人間を1人残らず連れてこい、いな！」

「そんな事！ 言われなくたって、分かっているわよ！」マドは吐き捨てて言つと街の広間を目指して飛んで行った。

「変わった奴だ・・・」

「パパ、ママ達大丈夫かな・・・」

「ああ、恐らく今の話したと人間を集めて何かをするらしい。ママ達は無事だといいが・・・」

マドは二人を案じて言った。

「大丈夫よ！ あいつ等はその人間の特性に合わせて取り付くから1人の人間を妖魔人にするのに時間がかかるの。滅多なことでは殺しはしないわ」それを聞くとジュンは少しホッとしてアラトの頭を撫でた。

「あそこ！」

アラトが指差す方を見ると広間は埋め尽くした人達で溢れていた。

「ジユン、アラト、とりあえず広間の近くに降りるわよ。見つからないように家族を探して！ 見つけたら安全な所に連れていくわ！」

マドはゆっくりと広間の端の家の影に降り立った。

マド達と同じように連れて来られた人も多く、乱暴に広間に投げられると、また飛び立っていった。

マドは元の姿に戻りアラトに巻き付いて身を隠した。影から広間に向かう人たちを見るとジユンがいった。

「よしっ、あれに紛れて探そう。アラト、パパの手をしっかりと掴んでいろ」

「わかった！」

マドの後を追ってランとスーランはメイロまであと少しの所まで来ていた。

「それにしてもこの馬、全力で休みもしないで走り続ける事ができるなんて・・・」

「私達2人乗っているのに、ほんとにすごい・・・」

スーランはふと、通り過ぎるメイロから逃げてきたであろう馬車や荷が点々と置き去りにされているのに疑問を持った。

「ラン、そういうば通り過ぎる人を見た？」

「いえ、そういうば見ないですね」

どうしてだろう？ と2人がそれを見ながら走っていると後ろでバタバタという音が聞こえてきた。

後ろに乗っていたスーランが何気なく振り返ると、ゆっくり前を向き手綱を握るとランの耳元で囁いた。

「ラン、ちょっと遊んで行こうか！？」

えっ？ ランが答える間もなくスーランは左先に見える岩山に進路をとった。

「ちよっ！？」

スーランは全力で走らせながら近づいて来た岩山に飛び出す姿勢をとると叫んだ。

「ラン！ 思いっきり暴れてみな！」 そう言い残すとスーランは岩山の影に飛んだ。

「えっ！ ちよっと！？」

ランが振り返ると獣人？ と同じようなモノ達が翼を羽ばたかせながら追ってきていた。

その顔はとてもエルードのような美男子ではなくどちらかといえば獣に近かった。

「ちよっと！ なんなの〜！」

岩山の回りを走って逃げるランを見ながらスーランは不敵な笑みを浮かべた。

「1・・・2、5匹か、よしっ！」

スーランはすかさず岩山に登るとその足もとにある短いトンネルを確認して叫んだ。

「ラン、こっちだ！ ここを通って！」

大きく手を振って合図をするスーランにランは訳も分からずスーランの方へ向かった。

ランが獣？ のようなモノを引き連れてトンネルを目指した。見事なまでに獣？ たちはピッタリとランのすぐ後ろについて来た。

「よしっ！」

スーランはランがトンネルに差し掛かったと同時に飛び降りた。

ランはトンネルを抜けると振り返った。少し煙の立ち込めたトンネルからスーランが歩いて出てきた。

「うまくいったよ！」

ランが駆け寄るとそこには見事なまでに真黒に焼きあげられている獣の姿があった。

「これって・・・」

「何者かな？ こいつらがメイ口を襲ったのかも。どっちにしても急いの方がいいみたい」

2人が馬に乗ろうとした時、トンネルから声がした。

「何処に急ぐのだ！？」それは黒焦げの獣ではなかった。

「このガル様のかわいい手下をここまでにしてくれるとは・・・」

日が暮れようとしているころ岩山ではランとガルが対峙をしていた。

「ラン、遠慮はいらない！ ハルさんに恩返しをするつもりでやりな！」

「はい！」ランはオラルから譲り受けた刀を構えた。

「おい！ さつきから調子に乗っているが小娘2人が俺様に勝てると思っているのか！？」

スーランは笑みを浮かべて言い返した。

「だいたい、俺様！ とか言う奴に強い奴なんていないのさ！ 本当に強い奴っていうのは」そこまで言いかけて「とにかくラン！ 勝てない相手じゃないよ！ 思いっきりやってみな！」ハッパをかけた。

「まあいい、この小娘の後はじっくりとお前をいたぶってやる！」

ガルは翼を羽ばたかせると上空へ舞った。ランはギュツと柄を握ると突きの構えを取った。

「いくぞ！ 小娘！」

ガルは大きく息を吸い込むと口から拳ほどの火の球を幾つも噴き出した。

ランはそれをかわしながらジグザグに進路を取りガルに近づいていた。一通りやりすごし火の玉が出切ったのを見たランは思い切り

飛び上がるとガルに斬りかかった。

だが空中での動きでは到底ガルには敵わなかった。ガルはランの攻撃をヒラリとかわすと落ちていくランに振りかぶった手から雷を見舞った。ランはそれを背で受けるしかなかったが、刀の鞘が光りランを包むとそれを弾いた。

ランはフワリと砂の地面に着地すると何事も無かったかのように立ち再び構えた。

「生意気な、だがそろそろ日が沈む。お前達人間は暗闇の中ではなにも見えまい！」

ガルはゆっくり降下するとフワリと降り立った。

日が沈むのを見ながらスーランは呟いた。

「たしかにね、どうする？ ラン」

ランはジリジリとガルを中心にして回ると沈む夕日を背にして構えた。

「小娘、残念だがお前の負けだ。明かりの無くなるこの場では俺には勝てん」

ランは戦い始めてから自分に言い聞かせるように話しかけた。

「ハルさんが教えてくれた事、そしてこの刀・・・」

ジツと刀を見て言い終えると徐々にランの影が短くなりその影が消える直前ランは素早く右に飛んだ。

「なにっ！」

ガルは沈む直前の光を受けると一瞬、視界を完全に失った。

日が沈むのを追うように額から血を流しガルも倒れた。

「なに、ラン？ やったの!?」スーランにもその瞬間の出来事が理解できないでいた。

「よかった、ちゃんと出来た」

ランは急に気が抜けるとその場に座り込んだ。そこにスーランが駈

け寄ってきて聞いた。

「ラン、今のは！？」

「はい、ハルさんに教わった技です。でもこの刀でなければ勝てなかったかも・・・」

「アハハ、そうかつ！ 良かった、良かった！」

スーランはランを抱き寄せると自分の事のように喜んだ。

ランもその腕の中で涙を浮かべながら喜びをかみしめていた。

「おーい！」

遠くから聞き覚えのある声が近づいて来ていた。

大魔術師ジェラ

大魔術師ジェラ

スーランとランに合流したオラル達は夜道を急いでいた。

「オラルさん、城門が全て閉じています。見てください、砦にはスーランさんの言っていたモノ達が見張りをしています」

「そうですね、どこかに隠し通路などは無いですか」オラルが城壁を見回しているとサルージが2人を見ながら聞いた。

「ハルさん、だんな・・・見えるのです？」

月明りだけではとても見える状況ではなかったがまさか自分だけ見えていないのかと感じた。

「ええ、私は黒ヒヨウの獣人です。夜目は誰よりも優れている。最も、オラルさんには敵いませんが」ハルは横目でチラっと見た。

「いやだなあ、ハルさん買いかぶりですよ」

ハルは城門から離れた城壁の一部と化している岩山に進路をとった。

暗闇の中、岩山の前でハルがいった。

「なかなか優しくは入れそうもないですね」

「確かに。でもハルさん一人なら問題ないのでは？」

「それはそうですが」

「ならハルさん、先に行って下さい。ジュンさん達が心配です」

「オラルさん達は？」

「我々は逃げる準備をしておきます。スーラン、ランにも言っておくがジュンさん達を見つけたら何とか正門を目指して逃げて来てくれ。すぐに馬車を出せるようにしておく」

「分かりました」

簡単な作戦に聞こえるがこの人ならうまく事を運ぶのだろうとハル

は納得した。

「では、朝日が昇る前にここを出るとしましょうか」ハルは黒ヒョウに姿を変えると、切り立つ岩山に消えていった。

「さてと、サルージ！ 足の速い馬車を2台正門に用意しておいてくれ」

「なっ！ 見つかつちまいますよ!?」さすがのサルージもそれには賛成できなかった。

「大丈夫、正門の砦はスーランとランが抑えてくれる。計画はこうだ・・・」

メイロの中央にある円形の広場では捕えられた300人ほどの人達が集められ妖魔人兵の監視下に置かれていた。

「静かにしろ！」彼らの前にメギアドスが現れると人々を強制的に座らせるべく兵達が威嚇しはじめた。

その場が少し落ち着くのを確認したメギアドスは礼を持ってその人を迎えた。やがて黒装束を纏った人が宮殿から現れた。

「皆の者！ よく聞け！ これからお前たちに関わる重大な話をしてください」

「私はあなた方と同じ人間だ！ 我々はあなた達を殺したりはしない！ 近いうち、このヨマダイは魔人による侵略を受ける事になる！ 勘違いするな、我々はそなた達を助ける為に来たのだ。

我が兵達を見よ！ 彼らはその身を持つて魔人と対等に戦える体を手に入れたのだ！ 家族を守り、国を守りたいと思う志を持った者が今日、この場に集まっている！ それらを望む者には我は無償でその力を与える！」

それを聞いていた者達は、徐々にざわめき始めた。その中にまだ家族を見つけれないジユン達がいた。

マドはアラトに巻き付いたままその声に脅えていた。

《 あの声、間違いなくジェラ様だ！ これは大変な事になった・
・ 》

すると数人の若者達が立ち上がった。

「うっ！ うそだ！」

「そうだ！」

「いいように使われて殺されるに決まっている！」

「醜い化け物にされてたまるか！」

「そうだ！ そうだ！」

その若者たちに押されるように人々はそれに反抗して声を上げはじめた。

それを兵達は力任せに座らせて回っていたが、抑えられなくなつてくると持っていた剣や槍を振りかざした。

「やめよ！ この中で力を得たいと思っている者が少なからず居る

！ ならばそれを望む者にこの場にて力を与えよう！ さあつ、遠

慮はいらない！ 力を望むものよ、出て参れ！」

「そんな奴、いるわけないだろう！」

「そうだ！ この街から出ていけ！」

罵声や怒号が飛び交う、そんななか1人の男が手を上げて立ち上がった。

その男は若くして不治の病に侵され、顔はただれ皮膚は石のように硬く、その割れ目からは血が滲み、全身から悪臭を放ち・・・人々からは忌み嫌われていた。

男はその人の元へ動かなくなっている右の足を引きずりながら何とかたどり着いた。

「わ・・・わたしの様なものでも力を、力を与えて頂けますか・・・

「必死に手を伸ばす男の手はもはや血が通っていない。その手を躊躇することなく両手でつつむと耳元でそっとつぶやいた。

「そなたの人生はこれから始まる、目を閉じるがよい……」その人は男を抱き寄せると纏っていたマントでつつんだ。

その光景を人々が見つめるなかマントを戻すと男の手を取り立ち上がらせた。

「どんな気分だ？」

「……はい」

男が顔を上げるとそこには好青年の凛々しい姿があった。

「皆に見せてやるが良い……」男が振り返ると人々は驚嘆の声を上げた。

「おおっ！ 息子よ！」駈け寄った父親が抱きついた。

「父さん！」

父親は幼少の時以来の肌のぬくもりを感じた。その過去を知る人々から徐々に称賛の拍手が送られた。

「みなの方！ 我は一切強制せぬ！ 力を得たいと思う者だけ神殿へ参るがよい！」

そう言い残すと兵に囲われながら宮殿の奥にある神殿へと向かった。残った人々についてはいく者とその場に残る者がいた。

「パパ……」

「心配するな、ママ達はきつと隠れているはずだ」ジュンはアラトの手を握ると家の方向に向かって歩きはじめた。

黒ヒヨウのハルは神殿内部の石塔の上から人々が列を成して行くのを見ていた。

《あの部屋に……大魔術師ジェラ》

その先は天井から天幕で覆われ、その前で兵達が整列をして待つように指示を出していた。

ハルは天井の天幕をすり抜けるとそこはロウソクの光のみの薄暗い通路が伸びている。

その先の部屋の入り口には門番が2人、両脇に控えていた。

「いいだろう、始めよ！」

部屋の中からジェラが声を掛けると門番は天幕に駆け寄り外の兵に何やら指示を出した。

それを受けて天幕の外に居た兵は並んでいた人達を10人ずつに分けて中に通した。

最初の10人が部屋に入ってから少し時間を置いて次の10人が呼ばれて部屋に入っていた。

《 いったい中で何が行なわれているのだ？ ジュンさんは何処に・
・・ 》

部屋に入るにはそこしか入り口が無かった。

ハルは天幕の外まで戻ると人の姿になり紛れて並んだ。

「つぎ！ お前までだ」

ハルはその列の最後に並ぶと天幕の中に進んだ。その薄暗い通路の先に扉があり門番がそれを開くと中へ入った。

《 これは・・・ 》

そこは香の香り漂う空間に、先には波打つ2つの光の通路があった。向かって右手には青、左手には赤の光をそれぞれ放ちその中間にジェラが立っていた。

ジェラの顔は黒の布で覆われていて見ることはできなかった。

ジェラは無言で1人1人に青の道、赤の道に進むよう指示をした。既にこの部屋に入った時から人々は香のせいだろうか？ 虚ろな目

をしており大人しく指示に従っていた。

ハルは部屋に入った時から鼻を閉じていた。人の何倍もの嗅覚を持っていたが獣人の特性でそれらを上手くコントロールすることが出来ていた。

ジェラは最後にハルを見た。

ハルは同じように青の道に進め、と指示を受けた。ハルは疑われぬよう、大人しく青の道に進んだ。

そこは外から見た感じでは分からなかったがどうやらジェラの魔術による異次元に続いていた。

さらに進むと巨大な空間が現れ、この道に進んだ者はその中心に集まっていた。

ジェラに付き従った者達がひと通り振り分けられるとその道が閉ざされた。

「お前達は我に選ばれし者！ 我より与得る力により魔人、それ以上の力を得る！」その空間に響き渡った。

すると突然、上空からその場に蓋をするかのような圧力がかった。「なっ、なんだ！？」

その場のハルだけが正気を保っていたが他の者達は抵抗すること無く足元に倒れ込んだ。

やがて空間を呑み込むように白い煙がその場を覆うと人々はその煙を吸い込み、徐々に身震いを始めた。

《これを吸つては》ハルは息を止めた。隣にいた人までもが見えなくなるとハルは黒ヒョウに姿を変えて警戒した。

ゆっくりと煙が消えていくと人々が立ち上がった。それらを見るやハルは初めてメドルの城で出会ったあの魔人を思い出した。あの威圧感、圧倒的な存在、それに近いモノを感じた。

人の倍ほどあるその姿は人に似ているが、全身は黒く飛び出た骨が形を変えそれが鎧のように身を囲い、手足の指は鋭利な刃物のよう

でそれは自在に伸縮していた。

《マドも妖魔人であつたがこの者達は魔人、いや、それ以上か・
・・》

「我が忠実な戦士達よ！ お前達はその力をこの私の為に捧げるか
！」

何処からともなくジェラの声が聞こえるとそれに答えるように一同
がひれ伏した。

完全な妖魔人となつた彼らには以前の記憶は無いように見えた。

「これからお前達には近いうちに魔人との決戦に備えさらに特別な
力を与える」

それを聞き終えると空間の中へジェラが現れた。それを見たハルは
咄嗟に妖魔人の影に隠れた。

「我が戦士達よ！ 顔を上げよ！」ひれ伏していた一同が顔を上げ
るとジェラはその顔を覆っていた布をゆっくりと外した。

《あれが、ジェラ！？》

ハルはその顔を見て驚愕した、女性なのだ。

『大魔術師』と呼ばれるからにはてつきり男だと勝手に想像をして
いたのだ。

歳の頃は、恐らくスーランに近いだろう。

《それにしても・・・》

ハルは『魔性の女』という言葉が頭をよぎった。

《世の中にはこれほどまでに美しい人がいるのか・・・》

ジェラは1人の妖魔人に近づくとその者に言った。

「我が戦士達よ！ これからこの者に特別な力を与える！」

そう言つとジェラはその者の胸に両手を当て何かを呟き出した。そ
の妖魔人は胸から指先まで赤い光が行き渡ると大きく息をした。ジ
エラはそれを見て笑みを浮かべると皆に問うた。

「この者の力を見たくは無いか！」すると一斉に妖魔人は雄叫びを

上げた。

「よかるう！ では見せてやろう、その力を！ メギアドス、連れて参れ！」

ジェラが外に呼びかけるとメギアドスの後ろに両脇を兵に囲まれて来た者を見てハルは一瞬、目を疑った。

《まさか・・・ジュール！》

それは紛れもなくジュールであった。

ジュールは両肩から袈裟がけに呪文らしき文字と宝石を散りばめた様な帯で包まれ手足もそれにより自由が効かないでいた。

《なぜ、あいつが！？》

ジュールはジェラの元に連れて来られると睨みつけて言った。

「お前が人間だったとは、まったく・・・くだらない事を考えおつて」

「私が人間だということに気がつかないとはな。魔人共も所詮その程度よ」

「俺をどうしようと好きにするがいい、だが本気で俺を倒そうと思っっているのなら後悔することになるぞ」

「ジュール、もうお前には後が無い。私を倒さぬ限りハデス様には顔向け出来ないぞ」

「望む所だ、人間如きが本気で我ら魔人を倒せると思っているのか？」

「ジュール、ではお前の本気とやらを見せてもらおうか。このわたしの忠実なる戦士に勝てば私を好きにしてもよいぞ」

「・・・すぐに終わらせてやる！」

空間の中心にジェラの戦士とジュールが対峙をしていた。

「我が戦士よ！ その力を見せてやるがいい！」

妖魔人はジェラに一礼をするとジュールを見て言った。

「お前・・・食ってやる・・・」

「調子に乗りおつて！」

ジュールは黒い水の体になると先に攻撃を始めた。

指先が針のように飛び出すと妖魔人を貫きさらに串刺しの妖魔人を持ちあげると口から電撃を放った。

「ジェラ様、なかなかの攻撃ですな」メギアドスはニヤリとした。

その一連の攻撃で妖魔人は全身を焼かれ、投げ出された。

「他愛もない。終わりだ！」

ジュールはジェラを見下してみるとジェラは不吉な笑みを浮かべていた。それを見てジュールは焼け出された妖魔人を見た。それは胸の辺りから指先にかけて赤い光が全身を流れていくと何事も無かったかのように立ちあがった。

「小賢しい真似を・・・」ジュールは再び戦闘態勢に入った。

はあああああつ！

ジュールは胸の辺りに黒く雷を放つ球を造り出すとそれは徐々に大きくなり分身を造り出した。

次にその体を2体に分けさらに4人・・・8人と妖魔人を取り囲んだ。

「覚悟しろ！」分裂をしたジュール達は次々に飛びかかった。

妖魔人は骨の鎧を高速で回転させるとそれを次々に粉碎していった。妖魔人の回りには黒い水が一面を覆っていた。するとそれがボコボコと波打ち始め次の瞬間、妖魔人を黒い水が包んだ。

しばらくして息の消えかかる妖魔人を覗き込むようにその球からニユツ！ とジュールの顔が伸びてきた。

「この中で息絶えるのを見届けてやる、馬鹿な奴だ」

その妖魔人が息絶えるのを見たジュールはジェラを見ると姑息に微

笑んだ。

「次はお前だ、ジェラ！」

そう言うジュールにジェラは、フツ、と返した。

スツと妖魔人の目が白い光を放つと黒い水の中で姿を変えていた。全身に幾つもの口が現れると一斉に黒い水を吸い込み始めた。

「なっ！ なにっ！」

突然のその吸い込む力に抵抗できずジュールの顔が必死に吸い込まれるのを堪えていたが、妖魔人は最後のジュールの顔を大きな口でかぶりつくそれは喉を通り腹に収まった。

「ジェラ様、呆気なかったですな」

「まあ、そういうな。確かにもう少しこの能力を確かめたい所ではあったがこいつらは到る決戦に備えてさらに改良を加えなくては」

「そうですね、ではジェラ様。次の者達も待つていますゆえ」

するとそれを制するようにジェラは1人の妖魔人を指した。

「一匹おかしな奴が紛れておる・・・」

ハルは覚悟を決め人の姿になると立ちあがった。

「ジェラ様、こいつは・・・」

「なにを企んでおるのか。返答次第ではここから生きては出られんぞ」

ハルは妖魔人が跳びかかりそうな状況で2人に歩み寄った。

「私はアルミアの戦士！ エドス参謀の配下ハル獣隊長だ！ 訳あって人を探している」

ハルの覚悟の目を見たジェラは思い出した。

「エドス・・・そうか、奴には借りがある。まあ、いいだろう。大人しくアルミアに帰るがよい。」

これで『借りは無しだ』と伝える、よいな」

メギアドスは『借り』を案じて聞いた。

「ジェラ様、こいつを逃がしてはこの計画が知られてしまいます」

「よい、いずれアルミアも我らに協力せざるを得なくなる。ハルとやら、ついてこい！」

妖魔人を残しジェラとメギアドス、ハルはその空間から神殿へ戻って来た。

ハルは黒ヒヨウの姿になるとジェラに振り向きざま軽く会釈をしその場を無言で去って行った。

「ジェラ様、本当に良かったのですか？」

「ああ、奴等とはまた会うだろう」

2人は天幕を通り外に出る通路に差し掛かった時、後ろから声を掛けられた。

「ジェラよ・・・人間だったとは」威圧感のあるその声に2人は咄嗟に振り返った。

そこには黒の衣装を纏った人が立っていた。その声にジェラは聞き覚えがあった。

「ダイム・・・」

「ジュールはどうした？」

横からメギアドスが答えた。

「あの魔人か？ 我らの実験台になってもらったが。まあたいして役に立たなかったがな」

ダイムはそれを聞き流すとジェラに問うた。

「ジェラよ、ハデス様を裏切ってまで何を企んでおる？ 返答次第ではお前を裁判にかけねばならぬ」

「ダイム、我らを見逃してはくれぬか・・・」ジェラの緊張した顔をメギアドスは初めて見た。

「まずい！ と悟ったメギアドスはジェラの1歩前に出た。

「なんの為にだ？ まして人間と知ったからには見逃す事はできぬ」

ダイムは纏った衣装の中から両手に杖を持ち、広げた。

「逃げるぞ！」ジェラは言い残して振り返ると走り出した。

メギアドスはダイムの前に仁王立ちで構え、全身に力を込めると飛び掛かった。

ジェラは逃げる途中、メギアドスの断末魔を聞いた。

ジェラは神殿の中の階段を降り、地下の通路を駆けていた時、突然目の前を火の壁が塞いだ。

「くっ！」

立ち止まるジェラに、その火がダイムの形をつくるとそれがいった。

「逃げてても無駄な事はわかってるはず」

ならば！ とジェラは異空間を造り出し、そこに飛び込んだ。

「やつはここまででは追ってこれまい・・・」

しかし安心したのもつかの間、見る見る空間がドロドロに溶けながら縮んできた。

逃げ場を失いこれ以上は危険と覚悟を決め通路に飛び出した。

「どうした？ 逃げるのでは無かったのか？」

息を切らすジェラに近づいてその首を掴むと地から足が離れた。

「ぐっ！」

「大人しくハデス様の裁きを受けろ」その言葉を最後にジェラは意識を失った。

ダイムはジェラを担ぐと来た道を歩きはじめた。

「誰だ！？」

何かの気配を感じたダイムは振り返った。

「人間が・・・何か用でもあるのか」

「その娘に用がある」

薄暗い松明の明かりの中から男が姿を現した。その顔はよく見えな

かったが、その目は・・・

「きさま！ 人間では無いな！」

ダイムはジェラを下ろすと杖を取り出し構えた。杖の先に付いている水晶が光を放つとその男を包んだ。

「これがどうした？」

男は涼しい顔で答えると近づいてダイムの首を掴んだ。

「おっ！ お前！ ぐっ・・・」

ダイムの体は黒い煙を出しながら蒸発し、消えていった。

「ジェラ・・・」

男はそっと抱き上げると暗闇に消えて行った・・・

ジェラの術

ジェラの術

その頃、ランとスーランは正門から少し離れた場所にある崩れた城壁を登ると、砦の近くに身を隠しながら覗いていた。

「ざっと、10人位ね。あいつが親玉かしら？」

「そうみたいです。太っているし・・・」

えっ？

「ちよつと、ラン・・・そういうこと言うんだ」

「わたしなにか言いました？」

ランはとぼけた顔でスーランを見ると、スーランは、この！と
いった感じで首を腕で絞めた。

ランは自分でも気付かないうちに少しずつ以前のような余裕が出てきていた。

実際、ハルに鍛えられた事もあり先ほどの勝負でも冷静に勝ちを収めたことがそうさせたのかも知れない。

「ラン、私が雑魚を引き受けるからあんたはその調子であのデブの親ビンをやっておしまい！」

ランは小声で「了解しました」と敬礼してみせた。

スーランはそれを笑って返すと堂々と通路の真ん中に出た。

「お兄さんたち　ちよつと迷子になっちゃった　だれか案内してくれな〜い？」

スーランはマントを外すと色気を全面に出して近づいていった。

「おい、こいつ人間の女だ・・・」1人の妖魔人兵が気付くと他

の者達も気付いた。

「ベルムグ様、人間の女が1人でやって来ました」

「なに、1人だと？」ベルムグは怪しげにスーランを見た。

「何だ！？ 商売女か？」

スーランは首を傾げて腰に手を置くと言った。

「まあ、失礼しちゃうわ！ でもジェラ様のところまで連れて行ってくれたらお礼をしてもよくてよ？」

「なんだ、そうか。おい！ こいつをジェラ様の神殿に連れて行け！ 我々好みの女にしてくれるだろう」

兵が2人スーランの両腕を掴むと近くの階段へ連れていった。

「ちよつと！？ 2人つて・・・」

わざと連れて行かれたスーランは半分笑いながら振り返ってランを見ると「残りは私が？」と胸に人差し指を立てていた。

「どうしょー でもやらないと」ランは気持ちを固めて頷いた。『私ならやれる！』ランは恐る恐る出ていくと近づいていった。

「あー すいません。私の相手をしてくれませんか？」

それに気付いたベルムグ達は警戒する事も無く「なんだ、他にもまだ居たのか。おい、そいつも連れて行け！」ベルムグがいうとまた2人の兵が近づいて来た。

それを見たランは肩に背負った刀を掴むと兵が一瞬、なにっ！と、仰け反った。

「1番大事なのは絶対に油断をしない事！」

ランはその場から瞬時に飛び上がると刀を抜き、降下するのと同じ時に上段に構えた刀を一気に振り下ろした。

「ラン・・・手加減つてものを知らないのかい？」

「あの・・・まさかここまでとは」

ベルムグを始め兵達どころか正門も粉々に崩れていた。

「逆に逃げ道を塞いでしまったね。ここに居たら見つかるだろうか
少し離れていようか」スーランは呆れた口調で言った。

崩れ落ちた砦は燃えた焚き木が散乱していて、それがサルージにと
っては良い目印だった。

サルージはオラルの指示通りに足の速そうな馬車を見つけ戻って
きていたところだった。

「なんで正門が？」

サルージは近づいていくと確かに先ほどまであつたはずの正門が崩
れ落ちていた。

「サルージ！」

声の方を向いたサルージはランとスーランが馬で駆けてくるのを見
た。

「あれゝ お2人さん、どうしたんで？」

「ちよつと訳ありだね。それよりなんとかあの瓦礫をどかして逃げ
道を確認しないと」

「あれを？」

「人が通れるくらいでいいからさ」

「そんな簡単に」

「その銃があるじゃないか？」

「まあ、でも余計に壊しちゃうんじゃ」

「ごたごた言わないで1発かましてみなよ！」

スーランに言われるがままサルージは銃を構えた。

「もう、知らねえですよ」半分ヤケクソで引き金を引いた。

《バシユ！》

それは丸い円を描くと崩れた正門に向かっていき見事に円形の通路
を確保した。

「へえ」やるじゃん！」スーランはサルージを叩くと笑って言った。

「まあ！？　こんなもんでよければ」サルージは予想よりも上手くいった事におどけてみせた。

「あんなことするのはあの髭しかないわ！」

マドは上空からそれを見ていた。マドの足にはジュンとその家族がしっかりと掴まっていた。

アラトはスーラン達を見ると大きな声で呼び、それに気付いたスーラン達は大きく手を振って答えた。

薄っすらと日が昇って来たころ、合流したジュンの家族とスーラン達は崩れた正門の前で馬車に乗りハルとオラルを待っていた。そこに瓦礫を飛び越えながら黒ヒョウのハルが現れた。

「ハルさ〜ん！　こつち！　こつち！」ランが大きく手を振った。

「ジュンさん、無事でしたか」ハルはジュンとその家族を見て安心した。

「はい、私の家族は家の地下に隠れていて見つからなかったようです」

「それは何よりです。ところでオラル殿は？」

「だんなは俺たちに逃げる準備をしていてくれて、本人はどっかへ行っちゃいましたよ」サルージは城を指していった。

「とにかくジュンさん達は馬車に乗って待っていて下さい。何があるか分かりませんから」サルージに促されてジュンとその家族は荷台に乗った。

日が昇り暑さを感じはじめたころ、城から走って来る人影に気付いた。

その人影が徐々にはっきり確認できると、その後ろに10人ほど

の妖魔人に追われているオラルがいた。

「なんで！？　どうなっているの！」サルージは慌てて逃げる準備を始めた。

「旦那のやることはワシには理解できん！　みんな乗って！」

馬車の御者にハルとサルージ、荷台にジュンとその家族、それにスーランが乗り込んだ。

ランはオラルの馬に乗りマドと一緒にだった。

「おい！　待ってくれ！」

オラルがようやく追いつくとジュンとスーランの手を借りて荷台に乗り込んだ。後ろには妖魔人達が追ってきている。

「ラン！」

スーランが言うよりも先にランは妖魔人達に向かい駆けだしていった。

「ラン！　無茶しないで！」

マドはランの髪を必死に握り、振り落とされまいと左右にあればていた。それを構う事なくランは刀を抜くと妖魔人達に向かって振りおろした。刀の風圧が一直線に轟くと妖魔人達は城壁まで吹き飛ばされランは身を翻して皆の元に駆けていった。

「オラル、この娘は？」

スーランはオラルが背負っていた人を降ろしたのを見て聞いた。

「この娘は恐らく・・・魔術師だ」

メイロの城が見えなくなったところでハルは馬車を止めた。

「だんな、またこんな綺麗な人をつかまえて」サルージは「羨ましい」といった感じだった。

皆が見つめるなかジェラは目を覚ました。

「誰だ・・・お前・・・」

「気がついたか？」

オラルが声を掛けるとジェラは起きあがり回りを見渡した。その中に逃がしたはずのハルを見た。

「お前はアルミアの・・・どうして、お前が助けてくれたのか？」

「いえ、助けたのは恐らく・・・」ハルはオラルに聞いた。

「俺はジュンさんを助けに探し回っていたらあなたが倒れていた
ので連れてきました」

ジェラはまだ記憶がはつきりしていない様子で頭を振った。

「そうか・・・そういえば！？　ダイムはどうした！」

「ダイム？　それは誰ですか？」ハルが聞いた。

「いや・・・何か悪い夢でも見ていた様な気がする」

夕暮れ時、ジュンは家族を乗せた馬車に乗り込むと礼を言ってオラル達と別れた。アラトはいつまでも手を振っていた。

「オラル殿、やはり私はアルミアに戻らねばなりません」ハルは申し訳ないといった様子だった。

「そうですか」

「ハルさん」ランはまだまだハルに色々と教わりたかった。

「ラン殿、私は基本的な事は全て教えました。あとはそれをどう活かすか、それだけです。それにいずれ我々と力を合わせて戦う日が来るでしょう！　その時は是非、強くなったラン殿を見てみたい」その言葉にランは涙を浮かべて答えた。

「ハル、我もアルミアに行く。エドスに会わねばならん」

ジェラがハルに近づくとランの肩に乗っていたマドを見つけた。

「お前・・・」

マドは慌ててランの影に隠れた。それをスーランがつまみ出して言った。

「なにコソコソしているの！？　らしくないね」

「ちょっと、やめっ！ ばか！ 静かにしなさい！」

ジェラが近づいてマドを見た。

「あの時の・・・男女か？ その姿は何だ？」

マドはランの髪にしがみ付いてビクビクしながら答えた。

「あつ、あの・・・ジェラ様、これには少し訳が有りまして・・・」
言いかけるとランが聞いた。

「ジェラ？ あなたがマドを？」

ジェラは黙ってマドを見ていた。

「ジェラっていえばマドが言っていた奴じゃないかい？」サルージが訊ねた。

「大魔術師・・・そうだ！ そんなこと言っていた！」思い出したスーランが叫んだ。

「お前、余計な事を・・・だが、なぜその姿で生きている？」宝石を巻き付けたジェラの手がマドを掴んだ。

「あのつ、そちらの方が・・・」オラルを指すとジェラは不思議な顔をして聞いた。

「我の術は我にしか解く事はできぬ・・・何者だ！？」

みなオラルのことを知らなかったのでその発言に注目した。

「俺は・・・曲者だ」オラルは真顔で答えた。

「ふざけておるのか！？ どうやらこの世界にはおかしな奴が増え始めているようだ。まあ良い。ではハル、参ろう」

行こうとするジェラに、ちょっと待って、とランが駆け寄った。

「あの、マドを元に戻していただけませんか？」

「コイツをか？ 戻しても良いがただの醜い男女になるだけだぞ。それに持っている力は全て無くなる。それでも良いか！？」

「マドを自由にしてあげたい・・・」

「ちよつと、ラン！ そんな気を使わないで。わたしまだこのまま
でいいから」

「でも」

そこにサルージがポンポンと、ランの肩を叩いていった。

「ランちゃん、いつでも戻せるんだろう？　だったら急ぐ必要も無いさ！　それに　いざ　という時にはだんなが何とかしてくれるって！」

ジェラはオラル達を見ながら呟いた。「何者・・・おかしな奴らだ」

ハルは身支度を整えると荷を馬に積み、それを見たジェラはハルにいった。

「ハル、その馬は必要ない。直ぐにアルミアに着くゆえ」

「しかしアルミアまでは半月以上かかります」

ジェラは「それが？」という笑みで返した。

「オラルと言ったな。そなた等は何処へ行くのか？」

「そういえばまだ決めていなかったな・・・」

このヨマダイから先は大海が行く手を阻み、その先の事はまだ考えていなかった。

「だんな、なんなら一度ルードシアに戻りますか？」

サルージのその一言にランが期待した表情でオラルの顔を窺った。

「そうだな・・・一度計画を練り直すか」

その言葉にランはことのほか喜んでいた。

「ではルードシアで良いな」

ジェラはそういうと少し前に出て両手を前に翳した。すると人の大きさほどの空間が歪み始めた。

それに何かの風景が浮かび始めると・・・それはルードシアの城を映し出した。

「すごい！　これ、ルードシアの城だ！」サルージが近づいて覗きこむとジェラはオラル達にいった。

「そなた等が我を助けた礼だ。さあ、行くがよい！」サルージは驚

いて聞いた。

「まさか、この中に入れって!？」

「信用でしんか？」

オラルは馬を連れて来るとハルに寄った。

「ハルさん、またいずれ会う事になるでしょう。その時を楽しみにしています」

「はい、色々御世話になりました。事の次第はエドス参謀に報告します。是非アルミアに来て下さい」

互いに硬い握手を交わすとオラルはためらう事無くその空間に入って行った。

「じゃ、私達も行こうか！」

スーランがポンっと、ランの肩を叩くとオラルの後を追って入っていった。

「ハルさん・・・」

ハルはランの両腕をしつかりと掴むと「大丈夫！」と頷いた。その優しい眼差しにランは小さく「はい！」と答えると笑顔のまま空間に消えていった。

ランにしっかりと巻き付いていたマドはジェラに「エヘヘ」と、何やら嬉しそうな表情を浮かべそのまま消えていった。

「ではあつしも・・・」最後にサルージが恐る恐る入って行った。

それを見送ったジェラは「次は我々だ」というと空間にアルミアの城が映し出された。

オラル達はルードシアの城近くの森の中に居た。

「あのジェラってすごい力を持っているね」スーランが城を見上げていった。そこに兵が近づいて来た。

「おい！　そこで何をしている！」

森の中では以前のように姫の二団が食事を楽しんでいる最中だった・・・

再会

再会

その夜、マリーの店ではランの家族とともに再会の宴が開かれていた。

「今夜は貸しきりよ！」

マリーが嬉しそうに言うと「さすが、太っ腹！」サルージがポン！と腹をたたいた。

奥のテーブルを2つ合わせそこにマリーとライム自慢の料理がさらに華やかさを増していた。

「そうですか、ランが・・・」

「ええ、今じゃ魔人を手玉に取ってね！好き放題やっているわよ！」

シンに答えるスーランの身ぶり手ぶりを交えた大袈裟な言い方にランは反論出来なかった。特にメイロでの正門を粉々に破壊してしまった事。『刀の力』と言い訳をしても恐らく誰も信じてはくれないだろう。

「そうですか。オラルさん、良い経験をさせていただきました。感謝します」

「いえ、こちらこそ助かりました。おそらくランさんはもっと強い相手と戦いたくなっているのではないでしょうか？」

2人がランを見ると、マドが目隠すようにしてランの声を真似した。

「もっと私を楽しませてくれる人いないのかしら？ なんならここ

に居る皆でかかってきても良くてよ！」

それを聞いたランはマドを両手で鷲掴みにすると左右に引き伸ばし少し引き攣りながら答えた。

「父さん、そんな事ないから！　まだまだ修行中の身です！」

その仕草をみても、まったくマドは、ぐらいにしか思っていないかったが母レイだけは違っていた。

びつくりした様子で口元を覆うとそれに気付いたシンがポンポンと肩を叩いて微笑んだ。

「どうやらいろんな意味で成長したようだな」

「・・・はい」レイはランの意外な成長ぶりに少し戸惑っていた。

「ところでマリーさん、我々が旅に出たあとまた魔人が現れたと聞きましたか？」

その問いにマリーは嬉しそうに答えた。

「そうなのよ！　なんとかキアラ隊長の部隊がくい止めていたんだけどね、あいつら人数増やして城内まで侵入しようとして来たのよ！　そしたらね！」マリーがシンを見て満面の笑みを浮かべた。

シンは照れくさそうに頭を掻いた。

「ではカズチ、アキム。元気でな、しばらくしたらまた会いに来る」

「ああ、この街の事は我々に任せてくれ」

「それじゃ・・・」シンとレイを乗せた馬はルードシアに向けて歩きだした。

カズチとアキムもシン達と一緒にルードシアに行くつもりであったが、やはり長く過ごしたこの街を出る事はできなかった。

「さてと・・・アキム、この街に賑わいを戻さんとな」カズチはアキムの肩に手を置いて2人を見送った。

「レイ、ルードシアまでは10日ほどかかるだろう。大丈夫か？」
「ええ、あなたと一緒になら何も心配いらないわ」

レイはシンの背中に寄りかかるとシンは繋いである手を優しく撫でた。

シンとレイを乗せた馬はミンを出てから8日目にようやく2つ目の山脈を抜けた。

ルードシアとミンに跨る2つの山脈を越えたのは2人とも初めてのことだった。山の中腹にある見晴らしの良い丘に着くと眼下に広がる広大な土地を海が囲っていた。

「オラルさん達が言っていた通りのすばらしい国ですね」

「ああ・・・こんなに綺麗な国がすぐ隣にあったとは」

「あつ、あそこ」レイの指差す先には森の中に小さく映る城があった。

「ここまでくれば明日には着くだろう」2人とも笑顔を交わすとゆるやかな獣道を下っていった。

早朝、シンはテントを片付けるとレイが水汲みから戻って来ないことに気付いた。

何度か呼んだが返事が無い。シンは不安を押し殺しながら近くにある沢に向かい岩場を駆け抜けた。

気づけば大きな岩に隠れ、しゃがんでいるレイが見えた。

「レイ、大丈夫か」

レイはシンに気付くとホッと胸をなで下ろした。シンは近づきながら遠目に見え隠れする魔人を確認するとレイを連れ森に隠れた。

「もう大丈夫だ」

「シン、見つかるのが怖くてここから動けなかった」レイは擦れる声を出しながら震えていた。

レイが落ち着きに戻すとシンは岩の影から覗いた。先には6人の魔人が辺りを伺いながら沢を下って歩いていくのが見えた。シンはレイを連れて戻ると馬にレイを乗せ引きながら距離をとり、沢を下っていった。

沢から小川になり畑が幾つか見える丘に出るとその先の森に続く整備された道が見えた。

シンは畑に人の姿が無い事を疑問に思うと魔人の一団を思い出した。

このまま小川沿いに進むか？ 考えていたとき森から馬に乗った3人の兵がゆつくりと現れた。

見回りだろうか？ 時折笑い声が聞こえた。兵達は畑の畔道に進むと土手から小川に降りていった。

兵達は馬を降りて腰を降ろすと1人の兵が腰の袋から酒を取り出して飲んだ。『仕事だぞ』などと冗談を言っているのだろうか？ 話し声は聞こえなかったがそんな感じのやり取りだった。

シンはそれを見ると馬を引いて行こうとした。

「どうした？」

馬が引つ張るシンを拒否した。目を大きく開き何かに脅えている。

兵達の方を見るとやはり水を飲んでいた馬が落ち着かない様子でそれを必死に制していた。

すると兵達を囲うようにモコモコと土が盛り上がり始めそこに先ほど見た魔人が現れた。

「なっ！ なんだ、お前は！」

抑えていた馬が暴れ出して逃げ出したが、その先々に土の中から魔人が姿を現すと逃げ場を失い3頭が寄り添った。それに隠れるよ

うに兵達も身を寄せた。

「ちょうど腹が減っていたところだ」

「ああ、馬もある。今日はついている」

兵達は剣を抜いてみせたがそれに動じることなく威嚇しながら取り囲んだ。

魔人が雄叫びをあげると倍ほどの体格になり囲いを縮めていった。

「さあて、どいつからにしようか？」太く響く声に恐怖した兵達は剣を投げ出して懇願しはじめた。

「たっ！ 助けてくれ！」

「欲しい物はなんでもやる！」必死に命乞いをする兵達に1人の魔人が聞いた。

「そうか、ならば姫がいる城は何処だ？」兵達は顔を見合わせた。しかしこのままでは殺されると思い1人が口を割った。

「教えれば本当に助けて頂けるのですか！？」

「ああ、約束する。で、どこだ？」

「その道をまっすぐ進むと城があります。そこが姫様の館です」

「なるほど。間違いないな？」

「はい！ 間違いないです」

「そうか。では約束だ、行くがよい」

「ありがとうございます！」

兵達は馬を連れることなく走って土手を駆け上がり我先に森へ続く道に消えていった。

魔人達是不吉な笑いで見送り少しすると同時に悲鳴に似た叫び声が響き渡った。

「ミギナの奴らも来ていたか・・・」

「ああ、これで揃ったな。後は夕暮れを待つだけだ」彼らはそう言い残して森へ進んだ。

「シン、お城が・・・」

「奴ら集団でこの城、姫を奪うつもりらしい」

「どうするの・・・」

「レイ、心配はいらない。もう2度と奴らの好きにはさせない！」

夕暮れが迫る頃、2人は姫の館近くの1番高い木に登り、気配を殺して様子を探っていた。

そこから見える城は夕日を浴びて黄金の輝きを放っていた。

門は女性をモチーフにした彫刻である。美しい姫なのだろうとそう思っていた時、何やら慌ただしく兵の一団がその門に到着した。

1人の兵が門に近づくのとそれに合わせるように開いた。兵は小走りに石畳の通路を抜け、王邸に続く階段を駆け上がっていくと中に消えていった。残された兵達は何かを警戒するように陣を組んだ。やがて王邸から兵が戻ってくると兵達に指示をし、それぞれの警備の場所に就かせた。

恐らく小川での一件に気付き警戒をはじめたのだろう。

やがて日も暮れ松明が焚かれた。

シンは警備兵が城内にはおらず、門の外に集中していることに疑問を持ったが暫くたつても何も起こらなかった。

少し眠気を催した頃、伝令らしき馬が着いた。慌てた様子で何かを伝えたあとその馬がまた戻っていくと、そこにいた兵の半分がそれを追って駆け出していった。

何かあったのか？ とシンはふと木の下からくる匂いに顔を向けると、魔人達の匂いだった。5人いる。

彼らは城に進んでいくとわざと見つかるかのように雄叫びを上げた。
「隊長！」

その声に答えるかのように残っていた兵達は門を囲うように陣を組んだ。さらにその兵達を魔人達が取り囲み威嚇しはじめた。

兵達は約20人、それに対し魔人は5人。しかし数では勝っても実力では敵わないだろうとシンは思った。ところが魔人達は威嚇はするがなかなか仕掛けない。兵達も盾で陣を組んだまま動かない。

シンは思った。先ほどの兵の半分が向かっていった方に魔人の本隊があるのか？すると下にいる魔人はおとりか？しかし入り口はここに違いないはず。

《 何だ！？ 》

目の錯覚だろうか、暗くて城内はよく見えなかったが確かに何か動いた。目を凝らすと石畳の脇の手入れされている花壇がモコモコと幾つも盛り上がってきた。それはシンが昼間に見た光景だった。

《 まずい、誰も気付いていない！ 》

「レイ、ここで待っていてくれ！」

シンは木の上で手を組み念を込めると背中に背負った箱から大きく太い剣を呼んだ。それに飛び乗ると暗闇の中を王邸目がけて飛んだ。

魔人達は次々と花壇から這い出てくると階段を上りはじめた。その数は30を超えている。

シンは階段の1番上に飛び降りると剣は上空に残した。

「だれだきさま、人間か！？ 死にたくなければそこを退け」魔人達は階段の中腹で止まるとシンを睨みつけた。

シンは階段を1歩降りた。

「お前達は魔人か、それとも妖魔人か!？」

「なんだと？ 我々は誇り高きアルセルデムの魔人兵だ!」

するとシンの後ろで明かりが灯った。振り向くとそこに姫が凜とした気を放ち立っていた。

「私はあなた方を呼んだ覚えはありません。すぐに御引き取りを」

従者の持つ光を受けたその姿にシンは暫し時を忘れた。

姫が門を指すとゆつくり開いた。すると外にいた魔人達は陣を組んでいた兵達を飛び越え一斉に階段まで駆け寄り合流した。

「ミギナよ、なにをしている!」

「ゼル、まあまで。楽しみはこれからだ。姫よ、そなたの持つ守護神の力を渡せば命だけは助けてやろう」

《 守護神？ 》

シンが姫を見ると両手を天に向けた。

「守護神は形として有るものではありません。守護神とは自然界そのもの。あなた方が望むようなものはこの城にありません」

ゼルはミギナより階段を1つ上がって言った。

「ミギナよ、話では姫を食った者だけがその力を得ると聞いた。ならば俺が頂く」

「そうか・・・」

そういつとミギナはゼルをその大きい腕で力任せに階段に叩きつけ気を失ったゼルを下に放り投げた。

「姫様!」

姫達の居る奥の通路から甲冑を身に纏った魔人が歩み寄ってきた。

「ミギナ、良くやった。後は任せるがよい」

「はい、ウォズル様」

階段にいた魔人達はウォズルを見るとひれ伏した。

「ここの兵達はだいぶ鍛えられているようだ、特に王は剣術に優れている」その言葉に姫は声を荒げて聞いた。

「あなた、父を！」

「さあ、だがあの腕ならばまだ持ちこたえていよう。部下もなかなか良い腕をしている。さあ、姫。私と一緒に来るが良い」

姫に近づくウォズルの前をシンが塞いだ。

「人間が、邪魔をするな」

「そうはいかない、私はこの国に大事な用があるのだ。貴様らの好きにはさせん！」

「血迷ったか、それとも素手でやるつもりか？」

「私はオラルさんにお返しをしなくてはならない。彼らが来る日までこの国には1人として魔人を入れるわけにはいかない！ 私は今日、鬼となる！」

シンは全身の血を滾らせ鬼の形相で印を組み念を込めると、シンの回りを風が渦巻き背負っていた剣が次々に飛び出した。その数は数百、いやそれ以上か。

月に向かって螺旋を描きながら舞い、誰もがその美しさに見惚れていた時、それらが一気に落ちてくると階段にいた魔人達に突き刺ささり1人残らず蒸発して消えていった。

「きつ！ きさま、何奴！」

シンの合図で上空に残っていた大剣がウォズルを貫きシンは王邸に

駆けていった。

「いえ・・・たまたま通りかかっただけです」

「またまた、謙遜しちゃって！ 1人残らずやつつけてしまったの！」

マリーはだいぶシンを気にいつていたらしくバシバシとシンを叩いた。

「ひゃゝ たいしたもんだ！ さすがランちゃんのパパだ！」サルージが乗っていうとランはまるで自分の事のように喜んだ。

「それでね！ 王様が直々にこの国の為に力を貸してくれて。わざわざ店まで足を運んでくれたのよ！」

「さすがはシンさん！ やることが違うねゝ！」サルージがあまりに褒めるものだからシンは顔を赤らめて答えた。

「私もまだまだ未熟でした。今の世の中、守るためには時として戦わなくてはならない。それにオラルさん達を見ていると私にはたいした力の無い事に気付かされました」

「シンさん、世の中には悪を断てる事の出来る人と、出来ない人がいます。我々はそれが出来る人間です。戦って人を守る、国を守る、弱い人を守る。それで良いのではないのでしょうか」シンは両手を見ながら答えた。

「オラルさん、私は戦いを始めるときあなたを超えたい、もっと力が欲しいと、そう強く願いました。ただ、どこかで自分を解放出来ずに力を抑えている事に気付いたのです。それは恐らく人としての一線を越える事。感情を無くす事だと気付きました。彼ら魔人達は悪に成り切ることでその力を得ているなら、そう考えると恐ろしくなりました」

「シンさんは感情に左右されず思いつきり自分の力を出してみた

「くなったのでしょうか？」

スーランの優しい問いかけにシンは自分でも分らずに涙がこぼれた。それに共感をしたオラルは立ち上がると少し間を置いてから話し始めた。

「みんな、聞いてくれ。これから話す事は俺の、俺に関わる人達のこの先の旅の目的だ」

その言葉に食い入るようにオラルに注目した。

一方、アルミアに姿を現したハルとジェラは草原のさらにその丘の向こうに見える城を目指して歩いていった。

「ジェラ殿、つまらぬ事を聞いてもよろしいか？」

「何だ？」

「あなたのその力を持ってすればわざわざ歩かぬとも城の中まで空間を繋げる事ができたのでは？」

ジェラは立ち止まると笑みを浮かべてハルを見た。

ハルは面と向かって美しい女性と話をする機会が正直なところ今までなかった。大魔術師という事を除けばただの美しい女性だ。ハルは妙な胸の高鳴りを感じた。

「ハル」

「はい」

「そなたは賢いな。そうだ、こんなに歩く必要はない。しかし私は魔人ではなく人間だ。奴らのような巨大な力は持つてはおらぬ。先ほどルドシアまで空間を繋いだ。そしてアルミア・・・これだけの力を使うと私は術の力を使いきってしまう。恐らく半月はまともな術は使えんだろ。ゆえに今はただの女だ。今なら下端の魔人共

にも勝てん」

「それは・・・そんな大事な事を」

「これで私の秘密を知ってしまったのはハルよ、そなたで2人目だ」
それを聞いたハルはメイロでの話を思い出した。

「そうだ、エドス。奴に借りがあるといったらう？ 術を使えぬ時の死にかけた私を救ってくれた」

「そうでしたか・・・」

2人の視線の先に上空を舞うエルードの姿があった。

「そなたは賢い、あのエドスと同じように。形はどうあれ今回そなた達に助けられた。私も人間だからな、信用できる者は何より心強い。さあ、そなたをエドスが待っておるぞ」

城門の回りにはハルの帰りを待ちわびていた大勢の獣人達が今か今かとその姿を待っていた。

2人が丘を下って行くと大きな歓声が聞こえてきた。

「ハル、そなたの帰りを多くの者達が待っておる。そなたの人柄ゆえだろう」

ハル自身、これほどまでに多くの仲間を迎えられる喜びに身を震わせていた。

城に近づくとも頭の馬が駆けてきた、ロージイだった。

ロージイは馬から降りると構う事無くハルに抱きついた。

「おかえり、兄さん！」

「心配かけたな」うつすらと涙を浮かべるロージイがそれを拭くとジェラに気付いた。

「こちらの方は？」

「エドス参謀の親しい方だ」

「そうですか、王を始め皆が待っています。いきましょー！」

ロージイはハルとジェラを乗せた馬を引いて城に向かった。

城に着くと多くの仲間の歓声に迎えられた。1人1人の顔を見るたび懐かしさが込み上げてきた。ハルは人目を憚らず涙を流しながら歓声にこたえていった。

「おお、ハル！ 良く戻ってきてくれた！ さぞ辛い思いを重ねてきたであろう」

神殿から王とエドスが降りてくると王はハルをしっかりと抱き、そしてエドスも続いた。

「参謀、私の未熟ゆえに今日まで時を費やしてしまいました」

「私こそ、あの時救ってやれなかった。だがこうして再会できた」

喜びを分かち合う2人に黒装束を纏ったジェラが歩み寄るとエドスの視線が移った。ジェラはそつと頭巾を外した。

「そなたは・・・」ジェラは驚くエドスにさらに近寄った。

「エドス・・・久しぶりだな」

「そうか、無事だったのだな」エドスは何かホツとした笑みを浮かべると肩を寄せ、王に紹介をした。

「王様、この者はあの伝説の大魔術師メイセイの1人娘です」

「なんと、あのメイセイの・・・そうであったか。では、ハルと共にここに来られたのもなにか運命なのかもしれんな。さあ、2人とも旅の疲れを癒してくれ。今宵は城を挙げての宴をしよう」

その夜は多くの仲間と共に祝杯を挙げた。

ハルはあまり酒の席は好きではなかったが今日は違った。仲間たちと酒をすすめられると次々にグラスを空けていった。

ハルはエドスを始め、仲間達にメドルから今日までの話を事細かく話した。

その話の時折エルードが加わり仲間達はその武勇伝に聞き入った。

そして話題はオラル達に移るとその人達には是非会いたいと皆が口を揃えて言っていた。

ジェラは宴の途中から中庭に出ると夜空に浮かぶ星を見つめながら思いを巡らしていた。

気になっていたのはダイムとあのこと。かすかな記憶を辿るが思い出せない。ただ、何か懐かしい思いを感じていた。そこにエドスが近づき話し掛けた。

「ジェラと呼ばばよいか？ それとも・・・」

「ああ、あの頃の私はもういない。今は魔術師のジェラだ」

「そうか・・・まだ忘れられんか」ジェラの頬を一筋の光が流れた。

それから1月後。

エドス、ハル、エルード、ジェラの4人は約束の日を迎えた。

日も高く昇った頃、城の高台にある解放された客間にジェラは空間を創り出すとそこにルードシアの草原が映し出され、オラル達の姿があった。

「では行きましょう」

ハルが入ると続いてエルード、エドス、最後にジェラが入っていた。

空間を抜けると心地よい風が4人を迎えた。

「オラルさん、この日を楽しみにしていました」ハルがオラルと堅い握手をするとエドスを紹介した。

「こちらがアルミア王国のエドス参謀です」

エドスはオラルの2回りほどの体格。その大きな手で握手を求め

られて一瞬怯んだが優しそうな眼差しに手を差し出した。

「ようやく会う事ができましたな、まずは礼を言わせて下さい。ハルを救ってくれて心から感謝しています」

「いえ、こちらこそ。どれだけ助けられたことでしょう。特にランの先生としてこちらが礼を言わねばならないと思っていました」

「おお、ではそなたが噂のラン殿か？」

刀を背負った娘を見つけると呼んだ。ランは久々の再開に少し照れていた。

「ハルさん・・・元気そうで」ハルは笑みを浮かべて頷いた。

「ということは・・・あなたがサルージ殿」髭を撫でる仕草をする
と皆が笑った。

「ちよつと、それは無いんじゃないの？」サルージは髭を整えると
ついでに髪をたくし上げた。

「いや、すまん。エルードから聞いておるぞ！ 何でもその銃で片
づいてしまつとか」

「まっ、まあね・・・」サルージも上手い事言われて照れてしまっ
た。

「そこに咲いている綺麗な花は・・・エルードに惚れておるとい
う」

「ちよつと、誰がそんなこと！？」スーランはハルを見るとハルは
目をそらした。もうっ！といいつつ ランの髪に隠れているマドを
掴んで持ち上げた。

「こらっ！ ちよつ！ 何するの！」

「あんたが会いたがつていた人がいるでしょ！」

「そんなこと言ってないじゃない！ はなしなさい！ ちよつ！
・・・オバン！」

スーランはその一言にカチン！ とくるとジェラに預けた。

「とってもあなたに会いたがつていたわよ！」

マドはジェラに捕まるとキョロキョロ必死に目を合わせないよう

忙しくもがいた。

「相変わらず気持ち悪いやつだ・・・」

マドはピタッ！とその言葉に反応してゆっくりとジェラを見た。

「そういうこと言う？ ひどい！ もうお嫁に行けない！ ここで死んでやる！ あんた呪ってやるんだから！」今度は大粒の涙を流しながら暴れた。

ジェラはそれを見ると・・・後ろに放り投げた・・・。

「ハルさん、マリーさんが食事の準備をして皆さんを待っています。そこで話をしましょう」

皆が楽しそうに立ち去って行くのを馬の糞に頭から突っ込んでいたマドが見送った・・・。

「おまたせ！ こんなに賑やかなのは久しぶりだね！ いっぱい食べてね！」マリーとライムは大皿を持ってくるとエドスに運んだ。

「おお、これは、これは。さっそく頂いてもよろしいか？」

「どうぞ！ まだまだ用意してありますから遠慮しないで！」

エドスの大皿には軽く10人前はあるような特大の煮込みスープが置かれた。そこには大きな肉の塊や野菜、魚介が詰め込まれていた。その大皿はオラル達が食べるのであればそこに居る人達で食べてもどうか？ という量だ。

マリーはこの日の為に連絡役のエルードからエドスの大食漢ぶりを聞いていて昨日から準備をしていた。オラル達も話には聞いてはいたが・・・その食い入る姿に言葉を失った。

食べ始めるとエドスは獣人の姿に変わっていった。恐らく本人も

気付いていないだろう・・・

「でっ、では我々も頂きましょう」ハルが氣を使つとみな食べ始めた。

「いや、これはおいしい！」普段あまり話をしないエルードがいうと食事を運んで来たライムが話した。

「ありがとう、母は姫様のお抱え料理人なのです。実はこの日の為にお城から食材が届きました。是非使ってくれって」

「ライム殿、それは本当ですか？」ハルが聞くと、城の窮地を救つてくれたシンに惚れこんだ王が是非にと。さらにはエドスに直接お会いしたいということを話した。それを聞き終えるとエドスは手を休めてオラルに聞いた。

「ならば礼を兼ねてこちらから伺わせて頂かなくては。それとオラル殿、そのシンという御方は？」

「はい、いまは城にいます。ランの父親です」

「おお、そうでしたか。ではラン殿の父親はほどの使い手なのでしょうな」そこによく腹を満たしたサルージが切り出した。

「使い手どころかあのシンさんに敵う奴なんていませよ！ それこそ怒らしたらどうなるか」

「ほう？ サルージ殿のその銃でも敵いませんか？」エドスは悪戯心で聞いてみた。

「それは・・・だんなに聞いてみて下さい」

サルージはオラルに話を向けるとエドスがニヤリと見た。

「なかなか面白い事になりそうですね！」

日が暮れ、王に会いに城に向かった。

エドス先頭に一団が通りを歩いていると街の人たちは『何者！？』という感じで脇に寄った。なかには家に入るや力ギをかけ戸を閉める者もいた。

城門に着くや否や大勢の兵が出てくると彼らを取り囲んだ。

「お前達、何者だ！」兵の1人が叫ぶとオラルがその兵に答えた。

「こちらはアルミア王国のエドス参謀です。王の呼びかけに応じ
て参りました」

「あやしいやつだ、そこを動くな！」

そこへキアラが近づきオラルの顔を見ると湖での一件を思い出した。

「そなたらが・・・王より話しは聞いている。どうぞこちらへ・・・」

キアラの後をついて行くと王邸に案内され、そこで待つようと言
い残して奥に消えた。

少しすると王と妃、そして後ろにシンが付き添い現れた。

「はるばるアルミアからよく来てくださった。あなた方英雄の話は
このシンより伺っています。さあ、こちらへ」

客間へ通されるとそれぞれ席に着いた。王はシンにランの隣に座
るよう促した。そこに遅れて妃が来ると王の隣に座った。

「エドス殿、遠い所を良く来てくれた」

「レイド国王、お招き頂き感謝します。ゼイル国王も喜ばれるこ
とでしょう」それを聞いたレイドは薄っすらと涙を浮かべた。

「あなた・・・」

ルーシー妃はそつとレイドの手を握るとレイドは涙を拭った。それ
を知らない者達は恐らく過去に何かあったのだろつとそれぞれ感じ
ていた。

「なにがあつたのかしら？　ラン、知りたくない？」

「ちよつとマド！　静かに！」ランは頭の上から身を乗り出して

いたマドをテーブルの下に押し込んだ。

「オラル殿、以前にセーラ姫を救って頂いた礼をしていなかった。この場を借りて礼を言わせて頂く」

「いえっ、違います私では・・・」

「そうも聞いてはいるがセーラ、シンの話を聞くに恐らくオラル殿ではないか？ それ以外に考えられないと」そこにジェラが食い付いた。

「そうだ、ヨマダイでの一件といいそなたは何者だ！？」

確かにスーランやサルージもそこは知りたい所であつたから2人を始め再び皆が注目をした。

「私は・・・だれだ？」またしても真顔で返すと、しかし今回はハルが続いた。

「私も聞きたい、オラル殿は私にかけられた術からも救ってくれた。なにか事が収まらない時にでもまるで何事も無かつたように解決してしまう」真剣な眼差しにオラルは答えた。

「すべて・・・いずれ知る時が来るでしょう」含んだ笑みで返した。

「やっぱりだんなにはかなわないや」サルージが両手を上げるとそのまま後ろで組んだ。

「まあ、いずれ・・・という事にしておいてこれからどうするの？」スーランは諦めたらしく問いかけるとエドスがゆっくりと立ち上がった。

「つい最近、皆も知っているようにアルセルデームが滅びそしてそこから各地に散らばった魔人達が好き勝手に暴れ出した。メドルも滅びこのルードシアでさえ狙われている。ジェラよ、そなたの妖魔人も例外ではない」

「妖魔人？」レイド国王が訊ねる。

「エドス、ここから先は私が話そう」ジェラは立ち上がった。

「まず私はこう呼ばれている。大魔術師のジェラと。そしてザルギスでは闇の十人の1人だ」

「闇の十人？」

「そうだ、アルセルディムを滅ぼしたのは闇の十人の一人、マルカスだ」

「なんとっ！ それは本当か！？」レイドは驚いてジェラを見た。

「いや、そんなはずはない！ マルカスは私の父と親友であった！ それに彼は人間だ！」

「信じてもらえぬのも仕方のないこと。だが今更ウソを言っても仕方あるまい。彼は人では無く魔人であった。だがマルカスはなぜか人間に姿を変えていた」そう言うジェラは少し言葉に詰まった。

「あのハルデイスでの戦い以来・・・私は魔人に復讐を誓いそして魔人よりも強い妖魔人を創りあげた。始めは『失敗の連続』であったが今ではそなた達が倒せなかった闇の十人の1人、ジュールを一撃で倒せるほどの妖魔人が完成した」

「では、あの黒い水を操っていた・・・」ランが《MUSAS I》での戦いを思い返した。

「しかし今の力ではまだまだ闇の十人の長であるハデスを含め、残りの奴らには到底敵わない。それに今回の事で私の正体は奴らに知られてしまっただろう。私は奴らに狙われる存在になってしまった」

「ちょっとまって？ 『失敗の連続』って・・・」

マドは首を餅のように伸ばすとジェラに近づいた。

ジェラは一呼吸置いて言った。

「・・・おまえだ」

「いつ、いや〜っ!」

マドはハリセンボンのように膨れるとプシュ〜! と縮まりながら天井まで飛び上がりヒラヒラと落ちてきた。

「闇の十人とは、魔人達が世界を我が物にするため特別な能力を持った者たちを集めた組織の名だ。

その中で私はただ1人の人間だった。そして私の力を知ったハデスは私を快く迎えた」

「人間なの?」

「人間であつたならとうに殺されておる、魔人の姿を借りて仲間のふりをしていた。

そして今回の計画を知り彼らが世界を掌握した後、私がそっくり頂く計画を立てた。

その時までにはハデスを倒せる妖魔人を完成させる自信があつた・・・」

「ならアルセルデイムの事は? 奴はマルカスを送ってアルセルデイムを滅ぼしたがその後、誰かによつて殺されたと。ジュールはそう言っていた」エドスは腕を組んだ。

「そこだ。我々も調べたがとうとう誰が殺つたのか分からなかつた」

「ではこれから先は、その闇の十人とハデスを倒すという事になるのか?」サルージが酒を飲み干すと赤ら顔で明後日の方に聞いた。

「まあ、そういうことになるな」

オラルがサルージの空になったグラスに酒を注ぐと「だんな・・・」

「我々も及ばずながら協力させて頂きます」オラルはスーランと酒を飲み干すサルージ、そしてランを見ると笑顔で答えてくれた。

シンはランの肩を頼もしく叩いた。

「それは心強い！ アルミアも共に闘いますぞ！」 エドス達も気持ちと同じだった。その光景に姫が初めて言った。

「なんとも頼もしい限りです、ねっ、お父様！」

「ああ！ 闇の十人だか何だかは知らないがザルギスに乗り込んでやろうではないか！ そこでだが、ザルギスに精通しているのはジェラとやら、そなたしかおらん！ 是非そなたの力を貸してくれ！」

夜が更けても彼らの話は尽きる事がなかった・・・。

決戦の地　：　魔人国ザルギス！

決戦の地　：　魔人国ザルギス！

ザルギスには大小を含め15の城がある。

そのなかでも7つの城はザルギスの防衛の要となる重要な位置づけであった。

7つの城は闇の十人の上位7人が城主となり下位3人はハデスに認められなければ城を持つことはできない力がものという組織でもあった。

山脈の城ソダイ城は闇の十人ダイムの居城ではあったが現在のところは誰が城主か分らない。

ジェラはハデスを除き各城に住まう闇の十人、1人1人を早朝までに殲滅するという大胆な計画を立てていた。

ジェラの空間を繋ぐという術、これは他の闇の十人にはない特別なもので今回の作戦のために術の精度を増し、6回までなら何とか体が持つであろうと予想をしていた。

しかし6回全てを使うと恐らくザルギスからみな帰る事が出来なくなるかも知れない・・・。

ジェラが最初に砂漠のハール城を選んだのには理由がある。その広大な砂漠であれば人気も無く夜であればなおさらでアルミアの軍隊などを知られる事無く駐留できるからだ。

この戦は闇の十人がそれぞれ1人の時になる機会を狙ったジェラの作戦であった。

この時期、雨期に入る前にハデスはそれぞれに城や土地を与えることを決まりとしていた。

選ばれた7人はそれぞれ入城し今後の方針を決めるため部下を選ぶ。魔人達は新たな城主に重役として選ばれるよう画策する時期でもあった。

しかし上位7人の力は衰えるどころかますます力をつけ、2年前から城主が変わることがなかった。唯一、ダイムの城を誰が任されるのか・・・しかしジエラはダイムの後に闇の十人を継げる者が現れていないことも承知していた。

ジエラの作戦では6回の制約がある空間移動をいかに効率よく使うかにあった。

まず西のハール城近くの砂漠に空間を繋げて全軍を移し（1回目）オラル率いるルードシア軍がハール城を制圧予定。

そこを起点に南の城メルソフィアヘシンが率いる妖魔人7人とともに移す。（2回目）

同時に北の城カルガラヘスーラン、サルージ、ラン、おまけでマドを向かわせる。（3回目）

エルード率いる妖魔人の鳥獣50人は湖の城ルメイロトに。（4回目）

オラル達は城を落した後、エドス率いるアルミアの軍隊と共に森の城リンシュンへ。これで5回目。

オラル達とアルミア軍は飛行能力が無い。

他の部隊にはマド、シン（妖魔人）、エルード（妖魔人の鳥獣）がいる。

集合は明け方の落とし終えているであろう森の城リンシュンだがオ

ラル達とアルミア軍が制圧していることが絶対条件だ。

そこからハデスの居城、その名の通りハデス城へ全軍で進軍する。進軍すればハデス城に着く前に気付かれてしまうがそこは仕方ない。そのためにアルミアの10000の軍勢がいる。

そしてハデス城が最後の決戦の地・・・6回目の空間移動により全軍で帰還する予定になっている。

この計画通り上手くいくかは誰にも分からない。
ただ、ジェラは闇の十人と対等、いや、それ以上のちからを持って
いると感じ絶対とは言いきれないが不安は無かった。

西の城・・・ハラール城 【闇の十人：シグスレイ】VS

オラル・キシア率いる精鋭部隊100人

南の城・・・メルソフィア城 【闇の十人：アーミング】VS

シン・妖魔人7人

北の城・・・カルガラ城 【闇の十人：ニベル】VS スー

ラン・サルージ・ラン・マド

湖の城・・・ルメイロト城 【闇の十人：リビンゾ】VS エ

ルード・妖魔人の鳥獣50人

森の城・・・リンシュン城 【闇の十人：ジン】VS オラル・

キシア部隊+アルミアの軍隊1000人

東の城・・・ハデス城 【闇の十人：ハデス】VS ジエ
ラ率いる全軍

山脈の城・・・ソダイ城 【闇の十人：未定】

松明の焚かれた広い草原のなかザルギスに乗り込むためジェラ、オラル、エドス等3人の前にルードシア軍、そしてアルミアの軍隊が集結していた。

さらにジェラが特別に造り上げた飛行能力を持つ妖魔人7人、そして妖魔人の鳥獣50人がいた。

すべての戦略のカギを握っていたのは唯一ザルギスを知るジェラであり今回の総大将を務める。

草原の中に軍勢が列をなしている。

ジェラを中心に向かって左からスーラン・サルージ・ラン、マド。隣にはキシアが率いる100人の精鋭部隊。

少し間隔をあけてエルード率いる妖魔人の鳥獣50人。

その隣にシンが隊長として率いる妖魔人7人。

さらに間隔をあけてアルミアの軍隊1000人が整列している。

その1番前に小柄なシエルが鎧に隠れていた。

「ラン、ジェラ様の妖魔人・・・あたしあんなだった？」マドは魔人よりも妖魔人に恐怖を感じていた。

「そうね・・・でもあんなに戦闘を意識した姿ではなかったわ。マドはカ・マ・キ・リだったから」

「か・ま・切・りって・・・」

ジェラは軍勢を前に声をあげた。

「よいな！ この最初の攻撃にしくじれば我々に2度とチャンスは巡って来ない！」

ジェラはオラルとキシア隊100人の精鋭に令を発した。

それにこたえるように興奮を抑えつつキシアは1歩前に出た。

「はっ！ 我々ルドシア軍はこの日の為に全てを捧げてきました、必ず勝利を掴むことを約束します！」

キシアは力強く拳を胸に当てると後ろに控えていた兵達も続いた。ジェラはそれを見るときっかり頷いた。

「ではこれよりザルギスへ乗り込む！ 用意はいいか！」

兵達の雄叫びが地響きとなり、遠くの森から一斉に鳥たちが飛び立ち月明りを遮った。

ザルギスの西にあるハラール城近くの砂漠地帯

乾燥した土の匂い。それ以外、匂いというものがない。気温が下がり、風も静かにしている。大地が行く末を案じているかのようだ。

ジェラが3つの空間を同時に創り出すと黒い大地、そして黄色の月明りに虹色の波が加わった。

ジェラの術によりハラール城近くの砂漠に全軍を移し終えたジェラはすでに出陣の準備を終えているオラルとキシアの精鋭部隊100人に近づいた。

「では、行ってくる」

「ああ、待っておるぞ」

オラルが先に駆けだすとキシアを先頭に精鋭部隊が後に続いた。主従は互いに笑みを浮かべておりこの日をどれだけ待ちわびたことだろう。

「シン、くれぐれも慎重にな」

「はい、でも心配には及びません」シンは妖魔人7人を見て頷いた。

「我が同志たちよ、頼むぞ」妖魔人7人はジェラに頭を下げた。ジェラが空間に手を翳すと虹色の波の中から広大な岩山が現れシンを先頭に入っていた。

「そなた達・・・任せたぞ！」

「まかせてください！」

サルージが銃を高々と上げると手綱を引き空間に向かった。スーランとランは特に緊張した様子も無く軽く手を振っていた。

「ジェラ様・・・」

「期待しているぞ」

ランの頭に乗っていたマドは大きな目にいっぱい涙をためながらビシッと敬礼してみた。

「はいっ！ 行つてまいります！」

「アルカ、リビンゾはなかなか頭の切れる奴だ、警戒を怠るなよ。あくまでエルードのサポートという事を忘れるな」

「心得ております」鳥獣の指揮官アルカはしっかりと頷くと控えている50人もつづいた。

「だが、いざという時はアルカ、私にかまわずリビンゾを倒してくれ」エルードがアルカの肩に手を置いた。

それを見たジェラは頬をあげた。「エルード、そなたが倒せない敵なら全軍で引き上げてこい」

鳥獣達は唸りつつ引き攣った笑顔を浮かべていた。

「そういうことに・・・」

虹色の空間が歪み、月明りを反射する湖が映し出されエルードとアルカは鳥獣を引き連れて空間に入っていた。

ジェラはそれぞれの部隊を送り出すと多少の疲れが出たのだろう、

肩で息をしている。それに気づいたエドスが近づいた。

「ジェラ・・・」

「気にするなエドス、オラル達の部隊が戻ってくるまで少し休む」

「それがいい・・・」

「なっ、なにを!？」

エドスは抵抗するジェラを抱えると砂山をあがった。

「立派になりましたな・・・姫」

「言っな・・・」

ジェラは笑みを浮かべエドスをコズいた。

2人はやがて訪れるであろう戦いをまえに安らぎを感じていた。

西の城ハラル城。 闇の十人の1人「シグスレイ」VS オラル・キシア率いる精鋭部隊100人

オラル、キシアを先頭に精鋭部隊100人がハラル城を目指し駆けていく。砂漠が馬脚を吸収し臆することなく全力で駆ける。

オラル部隊はまずハラル城を落とし、再びジェラ率いるアルミア軍に合流し森の城リンシユンへ向かう予定だ。なんとしてもリンシユン攻略が遅れる事だけは避けなければいけない。

集合場所が敵のアジトという最悪のシナリオはジェラの頭の中にはこれっぽっちも無いことをオラルは理解していた。

「オラル殿、湖の一件では危ういところを救われました」キシアの眼差しは信頼に満ちている。

「いえ、あれは私では・・・」

その答えにキシアは王と同じ返事をしたが、信じるに値する戦いを目の前で見てきたキシアは今回オラルと組めたことがなにより嬉しく、また誇りであった。

「見えてきました」

白で統一された城は月明りを吸収し黄金色を放っている。中央の宮殿は月を目指す巻貝のようだ。それを囲う外壁は柔らかなハートを描き所々に窪みがある。全体に角は見当たらない。

「ジェラの言っていた通りだ」オラルは馬を止めると下から見上げ

る、それに部隊も続いた。

「ジェラ殿の言われた通り入り口が無いですね。シグスレイが認めた者以外は入れないということも頷けます」キシアは手を翳しながら見上げた。月明りの反射角度によつては直視できない兵もいた。「急ごう」部隊は城の光を受けつつ北側を目指し再び駆けだした。

「恐らくあの小さな窪みですね・・・」

城の背後にあたる場所にジェラの指摘通りに小さな窪みが見えるとキシアは兵たちを鼓舞した。

「ここから先は何が起きるか分からない、みな心してかかれ！」

『その窪みはカモフラージュされている』ジェラはそう言っていた。外からでは城の一部にしか見えないが手を入れたとたしかに壁は無く吸い込まれるようだ。おそろおそろ中に入るとその部屋は横に伸びている。部隊を整列させることができる広さだ。

だが一番驚いたのは城の中からガラス越しのように外を見ることが出来るということだった。ジェラはこのことには触れていない、という事は必然的にシグスレイは警戒していたのであるう。

「すべて見られているようですね・・・」

「そうらしい、だが魔人が1人も出てこないのはどういうことだ？」

「余裕でしょうか、それとも何か罠を仕掛けているのか」

「余裕だろうな・・・」オラルは笑みを浮かべた。

キシアは城の外に40人の兵を残し中の部屋に入ると作戦通り兵を分けた。

「ではオラル殿、後で会いましょう」

「ああ、任せてくれ。必ず誘い出す」

部屋から出ると外壁の中の通路を右手側にオラルと兵20人が、左手側にキシアと兵40人がそれぞれ進んでいった。

オラルはジェラのいう最上階のシグスレイの館を目指した。

作戦ではキシアとの合流地である広間まで誘い出す役を買って出た。キシアと精鋭部隊だけでは魔人相手に分が悪い、精鋭部隊とはいえ生身の人間ではともに太刀打ちできない。が、ジェラはそこにオラルという存在を確かめる意味であえて誘い出す役を押し付けた。オラルが直接シグスレイと当たれば良いと考えての事でもある。オラルは会議でキシアに『俺が誘い出す』と答えていたが、これはジェラが裏から手を回した結果だ。

「ほんとうにこの城には1人の魔人もいないのでしょうか？」オラル隊は1人の魔人に会うことも無く最上階に進んでいった。

「キシアも言っていたがシグスレイ自信が認めた者しか城には入れないというのも分かる気がする」

「はい、ですが気配すら感じません。しかし我々が来たことは既に知っていると思いますが・・・」螺旋の階段を上りながらガラス越しに見える月を見上げた。

一方《 宴の広間 》と呼ばれている合流地にキシアの部隊は到着した。

「これは・・・」

真っ白なその広間は円形の造りをしている。12本の柱が外側に配置されていることに気づいたのは目が慣れてからのことであった。

「気に入ってもらえたかな？」

囁くような声が広がる。恐らく広間のどこにいても聞き取れるだろうその声にキシアは答えた。

「すばらしい造りだ、是非城の主にお会いしたい」キシア達は身構えつつ入り口を背に陣を組んだ。

すると奥の柱の1つが虹色を描き下から上へと舞いながら混ざり合うとカラフルな魔人が現れた。

「ようこそハラル城へ。まあ、呼んだ覚えは無いのだが・・・この城に入って来られた、ということはジェラの使いか？」スラリとした長身の魔人は尋ねた。

「使い、そういう事になるか・・・」キシアが答える。

「そうか、ではジェラはやはり人間だったのか。ということは、そなたらはここに何をしに来たのだ？」

「察しの通り、我々はそなたの首を頂きに参った」キシアが剣を向けると兵たちも続いた。

「そうか」シグスレイは笑みを浮かべて言った。「では、私の首を持っていくがよい、取れるものならな」

時同じくオラル達は最上階のシグスレイの館と思われる場所にいた。

「オラル殿！ こちらにも誰もおりません！」

「こちらにも！」頂上付近の少ない部屋を確認した兵たちが見回りから戻ってきた。

「オラル殿、最初から隊長の部隊を狙っていたのでは！？」

オラルは奥歯を噛むと1つ息を吐いた。「急いで戻るぞ！」

オラルたちが宴の広間に近づくや入り口から虹色の光とともに風圧を受けた。

兵たちは一瞬怯んだがオラルが警戒しつつ部屋を覗いた。

白い部屋はすでに兵たちの彫刻で飾られ、キシアが魔人の手から落ちていくところだった。

「一足遅かったな、この者達はいずれ城の一部にしてやろう。光栄に思うが良い」

「キシア・・・」オラルは1人部屋に入ると倒れている兵に触れた。「・・・酷いことを」

「酷いだと？ 勝手に私の城に入って来たことは許されるのか？」
オラルは魔人に背を向け怯える兵達に告げた。

「残りの兵は急ぎ戻れ！ そしてジェラにこう伝えよ『予定通りに進め』分かったな！」

「しかし！？」

「心配するな、さあ行け！」

オラルの怒りにも似た声を感じ取ると兵たちは言われるがまま成す術も無くその場を離れるしかなかった。

「御武運を！」その場を足早に去っていく兵たちは理解していた。やはり魔人と戦うには何かしらの術を持ち合わせていなければ太刀打ちできない事を。

「予定通りとは？ そなた1人残ってどうしようというのだ？」

オラルは兵達が去ったのを確認すると一呼吸置いてから振り向いた。その表情はまるでこれから楽しいことが始まるかのようにシグスレイを覗き込んだ。

「奴に対抗できる能力かどうか『闇の十人』の力とやらを確かめたくてな、わざわざこうして機会を作ったという訳だ。それにこの姿・・・あまり長い期間解放しないと自分を失ってしまうからな」言いながら少しずつ黒い煙がオラルを囲い、やがて煙に覆われた・・・

黒い煙の中から人の様ではあるが魔人でも獣人でもない姿をとらえるとシグスレイは咄嗟に距離をとった。

「どうした？ さあ、はじめよう」

「その声・・・あなたはもしかや！？」

「気にするな。さあシグスレイよ、その力を見せてみる」

「ハデス様・・・なぜですか！？ なぜ人間共と！？」

「それを知る必要はない」

「お待ちください！ このシグスレイ、『闇の十人』のなかでも常にハデス様の目となり影を務めて参りました。それは私が誰よりも力のあることをハデス様自身が認めていたからではないのでしょうか！？」

「その通りだシグスレイよ。だから今回私が直々にその力を見てやるうというのだ」

「いったい何のためにです！？ お答えください！」シグスレイはめずらしく感情を露わにした。

シグスレイは冷静沈着が取り柄、ハデスの影を務めるほどの知恵にも富んでいる。

その魔人がここまで言うのだ、オラルは2人きりなのを確認するとシグスレイに歩み寄った。

「全ては奴を倒さんがため、10の結界発動石を操るには10人の選ばれた術が必要なのだ」

「10の結界発動石・・・ハデス様、奴とは！？」

オラルはそれに答えるように黒い煙からシグスレイに似せた分身を創り出すと分身は煙の尾を引きながらシグスレイを見定めるようにコンパスの円を描いた。

「すべてはこの者を倒す事ができたなら教えてやろう」

シグスレイはその者の力を計るように7色の光が体中を駆け巡った。そしていつもの冷静沈着なシグスレイがそこにいた。

「・・・承知いたしました。ではハデス様、私をその選ばれた者にお加えいただきましょう」

対峙する2人にオラルは令を発した。

先に仕掛けたのは黒のシグスレイであった。煙となり光を発するシグスレイを取り囲むと手足の自由を奪い、さらに黒蛇となった体は白い体をギシギシと締め付ける。だがシグスレイは表情を変えていなかった。

「さすがです、だが・・・」

シグスレイは手のひらを柱に向け光を発した。それは12本の柱を自在に飛び移り全てに光が灯るとシグスレイのもとに集まった。

「ここは私の城、何人も私を倒せない！」

シグスレイは集まった光を集約すると一気に解き放った。

シグスレイは何事も無かったかのように首を回した。

「ではハデス様、約束通り私を」と、そこまで言いかけたとき、にわかには柱が黒ずみはじめ先と同じに12本の柱を自在に飛び移り全てに黒い光が灯るとシグスレイに取り込まれ、抵抗する間もなく美白の魔人は侵された。

やがて全身が石化していくと同時にビシビシと音を立てながら崩れていった。

「やはりこの程度か・・・」オラルは人の姿に戻った。

シグスレイの術により石化されていた兵たちはかけられていた術が解け徐々に人の姿をとりもどしていった。

「これはいい・・・」

「キシア、よく眠れたか？」

キシアは状況を飲み込めていなかったが兵たちが集まるのを確認すると起き上がった。

「オラル殿、シグスレイは？」

「あそこだ」視線の先に黒く砕けた石の塊があった。

「少し時間がかかってしまった、残った兵はすでにジェラとともに
リンシュンに向かっている。我々もあとを追うぞ！」

「はっ、しかし移動手段が・・・」

「心配するな、夜通し駆ければ間に合うだろう」その自信に満ちた
言葉にキシアはおおきく頷くと兵たちに声をかけた。

「皆の者、まだ戦いの機会は残っている！ 遅れをとるな！」

南の城・・・メルソフィア城。 闇の十人の1人【アーミング】VS シン・

南の城メルソフィア城。 闇の十人の1人【アーミング】VS
シン・妖魔人7人

ジェラの空間移動によってメルソフィア城の海側より現れたシンと妖魔人7人。

メルソフィア城は海岸から内陸に1キロほどの所にある。 広大な岩山の中に建てられている城は、もはや城と呼ぶよりは巨大な要塞とでも呼んだほうがふさわしい。

この険しい岩山を地上から歩いていくには途中で野たれ死ぬか転落して・・・その間に間違はなく魔人に見つかってしまうだろう。

この一帯を仕切る魔人、アーミングに関する情報をシンは飛行中の妖魔人の背に掴まりながら思い返していた。

『シンよ、アーミングは鉾石を身に着けた魔人と聞いている。 それしか分かん。 まともな城の情報すら無い。 私の妖魔人達はそれに特化した術を持たせてはいるが、何が起きるかは実際に戦ってみないとわからない。 そなたの剣でさえあるいは負けるかも知れん』

ジェラには多少の不安があったのだろう。 しかしシンはある胸の高鳴りに逸る気持ちを抑えていた。

それは今、仲間の誰一人として見ている者はいない。 感情に左右される事無く思いきり力を出せる。

ただシンにはそれにも増して気になることがあった。

ルドシアで魔人を1人残らず倒した時から何か胸の内ですつと呼ばれている感覚がある・・・

（私を呼ぶのは誰か）

やがて岩山の中にある城が見えてきた。

夜の闇のなか広大な岩場を飛んでいると似たような城が3つ突き出しているのが見えてきた。

およそ500メートル間隔だろうか、それぞれが正三角形を組んでいる。

「・・・どうしたものか」

シンは上空に止まるように指示を出すと掴まりながら妖魔人に聞いた。

「どの城にアーミングがいるか分かる者はいないか？」

その問いにシンの隣にいる妖魔人が答えた。

「ここには大人数の妖魔人が至る所にいる。もはや匂いだけでは見分ける事はできない」

「そうか。では他の妖魔人に知られる前に終わらせるには同時に3か所を攻撃する必要がある」

「それしかないだろう」みな一同に頷く。

シンは3つの城を順に指さし提案した。

「ではこうしよう。3:3:2で分かれ各上空に1人残り連絡役とする。合図と同時に侵入し、アーミングがいなかった城からはすぐに引き上げ、それぞれアーミングのいる城に向かう。これでどうだ？」

「いいだろう」

シンを乗せている妖魔人が彼らを分けた。そして一度彼らの目が赤く光ると確認を終えた。

「では頼む」

各々指定された城に飛んでいった。彼らが暗闇に溶け込むとシンの視界からは消えていく。

シンは確認するように下に控えている妖魔人を捉えると彼は突入の指示を待っていた。

シンを乗せた妖魔人がそれぞれ配置についたのを確認すると目が赤く輝いた。

それを見た妖魔人達は一齐に各城へ飛び込んでいった。暗闇のなかシンは離れた妖魔人を見ることは出来なかったが、下に構えていた妖魔人が城に飛び込んでいったのを見てそう判断をした。

ひと時の沈黙が闇を包んだ時、シンの下にある城から妖魔人が戻ってきた。手には魔人の頭を3つ抱えている。

「ここは違う・・・」そう言つと大きな口を開けゴクリと飲み込んだ。

「そうか、では残るは2つだ」シンを乗せた妖魔人は2つの城の間を目指した。

すると突然、向かつて左手にある3人の妖魔人が侵入した城が広大な岩場に響くほどの大きな音を立てて崩れていった。

「あそこだ！」

崩れた城の上空に煙が立ち込めるなか傷ついた妖魔人が飛び出してきた。そこにシン達が近づくと2人の妖魔人に抱えられた傷を負っている妖魔人は下を見ていた。

「どうした!?」シンを背負っている妖魔人が聞いた。

「あれが魔人だというのか・・・」彼はまだ警戒している。

見ると煙の中から20人ほどの魔人達が飛び上がってきた。その中の1人がシン達の前に出てきた。

「我に挑んでくるとは愚か者が、余程死にたいと見える」その魔人は人の姿であった。

「子供！？」シンは自分の目を疑った。暗闇とはいえ月明りに照らされた姿形は紛れもなく男の子供。

「人・・・なのか！？」

「俺は人間だ・・・文句あるか」その子は腕を組み不機嫌そうだ。

「まてまて！　なぜだ！？　人がなぜ空を飛べる！？　それに子供ではないか！？」シンは身を乗り出して危うく落ちそうになる。

「そんな事はどうでもよい、お前たちはこの魔人に用があるのだろっ！？」

「そうだが、そなたはアーミングではないのか？」

「アーミング・・・そいつはお前らの後ろにいる奴のことか？」その子がシンの後ろを指さした。

振り向くと・・・月明りに照らされた数百いや、数千の魔人達に囲まれていた。

さらに子供に視線を戻すと後方から数千の魔人が現れた。

「なんとということだ・・・」

「アーミング！」子供が呼ぶとシン達の上空から1人の魔人が下りてきた。その魔人は月の光を受け漆黒の輝きを纏っている。

「すまなかつたな、とんだ邪魔が入った。主に伝えてくれ『次はこちらから参る』と」

「いいだろう、伝えよう。ではこれで失礼する」

そう言い残すと子供はマントで身を包みそのまま飛び立って消えていった。シン達はただそれを見ているしかなかった。

「お前たち、私に何か用か？」そう呼ばれてシンは視線をアーミングに戻した。

「そなたがアーミングか？」

「ほう、きさま人間か？　しかし随分と違うな・・・」

先ほどの子供と比べているのだろう。しかしシンは冷静だった。

「今の子供はいったい誰だ！？」

「お前達には関係の無い事、それより私に何か用でもあるのか？」
腕組みをしてシンの返答を待つ。

シンはぐるりと見回した後、口を開いた。

「アーミング、私の望みを聞いてはくれぬか？」

「望みだと？ 何だ、言ってみろ」

シンは置かれている状況に臆する事無く言った。「そなたと1対1で戦いたい！」

少しの間を置き魔人達が笑い出した、この数を相手に生きて帰ることが出来るのかと。

「私と戦いたいだけで乗り込んで来たというのか？ 馬鹿な奴だ。」

貴様なんぞ私が手を下す必要もあるまい。ここにいる兵達で十分だ」

「逃げるのか！？」シンは動揺していない、むしろこの数相手に受けて立つつもりだ。

アーミングはフツと笑う。「そう言えば戦わざるを得ない、などと考えているようだが飛べぬお前と戦う以前の問題だ」足元を指さしながら言う。

「なら私が飛べる事ができたら戦う、そういうことか？」シンは期待に胸躍らせた。

アーミングはそれを察したのか、首をかしげた。

「そこまで私との一騎打ちがしたいのか？ ならここにいる兵達を全て倒したら戦ってやろうではないか」そう言つと数万の魔人達は再び一斉に笑い始めた。

シン達は7人。1人は恐らく先ほどアーミングかあの子供に倒されている。戻って来ないということはそういうことだろう。

「どうだ、それでもやるか！？」

その問いにはシンを乗せている妖魔人が答えた。

「それでいい。しかしシンが出るまでもない、雑魚共は我々妖魔人が相手をしてやろう」

「妖魔人だと？」アーミングはその姿を見て何かを思い出したようだ。

「貴様、ジェラの・・・そうか、くだらん事を考えおつて。いいだろう、相手をしてやろう。まずは我が兵達と妖魔人とやら、お前たちからだ！」

シンは先ほど傷を負った妖魔人の背に乗り移った。しかしその妖魔人の傷はとうに癒えていた。恐らくジェラの術によるものだろう。

2人はアーミングと共にその場を遠く離れた。

「アーミング、約束は守ってくれ！」シンは隣で不敵な笑みを浮かべているアーミングに確認する。

「いいだろう。だが、たった5人の妖魔人で勝てると思っているのか？ 先ほど1人相手をしてやったがあれでは期待できない」

「妖魔人をすべて倒せばよいのだろう、いざとなれば私も戦う！」シンは拳を握りしめた。

それを見たアーミングはニヤツとすると手を上げた。「始めろ！」

妖魔人兵：約2万5千 VS 妖魔人：5人

妖魔人は5人で円形の陣を組んだ。その回りは妖魔人兵約2万5千・

・

最初に仕掛けたのは妖魔人兵達だった。

妖魔人の近くにいた数百の妖魔人兵が両手を翳し、妖魔人を中心に巨大な玉の結界を創り出した。

すると次に待ち構えていた数百の妖魔人兵が結界の中に黒と白の石の塊を無造作に投げ入れた。

妖魔人達はそれを労する事無く避けると再び陣を組んだ。

やがて幾つもの石が結界の下に集まるのを確認したアーミングはシンに言う。

「ジェラが何か対策でも練ってきているのだろうか、残念だったな。呆気ないがこれで終わりだ」

アーミングが手を上げるとそれを合図に結界を張っていた魔人兵達は術で石を操り始め、まるで鉄砲玉が玉の中で弾けるように妖魔人達を攻撃し始めた。

最初、妖魔人達は難なく避けていたが石の数が増えるにつれて徐々に攻撃を受け始めると5人の妖魔人達は成す術なく全身で受けるしか無くなってしまった。

暫くして攻撃が止み大きな石の塊が中心に出来上がっていた。

「終わったな。ジェラは多少、私の情報を得ていたつもりだろうが肝心な事を何も知らなかった」

「それは・・・」

「ここにある一部の石、岩。これらにはたいして術も大砲も効かぬ。そしてこの石の特性を私は唯一取り込めることが出来た。よってこの私を倒せる者など存在しないということだ」

言い終えると妖魔人を覆っていた石がピピシと砕けながら岩山へ落ちていった。

そして中心に潰されていた妖魔人達が1人、そしてまた1人と落ちていくのをアーミングは頬をあげ見ていた。

「シンとやら、さあ、どうする？　ここの兵達を全て倒さねばお前の望みは叶えられんぞ？」

シンは魔人兵達を見るやかなり訓練を受けている様子に思わず唇を噛みしめた。

「・・・では私が相手をする」シンは身を乗り出した。

「シン、待て。我々妖魔人はこの程度では死なん。ジェラ様はこのために我々を使わされたのだ」

身を乗り出したシンを制止しながら言った。

「どういう事だ？」

妖魔人はその問いに答える代りに目が赤く光りを放つ。

すると妖魔人達が落ちて行った辺りでドンッ！ という何か弾ける衝撃音と共に上空に飛んで行ったものがあつた。それは妖魔人のようではあるがどこか違った。

「なんだ！？」アーミングだけではなくシンを含め、多くの妖魔人も突然の変わりように言葉を失つた。

それは妖魔人兵達の中に飛び込んでいくといきなり空間を創り出し広げた。この妖魔人の集合体はジェラの技を継いでいるようであつた。しかし空間の先に何が待ち受けているのかは想像できない。

宙を舞いながら妖魔人兵達を吸い込み始めると突然の攻撃に妖魔人兵の抵抗空しく3割ほどの妖魔人達が吸い込まれて消えた。

「超人化だ・・・」シンを乗せていた妖魔人がそれを見ていった。

「超人化とは！？」

「ジェラ様は超妖魔人と呼んでいる。我々の本来の姿は1人だ、それを今回ジェラ様が7人に分けた。なぜそうしたのは分からないが」

超妖魔人は続けて黒い玉を2つ両の手の上に創ると前後に密集している妖魔人に向かって放った。

それは妖魔人達に近づきながら回転を始めると徐々にスピードを増しながら大きくなり、近づく妖魔人を玉の中に飲み込み始めた。まるで意志を持つかのように矢のごとく次から次へと逃げる妖魔人達を飲み込んでいった。

最後の1人を飲み込むと2つの玉は超妖魔人に戻り2つの玉を合わせ手のひらサイズにし、バクツと飲み込んだ。

「ジェラめ、考えたな・・・そうか！ 奴は確か空間を操れるのであったか！？ ハデス様の為にもこやつは消しておかねば。だがその前にそなたの願いを叶えてやろう」アーミングはシンを見ていった。その表情に先ほどまでの余裕は感じられなかった。

闇の十人【アーミング】 VS シン

アーミングは大剣に乗り宙を操るシンを見ていった。「そのために体力を残しておいたという訳か。しかし似ている・・・」

「似ているとは？」

「まあよい。では、始めようか」アーミングが距離をとるとシンもつづいた。

アーミングは両手を伸ばすと右手を剣に、左手を盾に変え全身を光沢のある鉱石の鎧に身を包んだ。

「シンよ、約束通り相手をしよう。剣客としてのそなたに敬意を払い一切の手加減をせず全身全霊で戦う。よいな！」

シンは自然に両手を合わせ、頭を下げた。「感謝します。私も力の限り戦います」

「では、始めよう！」

アーミングは剣をシンめがけて突き伸ばした。シンはそれを飛び上がったかわし合わせていた両手に念を込めた。すると背負っていた千術箱から幾つもの剣が飛び出しシンを囲うように円を描いた。

シンは両手に剣を取ると構えた。

「シン、そなたはやはり・・・」アーミングは構えを解くと何かを確信したような言い方をした。

「私を知っているのか？」シンも構えを解く。

「私に勝つことが出来たなら教えてやろう」再び構えた。

「そうか、では参る！」

ようやく本気で戦える、誰に構うことなく。自分が何者なのか、その答えも恐らくあるだろうという期待とともに。

シンが構えを変えるとさらに千術箱から天高く剣の龍が現れた。

それはシンの突きของ構えでアーミングに襲いかかっていった。それをかわすアーミング、さらに襲いかかる剣の龍・・・しかしアーミングは何度かわしたあと、かわすのをやめた。

「・・・シンよ、そなたが本物かどうか試してやろう」アーミングは全面に盾を作り出し構えた。

シンはそれに躊躇することなく答える。

剣の龍は濁流となりアーミングを飲み込んだ。

シンは目の前の事態に目を見開いた。「なんてことだ、私の剣が効かないとは・・・」

剣の濁流をやり過ごしたアーミングは軽く息を吐くと言った。

「どうやら人違いであったようだな」アーミングは再び剣と盾を持ち構える。そして全身に力を込めシンめがけて勢いよく飛び出した。シンは咄嗟に螺旋状の剣を繰り出し応戦を仕掛けるとアーミングに直撃した。が、剣は次々に弾かれ砕ける。

しかしシンが念を込めると剣は赤黒い雷を纏い徐々に押し返していった。だがそれも弾かれはじめた・・・

「シンよ、残念だがこの程度では私に傷すらつけられん、覚悟！」

赤黒い剣の濁流の中からアーミングが飛び出すと高速で剣の濁流に巻きつきながら至近距離を捉えた。

そしてアーミングとシンの視線が交差する。

「なんのー！」

シンは咄嗟に両手の剣をアーミングに突き刺した。が、それは月の

光を弾きながら砕け散った。

その瞬間シンの表情が凍りつく。対するアーミングの目に慈悲は無かった。

むんっ！ アーミングの渾身の一撃がシンの胸を直撃した・・・

「よく戦った・・・シンを連れジェラのもとに帰るがよい。そう長くはもたないだろう」アーミングはシンを抱える妖魔人に言った。
「・・・シン、そしてジェラ様の為にも我々妖魔人がそなたを倒す」
赤く目を光らせながら答える。

「無駄だ、そなた達ではこの私を倒せん」その言葉に妖魔人は目を見開いて言った。

「我々7人はもともと1人の超妖魔人だ。元の1人の姿になればそなたを倒せる」その言い方に感情はこもっていない。

「そうか。しかし残念だが先ほど1人私が倒してしまった」アーミングは声のトーンを下げた。

「我々は7人の状態では死ぬことはない。そのためにジェラ様がそうされたのかもしれぬ。しかし1人の超妖魔人となり、それを倒せるほどの者が現れれば死ぬこともある」

「では、先ほど倒した奴はまだ生きているというのか？」

その言葉に反応するかのように妖魔人の目がさらに赤く光った。

すると城の中から先ほどアーミングが倒したはずの妖魔人が現れゆつくりと上がってきた。

「死んだふりはもういいのか？」

「ああ、待たせたな。どうやら戦う時が来たようだ」

アーミングはその妖魔人に問う。「それもジェラの作戦のうちなのか？」

「そついう事になるか。だが見くびらない方がいい、ジェラ様はそなたら闇の十人を倒すために我々が創られたという事を」

「なるほどな。ではジェラの思い過ごしだったという事を見せつけてやらねばならぬか、いいだろう相手をしてやる」

「後悔することになるぞ、だがシンを傷つけるわけにはいかぬ。城に預けてもよろしいか？」

「好きにしる。どのみち長くはもたない・・・」

3人はその場にアーミングを残し暗闇に浮かぶ城に向かった。

「ジェラめ、闇の十人に潜り込み我々を倒すために準備をしていたとは・・・浅はかな、ハデス様の本当の姿を知れば生きてはおれないだろうに」

月に話しかけるアーミングのもとへ超魔人が戻ってきた。その姿はアーミングの闘志にさらに火をつけた。

「待たせたな」

獅子の顔立ち。体は人のなりではあるが鍛え上げられた筋肉の鎧、それを覆う龍の鱗、鬼の手足。

「それが超魔人とやらの姿か！？」その姿を見てもアーミングは動じていない。

「そうだ。では、お相手願おう」先ほどとは声が幾分か厚みを増したようだ。

「場所を移そう、城を破壊されてはハデス様に顔向けできんからなシンもそうであろう」

アーミング VS 超魔人

2人は城から少し離れた山間の丘で対峙をしていた。
互いに地を噛む足に力が入る。

「武器は持たぬのか？」前傾で構える超魔人に聞いた。

「武器など邪道・・・我には武器も魔術も効かぬ」

「そうか、私と似ているな・・・それにあの御方にも」アーミングは不敵な笑みを浮かべる。

「アーミングよ、先ほどシンに対して言ったこと、私が勝ったら答えていただく」

「いいだろう、私を倒す事ができたなら教えてやろうではないか」互いに笑みを浮かべた。

山頂から冷たい風が吹き付け、それが合図となった。

むんっ！ 「はあああ！」

二人は同時に飛び出した。

アーミングは右の腕を槍に変えると突き出した。それを超魔人は右手で払うと左手に力を込め、胴をめがけて拳を振りぬく。同じくアーミングも渾身の一撃を繰り出し2人の拳が激突すると地が割れ、天が震えた。

（ここは何処だ！？ 私は死んだのか・・・あれは・・・父さん！？）

その真っ白な空間にいる幼少の自分をシンは上から見ている。そしてすぐそばに父がいる。強くたくましい父、自慢の父だ。

『息子よ、ようやくここまで来たな。さあ、遠慮することはない、心の赴くままに』

そう言い残すと徐々に遠くへ消えていく。

（父さん！ 待って！）

幼いシンは必死に走るが追いつけない。

『そなたは私の子、鬼の子・・・』

父は優しい眼差しでシンを見つめながら消えていった。

（鬼の子！？ 父さん！）

シンは消えていく父をただ見送るしかなかった。

シンは暗がりの中で薄らと意識を取り戻していた。

「父さん・・・なぜ・・・」

気が付くと胸が焼けるように熱く赤く火照っていた。そこはアーミングの最後の一撃をくらった場所だ。

「なんで・・・これは」すると意識の中で再び父が語りかけた。

『シン、私たちは鬼の子孫。心の赴くままに・・・そして神【シン】の国へ行け』

その声にシンは、はつきりと意識を取り戻した。
そして父に答えるかのように叫んだ。

父さーん！

その叫びに答えるように胸から赤い光が解放たれ全身を覆いつくした。

はあああ！

地を轟かすその声は大地を震えあがらせた。

「これが私・・・か」シンは自分の姿を何度も確認した。人の姿には違いないが力を込めると鱗のような皮膚が浮き上がる。

「父さん、鬼の子・・・神【シン】の国」呟くように記憶を辿ると不思議となつかしさに包まれた。

「そうだ、まだ戦いの途中であつたはず！」自然と頬を緩ませシンは城を飛び出した。

一方、アーミングと超魔人の戦いはどちらも引く事無く続いていた。「ジェラ、大した奴だ。この私と互角に渡り合えるとは」

「アーミング、互角ではない。私の力は衰える事はない。そなたが死ぬ前に先ほどの質問に答えてもらおう」

「調子にのるな、まだ奥の手は使つてはおらん。その気になればそなたを倒す事などわけの無い事だ」

「ではもったいぶらずに使うがよい。私もそれに答えよう」

激突を繰り返しながら2人の戦う場所は雲を超えた。やがてアーミングは地上に向けて急降下すると超魔人も追いかける。

再び岩山で対峙した2人は呼吸を整えた。

「確かにこのままでは決着がつかんな・・・」

アーミングは距離をとり、両拳を合わせると全身の色が徐々に透明になっていき闇の中に溶け込んでいった。

「姿を消したところで何も変わりはない」超魔人は目を赤く光らせると僅かにその姿を確認した。

「勘違いするな、姿を消したわけではない。この鉱石の特性によるもの」

「そうか、では！」超魔人はアーミング目がけて飛び出した。フツとするとアーミングは手を広げ叫んだ。

「これで終わりだ・・・」

シンはアーミングと超魔人が戦っている場所に近づくと超魔人の姿を見つけた。

「そなたは・・・」

アーミングは全身から放っていた幾つもの鉱石の槍を体に戻すと超魔人は支えを失いその場に倒れた。

シンは超魔人に近づいた。全身にその槍を受け倒れていた超魔人は消えかかる意識の中でシンを見た。

「シン・・・か」

「そうだ、そなた超魔人・・・」超魔人はシンを見ると笑みを浮かべた。

「そうか、笑ってくれ。ジエラ様に申し訳ないことを・・・」

笑みを浮かべたまま果てようとする超魔人にシンはその頬に手を当てた。すると徐々に傷が塞がっていき超魔人は意識を取り戻した。

「シン、その力・・・」再生した超魔人は体を見るがそこには傷一つなかった。

「私にも分からぬ。だが、神【シン】の国へ行けば全てわかる」

アーミングはその言葉に反応した。

「神【シン】の国だと!? シンよ、やはりそなたは鬼の子であつたか・・・」

「鬼の子・・・知っているのか?」

「ああ、先ほどの子供。あれは神【シン】の国の子だ。そしてそなたの持つその金棒刀、紛れもなく鬼の子の証」シンが背負っていた千術箱は金棒刀に姿を変えていた。

「詳しく教えてはくれぬか・・・」

シンの問いにアーミングは方膝をついた。「そなたが鬼の子である以上、私はそなたと戦う事はできぬ」

「なぜ!？」シンも同様に目線を合わせる。

「私は神【シン】の国と取引をしたからだ・・・」

「それは何処に!？」

「シン・・・そなたが鬼の子と分かった以上、神【シン】の国へ連れて行かねばなるまい。そこで全てがわかる」

「しかし私にはやる必要がある」

「ハデス様を倒すことか？」

「そうだ」

「シン、ハデス様よりも邪悪な者がこの世には存在する。私はその者と戦うために、神【シン】の国と取引をしたのだ」

「それは!？」

「1人や2人ではないがその頂点で支配する者。その者はまだ見つけられない」

シンは頭の中で話を整理しようとしたが答えが出ない。

「・・・アーミングよ、私はどうすればよい？」シンは手を差し伸べ共に立ち上がった。

アーミングは確信を持った目でシンを見る。その表情に敵意は無くむしろ尊敬の眼差しだ。

「ハデス様を倒しに行くのであれば行かれるがよいでしょう。しかし今から私と神【シン】の国へ行くのなら案内します。ご自身で選んでください」

しばらく考えていたシンだが、やがて決断をした。

「ではアーミング、私を神【シン】の国へ案内してくれ」

「それで良いのですね？ ハデス様を倒すにはあなたのその鬼の力が必要になるかもしれません」

「大丈夫、私の仲間には心強い指揮官がおられる。それに私の娘も・
・」

「なんと、子までおりましたか、それは心強い！ あなたの血を受け継いでいるなら心配はいらないでしょう。いずれその子も目覚めるはず」

決意を固めたシンは星空を見上げると1つ息を吐いた。

「では超魔人よ、ジェラにそう伝えてくれ。時がくればまた会うこともあるだろう」

「承知しました。あなたに救われた命、その時は必ず剛力いたします」超魔人はドンツと胸に手を当てた。

そのまま超魔人は一礼すると飛び上がり振り返る事無く森の城リンシンへ飛んだ。

西の砂漠地帯

ジェラとエドス率いるアルミア軍は、満天の星空のもとオラル達の帰還を待っていた。

「ジェラ、この戦いで勝利を収める事ができたならそなたは救われるのか？」部隊より少し離れた場所でエドスは尋ねた。

「私は私の記憶を消すことは出来ない。ハデスを倒すことが出来ればあるいは救われるのかも知れん」ジェラは表情を崩さないままだった。

「そうか・・・ではその時は両親に会いに行こうではないか」エドスが微笑みかけるがジェラは顔色を変えることはなかった。

「ハルは呼ばなかったのか？」

「アルミアが手薄になつてはな、ハルは私の代理を務める事ができる。それゆえこうして戦いに参加できる」

そこへシエルがカチャカチャと鎧を鳴らしながら慌てて走ってくる
と躓いて転んだ。

「何を慌てている！？」エドスはその小さな者を支えた。

シエルは兜を上げ視界を取り戻すとエドスを見つけた。

「エドス参謀、キシア隊が帰ってきました！」言いながら必死に指を指した。

「なにっ！」

シエルの指す方角に2人が目を向けると視線の先に見えてきた馬軍があった。ジェラとエドスは弾かれるようにそこへ駆け出した。

馬列を乱しながら駆けてきたキシア隊はジェラとエドスを見つけると、馬から飛び降りて駆け寄った。

「ジェラ殿！ キシア隊長と部隊が魔人の手にかかり、オラル殿が我々を逃がして・・・」

息が乱れた兵をエドスはしっかりと掴んで聞いた。

「落ち着け、何があつたのだ！」兵は息を整えるとさすがのように言つた。

「キシア部隊は魔人の手により全滅！ オラル殿は我々を逃がし、1人残りました。恐らく魔人と戦っていると思われます！ それから・・・ジェラ殿にオラル殿から伝言です！」 予定通りに進め

「と！」

ジェラとエドスは顔を見合わせた。

「辛い思いをさせた。少し休んでいるがよい」ジェラは兵達に指示をすると背を向け考えた。

「ジェラ・・・兵士達はそなたの決断を待つておる」

「エドス、森の城リンシユンにはすぐにでも行くことは出来るが、いましオラルを待つてみよう」

「そうか。だが、夜が明ける前までにリンシユンを制圧しておかなければシンやスーラン達が合流出来なくなる。辛い判断とは思うが、ここは予定通りに進むしかないのでは」

エドスの言う事は分かる、だが・・・胸騒ぎを覚えたジェラは遠く暗闇にあるだろうハール城を見つめた。

北の城カルガラ城 闇の十人の一人【ニベル】VS スーラン、サルージ、ラン、マド

ジェラの空間移動により北の城カルガラ城近くの丘に現れたスーラ

ン、サルージ、ラン・マド。

丘の上から城を視界に捉えた3人＋マドが、その城を見渡していた。ランはオラルから借りている馬に乗り、頭にマドが「ちょこん」と乗っていた。

広い平地に背の低い建物がそう高くはない建物を中心に正方形で囲いさらにその囲いは幾つも繰り返している。

「マトリョーシカ！？ これ作った人のセンスを感じるわ」スーランはお手上げ、といった風だ。

「これじゃ何処探せばいいんだか」サルージも肩を落とした。

「城って言うからてつきり豪勢なモノを想像していたけど、安っぽい宮殿っていう感じじゃない？」スーランは期待外れといわんばかりにだいぶやる気を無くしていた。

「でも、これだけ広いとそのニベルとかいう魔人を探すのも大変ですよね」ランが手を翳して見ているとマドもそれを真似た。

「確かにランちゃんの言うとおりだ。手分けして探すのも見つかったまいそうだしニベルだけ倒してさっさと引き上げろっていうジェラの指示だからな」

「はゝ めんどろ。そうだ！ マド、あんた見つけてきてよ！ あんたなら見つかったても問題ないでしょう！？」スーランは閃いた、とばかりにマドを見た。

「何言っているの！ か弱いレディーにそんなこと出来るわけなんかないでしょ！」マドは顔をパンパンに膨らせると真っ赤になって怒った。

「あつ、でもそれいいかも」ランが言うとサルージも頷いた。「みんな・・・ひどい！」

結局、マドが単身探しに行くことになった。

「大丈夫！ 見つけたらそこから合図してくれば俺がこいつで片づけてやる、だから心配するな！」

サルージは腰の銃を叩くと慢心の笑顔でマドに言った。

安っぽい宮殿の上空を飛びながら一人不貞腐れたマドはブツブツと呟きながら1番立派な造りの建物に入っていた。

「これっていいじめよね！ ニベルとかいう魔人の仲間になっちゃうおつかしら！？」

マドはその天井の影に身を隠して移動をしていると先に見える階段の下あたりから声が聞こえてきた。ニベルかどうか確認するにはその階段を降りる必要がある。

「あの階段を下りないとダメみたい。でも・・・間違いないわ！ きつとあの下にいるのがニベルだわ！」

マドは小心から階段で見つかることを恐れて勝手に判断をした。

マドはその建物から出て上空に飛ぶと体を膨らませた。

真っ白な体は月明りに照らされるとスーラン達にも伝わった。

「あれ！ 合図よ！」スーランが月明りに照らされたマドを指さした。

「おっ、おう！ 随分早かったな！？」丘の上で合図を待っていたサルージはあわてて照準を合わせた。

「サルージ、外すんじゃないよ！」スーランの檄が飛ぶ。

「分かっていますって！ 任せてください！」

サルージは得意げに狙いを定めると2人の注目が集まった。そして引き金を引いた。

しかし銃は何の反応もしなかった。

「どうした！？」

「あれ？ おかしいな？」サルージはカチャカチャと引き金を引い

ていた。「なんで撃てない!？」

サルージは一度銃を見直すともう一度構えて引き金を引いた。しかし何も起こらなかった。

「ちよつと! どうなっているの!？」スーランはサルージに聞くがサルージも分からなかった。

「こんな大事な時に、使えないね」まったく!」再びのお手上げ。「そんなこといったって・・・わしにも何で撃てないのか」こちらも再び肩を落とす。

「サルージ、早く撃つておしまい! 何やっているの!」

マドは痺れを切らしてその場をグルグル飛び回っていた。気が付くと月明りが消えていた。

「おい、何をしている!？」それはマドの上から聞こえた。

マドは少し震えながら声の方を見上げた。そこには月を覆っている煙の塊が漂っていた。その塊が大きな魔人の顔に変わるとマドはプシューと息を吐きだして距離を置いた。

「いえ、あの、月が綺麗だな。なんて・・・」目をキョロキョロさせて言い訳をする。

「そうか、哀れよ」そんな姿で「煙の魔人はマドに同情してくれたようだ。

「そつ、そうなんです! 私もあなたのような姿になりたくて!」この状況なら何とか言い逃れられると確信したマドはヨイショした。

「ほほ」そうか? なら付いてくるがよい。ふさわしい姿を与えてやろう」煙の魔人が手招きをする。

「えっ? あつ、はい! 喜んで!」

マドはその威圧に断ることも出来ず付いていくしかなかった。

（ああ、どうしよう!?! これって危機!?! それともチャンス

かしら！？)

「戻って来ないですね」ランはマドを探すが無処にもいない。

「何をやってんだか」スーランがため息を吐きしょうがない、とばかりに切り出した。

「仕方ないね。夜明けまでに森の城に合流しないとこの国に取り残されてしまうよ！」

「でも、ワシこいつが使えないと・・・」サルージは手に持った銃を見つめたまま静止している。

「仕方ない、私とランで行くからあんたはそいつが使えるようになったら来ればいいさ」

「そんな」何とかならないか、と必死に銃の引き金を引くが全く反応しなかった。

「時間が無いからラン行くよ！」

スーランはランの後ろに乗ると馬を走らせ丘を下りて行った。

「どうしちまつたんだい！？ 頼むよ！」サルージは必死に銃に手を合わせ御願いしていた。

「しかし、なぜそんな姿になったのだ？」

マドは自分と同じ大きさになっている煙の塊に付いて行きながら答えを探していた。

「はい、えっと何かにぶつかったあとこんな姿に。その時から何も覚えていないのです」モジモジしながら答えた。

「そうか・・・まあ、そなたの望む姿に変えてくれるだろう。何も心配するな」どうやらこの煙の魔人は本気でマドに同情しているようだ。

「あつ、ありがとうございます！こんなに優しくして頂いて。あ

の・・・お名前を」モジモジに磨きがかかった。

「おおそうか、私はニベル様の3の家来、ブルーク・スモルだ。ブルークと呼んでくれ」ビツと親指を立てて返してきた。

マドは思わず嘔きそうになったが必死に抑えた。

「んんっ、ではブルーク様、3の家来とは？」マドは口を押さえたままだ。笑いを堪えるのにこんなに我慢した事はない。

「ニベル様によって生み出された5人の家来のことだ。我々5人は地下の砦の番人をしている」今度は胸に親指を立てた。しかし今回は大丈夫だった。

「地下の砦？ ではそこにニベル様が？」口から手を放して聞いた。

「ああ、だが今は山脈のソダイ城におられる」

「ええっ！」再び言ったそばから口を塞いだ。

「どうした？」心配そうに近づく、顔がマジだ。

「えっ！？ いえ！ 残念です！ せつかくお会い出来ると思っていたのに」それ以上寄らないで、と手を振る。

「そうか、それは残念だったな。何でも久しぶりに戦えると言っておられたからな、しばらくこちらには戻って来ないだろう」言い終えると先に進んだ。

（ そんな！ 知られているの！？ ひょっとしてかなりまずいことになってなくて！？ ラン達に知らせないと！ ）

「どうした、何か思い出したのか？」再び近づいてくる。

「いつ、いえ！」大丈夫ですと手を振る。

「そうか。ではここから入るぞ」2人は地下の通路からさらに地下の砦に続く抜け穴に入っていた。

「さて、何処から探そうか？」スーランとランは月明りのなか、安っぽい宮殿の街中を進んでいた。

「しかし誰もいませんね。魔人の国なのに」確かに2人はここまで誰にも会っていない。

「そうだよ、おかしいよね。ひょっとして地下に本当の隠れ家があったりして？」スーランが地下を指した。

「よく気付いたな、その通り！ この街はカモフラージュの為に俺様が造ったのだ！」

「へえ〜 そうだったんだ」

「スーランさん・・・私じゃないですよ、いま答えたの・・・」ランは振り向いてスーランを見た。

「じゃあ誰？」2人とも辺りを見るがそれらしい姿はない・・・

「ひょっとしてお化けかな？」スーランが冗談交じりに言ってみた。
「違うと思いますけど・・・」ランは背の刀に手を掛けた。

少しの間を置き、再びそれが話しかけてきた。今度は見つけてと言わんばかりに。

「ちよつと、早く見つけて頂戴！」

その声・・・スーランとランは互いに笑みを浮かべた。

「あいつ！」スーランはランにこそつと耳打ちをした。

「わかりました」そういうとランは馬から降りた。

2人は目で合図をするとスーランが声の主に問いかけた。

「おい！ どこにいるの、もう1度だけ返事をして！」
すると返事はすぐに返ってきた。

「早く！ ここだよ！」

その声にランが素早く反応し刀に念を込めるや否や、大きく振り下ろした。

「ラン・・・あんた回を重ねることに酷くなるね」スーランお得意

のお手上げポーズだ。

「私・・・そんなつもりじゃ」ランは刀を振り下ろしたまま静止していた。

みると街や宮殿の姿は無くただの荒れ地が広がっていた。その中に1人の魔人が息絶えていた。

「マド・・・じゃなかったみたい」ランは確認するとようやく刀を鞘に納めた。

「恐らく術が何かで安っぽい街を映し出していたのかもね」

そこにサルージが息を切らして駆けつけてきた。

「はあはあ、やっと追いついた。これどうなっているの？」

街や宮殿の変わり果てた荒れ地を見つめるサルージを見てスーランがポン！と手を打った。

「そうか！ 幻影だったからその銃が撃てなかったんだよ！」

「そうですね！ そういうことですね！」ランとスーランは嬉しそうに手を叩いた。

「ちょ、ちょっとまってください！？ ということは、こいつは壊れた分けではないということですか？」

サルージはまだどういいう状況なのか理解できていなかった。

「そういうこと！ さっ、入り口を探そう！」

「はい！」

「ありました！」サルージが大きな声でランとスーランを呼んだ。みると荒れ地の中に雑草で見えづらかったが地下に続く階段を見つけた。

「恐らくここね」

「そうですね」

「じゃ、サルージ！ あんたから入って！」

「ちよつとまって！ 俺ですか？」

「そつだよ！ その銃、使えるか試したいんだろう！？」

「そりゃそうですね・・・」

「さつさと行くよ！ ニベルだか何だか知らないがさつさと片づけていかないと帰れなくなるよ！」

スーランに急かされながらサルージは渋々階段を下りて行った。次にランを行かせるとスーランが外を見回して続いた。「さて、何が出るやら・・・」

その階段は思っていたよりも長く深く続いていた。

壁に取り付けられている蠟燭の明りを頼りに下りていくと、大きな空洞へと繋がっていた。その内壁を階段が螺旋を描きながら下に続いていた。3人は空洞の手前にある踊り場の岩陰に身を隠すとそこから空洞の下を覗きこんだ。

「ここを通る以外に道はないね。でも間違はなく見つかってしまうよ」スーランはどうしたものかと思案した。

「どうしましょう？」

空洞の深さは約50メートルくらいだろうか、スーランは頭をかきながら言い放つ。

「まったく！ こんな時にマドは何をやっているんだか！？」

「そつだよ！ どこ行つたんだ？」サルージも合いの手を打つとランがすまなそうにいった。

「すいません。こういうときどうするかちゃんと言つてなかった」

「そんな、ランちゃんのせいじゃないよ」

「そつさ、あいつが勝手にどっか行つちゃつたんだから」

3人が揃つてふうつ、とため息をついた時だった。誰かが階段を下りてくる音が聞こえてきた。

「ちよつと！ 隠れて！」

スーラン達はさらに奥の岩陰に隠れた。すると足音がすぐそばまで聞こえてきた。

「どうなっ てんだ！」

「とにかく誰かにやられたんだよ！」

「ジルドーム様だぞ！ NO・2の御方だぞ！」

「いいから早くソリウムズ様に伝えないと！」

2人組みの魔人は螺旋の階段を飛び越しながら段を稼ぎ下りて行った。どうやら地上での一件が知られてしまったらしい。

ランは口を覆っていた。そんなランにスーランが小声でいった。「マドみたいのがNO・2だって、大した事なかったね！」

ランは手を振ると小声で返した。「私じゃありません、これのせいです」刀を指した。

2人の魔人が行ったあと再び静けさが戻るとスーランが立ち上がった。

「行こう！ あいつらの後を追っていけばニベルまで辿り着けるよ

！」

「でもニベルじゃなくてソリウムズって言っていたぞ？」

「もう！ だからそいつの口を割らせればいいことじゃない！」ス

ーランはサルージを無理やり立たせると階段へ連れて行った。

「ラン、行くよ！」

ランとサルージはスーランの勢いに付いて行くしかなかった。

そんなサルージは開き直ると、階段を音を気にすることなく足音を立てて下りて行った。

「こうなっ たら行くとこまで行つてやろっじゃないか！」

「そうそう！ その意気だよ！」

2人をよそ目にランは壁に手をあてて足場を確認しながら下りて行った。

「ラン！ 置いていくよ！」

「私・・・高いところダメみたいです」

ランが空洞の螺旋階段を半分下りた所でスーランとサルージは地下に着いた。

するとバラバラと別の出入り口から魔人達が待ち構えていたかのよう^うに現れた。

「なっ！ なんで！？」サルージの問いに先ほどの2人組みの魔人が前に出てきた。

「流石はソリウムズ様！ この皆の事は全てお見通しだ！」

「しかし本当にこいつらがジルドーム様を？ 何かの間違いじゃないのか？」

そこへいかにも大将らしき鎧を纏った魔人がでてきた。

「アファルト様！ こいつらです！」

「そうか、よほどジルドームは油断したと見える。だがここで終わりだ」アファルトは不敵に笑った。

しかしスーランは臆することなく前に出て言った。

「何が終わりだって！？ いかにも弱そうな成りでさあ！ 覚悟しな！」スーランはなぜか怒り心頭だった。

するとスーランは地に両手を着け、いきなり強力な電撃を走らせた。

魔人達の悲鳴が消えるのに時間はかからなかった。

ふうー と息をついたスーランは黒焦げの魔人達を見て頷いた。

「私、格好だけの奴って殺したくなるのよね。でもスッキリした！ さあ次、行くよ！」スーランはサルージに言った。が、あれっ？

サルージは？

サルージはランのもとまで逃げていた。

「危なかった」あの性格知らなかったら俺も死んでいたもんね」
言いながら壁にしがみついていた。

スーランの勢いに引つ張られるようにランとサルージは通路を走って行くと泉のある広間に出た。

「わあ、きれい！ この水飲めるのかな？」ランが泉を覗き込むと水面に映る自分の顔が醜い魔人の顔に変わっていった。ランは反射的にその場を離れると指差してスーランに合図をした。

水がゆつくりと盛り上がってくるとスーランはそれを見るや泉に片手を入れてランとサルージを並ばせ問題を出した。

「ここで問題！ 水は電気を通すでしょうか、お答えください！」
2人は敬礼しながら同時に答えた。

『はい、先生！ 通ります！』

「では試してみましよう！」

『お願いします！』

水の中からゆつくりと不気味に笑みを浮かべながら魔人が姿を現すと・・・スーランの一撃を食らった。

「正解です！ このように水は電気を非常によく通します！ 注意しましう！」

『はい、先生！ ありがとうございました！』

「授業終わり！ 次、行くよ！」

『はい！』

3人はさらに奥へと走って行った。

急に視界が開けるとその広間に1人の魔人が立っていた。

「貴様ら何者だ？ なぜここに來た！？」

サルージが1歩前に出て聞いた。「あんたがニベルさんかい？」

「ニベル様に何の用だ！？」

「違うか。じゃ、あんたがソリウムズかい？」

「私の名を知っているとは」

「すまないがあんたに用は無いんだ。ニベルって人に会いに來たんだが」

「なんだと！ ふざけおつて！ ニベル様はソダイ城で戦いの準備をしておられる！ いまこの砦の主は私だ！」

そこにスーランが身を乗り出した。

「あんだって！？ ソダイ城？ ここには居ないってのかい！」 スーランは腰に手を掛け首を45度にする。

「なんだ貴様！」 ソリウムズはスーランに向かって歩を進めた。

「それはこつちのセリフだよ！ ここに居ないのか！」

声を荒げるスーランに魔人は立ち止った。そしてその怒りから全身を震わせた。

「なめやがつて、貴様らここから生かしては帰さんぞ！」

ソリウムズはいきなり火炎を撃つてきた。

ランとスーランは飛びのいて避けた。が、サルージは一步逃げ遅れた。

おかげで大事な髭が右半分焼け片側だけになってしまった。それを見たスーランとランは思わず噴いてしまった。

「なにっ！？ そんなに可笑しな事になってる！？」 顔の輪郭をなぞりながら必死に確認する。

そんなことにはお構いなしにソリウムズは続けて撃つてきた。

それを避けながらもスーランとランはニヤついていた。サルージは

大事な髭を焼かれ2人には笑いものにされ無性に腹が立ってきた。

ソリウムズが火炎を放つのを止めるとスーランめがけて高く飛び上がった。そしてその両手の拳をスーランに向けて伸ばすとそれは火炎砲に変化した。

「先にお前から始末してやる！　くらえ！」火炎砲からスーランめがけて巨大な火炎が放たれた。

その大きさに逃げ場を失ったスーラン・・・ではあったが、ここぞとばかりにサルージが飛び出して来た。

「髭の恨み！」サルージは上空の魔人めがけて引き金を引いた。それは初めてサルージの思い描いた一撃だった。火炎、そしてソリウムズもろとも地上を突き抜け消えていった。

3人は来た道を戻って地上に出るとサルージの撃った穴に駆け寄った。

「大したもんだ、ようやく使い方が分かってきたんじゃない？」スーランが穴を覗きながらサルージに聞いた。

「この髭のおかげですよ」片側のスッキリした所を撫でた。ランはそれを見るとまた噴きだした。

「ちよつとランちゃん、これでも大事な髭だったんだから」

「すいません、でもおかしくて！」とうとう腹を抱えて笑い出した。

「まあいいさ、これを機に男前を披露しようか？」45度に姿勢を保ちつつ髪をたくし上げてみた。

「そうそう、それがいいよ！」スーランもつられて笑っていた。

そこに穴からマドが飛び出してきた。

「きゃー！　やめてー！」それを追うようにブルークが出てきた。2匹は上空で追いかっこをしていた。

「あいつ今頃になって・・・ラン！」
「はい！」

ランは走って行くとマドを呼んだ。それにすぐに反応するとマドはランのもとへ飛んできた。

「ラン」 助けて！ こいつあたしの体が目的なのよ！」

マドはランの頭の後ろに隠れるとブルブルと身を震わせていた。

「お嬢ちゃん・・・人の恋路を邪魔しないで頂戴！」ブルークはランに近づいて言った。

「そうはいかないわ！ 私、この子の保護者ですから！」ランは刀を抜くとブルークを真二つに切った。

「残念」 お嬢ちゃん。私を切る事は出来なくてよ」しかしブルークの意図とは反対に少しずつ蒸発していった。

「なんで・・・ちよつと！？ やめてよ！ あゝ お嬢・・・ちゃん・・・」徐々に風船が萎んでいくように小さくなっていき、最後にパツと消えた。

「さてと、マド！ どういう事！」ランが怒り口調で聞くとマドは急にサルージのもとへ飛んだ。

「ちよつと、何これ！？ あなたわざとやったの！？ センスの欠片もなくてよ」サルージの肩髭をさすりながら口をへの字にして覗き込んだ。そんなとぼけるマドをスーランがつまんだ。

「どこで、何をしていたの！」

「これって・・・そう！ ニベルはここには居ないの！ 早く知らせないと！ 探し回っていたらあいつに掴まって、急がないとニベルはソダイ城にいるわよ！」急に真面目に答えるマドに呆れたスーランはため息を吐いた。

「そんな事は分かっているの、まったく！　後でジェラにお仕置きをしてもらわなきゃ」

ジェラ！？　に反応するとマドは急に大人しくなった。

「それはどうかと思うわ？　か弱いレディーをいじめるの？」モジモジとスーランの顔を窺った。

「なら今すぐソダイ城に連れて行きな、時間が無いんだよ、分かっているの！」スーランが睨みつける。

「そうしたらジェラ様に言わない？」ビクビクしながら聞き返す。

「ああ、約束する！」その言葉にマドは目をキラキラさせた。

「本当！　なら任せて！」

マドは急に元気になると大きな鳥に姿を変えた。

「背中にしっかり掴まって！」

「よし！　行こう！」スーランとサルージが乗るとランがキョロキョロと何かを探していた。

「どうしたの？」

「馬が・・・」

「いないのかい？　困ったな」スーランも辺りを見てみる。

ランはふと思い出した。そして首の帯を握ると心の中で呼んだ。

（私はここにいますよ）

するとすぐ後ろでヒーン！　と声が聞こえ振り向くとそこにさっきからいたかのように佇んでいた。

「よかった！」ランは抱きつくとも馬も頬を寄せた。

「あの・・・馬は別料金なんですけど・・・」

マドは渋々馬をその大きな足で掴んで抱えると大きく羽ばたいた。

「では行きますよ！」

ゆっくり飛び立つとやがて大きな鳥は夜空の星ほどの大きさになった

て
い
っ
た。

湖の城ルメイロト城

闇の十人の一人【リビンゾール】VS

エルード・妖

湖の城ルメイロト城　闇の十人の一人【リビンゾール】VS エルード・妖魔人の鳥獣50人

エルードと妖魔人の鳥獣50人はジェラの空間移動によりルメイロト城を囲う湖の手前10キロの草原の上空に待機した。

「時間をかけるつもりはない。一気に攻撃を開始する！」エルードが城の方角を指した。

「かしこまりましたエルード様。我らもその方が戦いやすい」鳥獣の指揮官アルカがその時を待ち遠しそうに答えた。

「狙うはリビンゾールただ1人！」エルードが天を指し猛るやそこにいた鳥獣達は一斉に時の声を上げた。

エルードを先頭に鳥獣達は一糸乱れずルメイロト城に進路をとり、やがて湖に浮かぶように聳えるルメイロト城を視界にとらえた。上空には薄っすらと黒い雲がかかっている。

「エルード様、城の上空に雲がかかっているようだが」アルカがニヤリと聞く。

「ああ、どうやら嵐になりそうだ」エルードも笑みで返す。

星空のもとその雲がなにやら動き出すと砂時計が動き出すように1本の線を描いて向かってきた。

「どうやら我々が来る事を知っていたようだ。アルカよ、俺はリビ

ンゾールを殺る、援護してくれ！」
「お任せを！」

アルカは隊を2分すると向かってくる1本の線に対し左右から挟み撃ちを仕掛けた。

「エルード様、道は我々が。隙を見て城へ」
「すまぬ！」

アルカはエルードの前に出ると敵の正面に向かって大きく翼を振り無数の羽を繰り出した。
その羽は次第に長く太くなるとひとつの光を纏いながら向かってくる1本の線を貫いた。

「今のうちに！」アルカの放つ光の矢が雲の一部を消滅させると続けざまに羽を繰り出す。
「頼んだ！」エルードは湖に飛び込みそれを確認したアルカは仲間たちに叫んだ。

「ここからが俺たちの見せ場だ！好きなだけ暴れる！」鳥獣達はその言葉を合図に各々力を開放し向かってくる魔人の群れのなかに飛び込んでいった。

エルードは城の裏手に顔を出した。

上空を見上げアルカ達の戦況を見ると・・・数に勝る魔人相手に互角の戦いをしている。

「負けてはおれんな」エルードは大きく息を吸うと潜った。

水深30mくらいまでなら月明りで底まで何とか見える。エルードは空を舞うようにある目印を探していた。

やがて水深10mあたりに人の姿をした銅像を見つけた。それは岩礁帯の中に堂々と佇んでいた。

「あれがジェラ殿が言っていた夜叉像か・・・」

【夜叉像】

長い槍を持ち頭には布の兜、それは地に付きそうな長さがある。整った顔立ち、身長はエルードとかわらない。

それはまだ人間がこの地に住んでいた頃の話だ。

魔人の侵略により土地を奪われた人達がこの城、国から逃げる為に抜け穴を作りそして兵を率いて人々を魔人から救ったという伝説の戦人。

（これが夜叉像、さぞかし立派な武者だったのだろう）

エルードは先に見えるその暗いトンネルの中を入っていった。数メートル進んだところで薄らと光が差し込んできた。見ると途中から階段に変わっており水面もここまでだった。

特に怪しい気配は無い、その先に見える光に向かって階段を上がった。

（誰だ！？）

人影が覗き込むとエルードは影に隠れた。が、影は動かない。

気配を探るが何の反応も無い。念のため剣を握ると慎重に歩を進めた。やがて見えてきた出口は井戸のような造りだ。

人1人がやっと通れるほどの大きさから5感を働かせ顔を出した。

（これも・・・夜叉像か？）

2人の兵士の銅像がその先の入り口に向かって剣と槍を構えたままエルードのいる穴を守ろうとしているようにも見える。

（リビンゾール・・・石化させる術を使うのか）

エルードは穴から出るとその小さく暗い部屋から通路に出た。似たような部屋が幾つもある。

「これは牢か？」

その時、大きな音と共に建物が揺れ部屋の1部が崩れた。

「なんだ！？」

エルードは駆け出して先に見える階段を上がっていき煙が立ち込める部屋から出ると中庭らしき所に出た。

「きさま！」突然、魔人が切りかかってきた。

エルードは反射的にそれを避けると剣を構えた。そこに別の魔人が襲いかかったがエルードは上空に飛びあがる。

そうか、と状況を飲み込んだ。どうやらアルカ達の攻撃が城に直撃したようだ。

鳥獣達は圧倒的な数の魔人達に引けをとるところか徐々に城に近づいてきている。

そこに大きな火炎が城に直撃した。それは城の上部の目印とも言うべき天高く突き出している灯台を破壊した。

「やるな」

エルードは再び最上階から城に入った。そこに10人の魔人達が駆けてくるとエルードは剣を抜き応戦した。術を放ってくる魔人に対して翼で防御する。エルードの翼はエドスと同じように翼全体が術を跳ね返すようジェラが手を加えていた。

エルードは翼で身を守り剣を振るう。次々と魔人を倒していくと後方でその様子を見ていた魔人だけが残った。

他の魔人とあまり姿は変わらないが金の装飾に身を包み両腰に金の剣を下げている。

「やるな、ジェラの配下か!？」この魔人は何か知っているような言い方だ。

「リビンゾールか？」エルードは一度剣を収める。

「残念だが私はルイスドール。リビンゾール様の影だ」

「そうか、ではお前に用は無い。リビンゾールは何処にいる」その問いを待っていたかのようにルイスドールはニヤリとした。

「では教えてやろう。ジェラの様子をずっと探っていたリビンゾール様は貴様らの計画を知っていた。リビンゾール様は今頃ルードシアを火の海にしている頃だろう」

「なんだと!」エルードは剣に手を掛ける。

「おいおい、話は最後まで聞け。リビンゾール様はハデス様の命令でメルドール大陸を占領する機会を伺っていたのだ。しかしなぜかルードシアだけ落とすことが出来ない。それにアルセルディムの奴らではルードシアを奪うことができなかった。何か特別なモノでもあるのだろう。そこで貴様たちの戦力の集中するこの機会を待っていたのだ」

「それは本当なのか!？」剣を抜き問いただす。

「嘘だと思うならルードシアに行ってみるといい、まあその頃には城は落ちているだろうがな。ハデス様もジェラが来るのを首を長くして待っておられる、そういう事だ」

エルードはルイスドールを睨んだ。しかし、それが本当なら各地で戦っている仲間たちが危ない。

そんなエルードの思いを悟ったかのようにルイスドールは続ける。

「心配するな、ハデス様は信用の置ける者にだけ今回の計画を知らせている。ジェラのように裏切り者がいるからな、大陸を治めた後で力のある魔人達が徒党を組んでハデス様に戦いを仕掛ければハデ

ス様も無事ではすまないだろうしな」

（オラル達を含めルードシアの主要な戦力をこちらに連れてきてしまっている・・・どうにも打つ手が無い）

そんなエルードの表情を見たルイスドールは降参か？　と言わんばかりだった。

「いいことを教えてやろう。外で戦っている奴らはたいして強くないが数だけはある。そしてハデス様はこう約束された。『エルードを倒した者は闇の十人の一人に加える』と。俺もエルード、お前が来るのを待っていたという訳だ！」ルイスドールは両手に剣を構えると全身に力を込めた。

「覚悟しろ、エルード！」

ルードシア

リビンゾールはルードシアの城を魔人兵1万で囲っていた。

「何も知らずに眠っているのでしょうか」リビンゾールの配下のゼストールが言う。

「ゼストールよ、このまま眠らせてやろうではないか」含んだ笑みを浮かべる。

「はい、では」ゼストールは部下に合図をすると城を囲っていた魔人兵達が城壁の前で構えた。

攻撃の準備が整うとゼストールが次の指示を問う。

「リビンゾール様、準備が出来ました。いつでもご命令を」

その美しいルードシア城をしばし眺めていたリビンゾールは振り返

って言った。

「美しい城だが新しく作り変えてやろうではないか、やれ！」

ゼストールは部下に合図をした。

構えていた魔人達は一斉に城壁を破壊するべく術を繰り出す。

「さあ！ 皆殺しだ！」

大砲や雷のような術を繰り出し城壁に向かって放つ者、さらには上空に飛び上がり城内へ向け火炎の矢を繰り出す者。その1万の攻撃が城を煙で覆っていった。

「そろそろいいだろう」リビンゾールはゼストールに攻撃の停止を命じる。

1万の攻撃によって辺りは土煙が舞い上がっている。それらが幾分か収まるとその中をリビンゾールは配下を引き連れ城門に向かった。

「では国王に挨拶するか」土煙の中を進むと視界が開けてきた。

「これはどういう事だ！？」リビンゾールは目を疑う。

みると城壁は破壊されておらず、傷1つ、ついていなかった。

「なぜだ！ なぜ！？」

リビンゾールは城門に触れたが触れる前に見えない力に押し戻された。

「ぐっ！ 結界か！？」

「リビンゾール様、これほど巨大な結界を張れる者は・・・」

「何者だ！？」

「ハデス様より、さらに力を持った者かも知れません」

「そんな奴はこの世界には存在せん！」
リビンゾールが怒りを露わにすると目の前の城門がゆっくりと開いた・・・

「あなた達、これ以上手出しをするのであればこの城の守護神があなた達を滅ぼします！」

セーラ姫は魔人達に臆する事無く言い放った。それを合図に城内に一斉に火が灯る。

姫の後ろにはレイド国王、ルーシー妃、そして兵達が武装していた。さらに奥の大広間には、街中の人々が避難をしていた。

「なぜだ、なぜ我々が来ることを知っていたのだ!？」

姫は一步前に出る。

「この国には守護神がおります。これまでも幾度となく危機を救ってくださいました。これからもそうです、あなた達が手を出せば必ず滅びます。このまま帰りなさい」優しく、だが強い信の言葉だ。

「守護神・・・聞いてはいたが、ではそいつを倒せばよいのだな!？」

「私たちは守護神にお願いすることも、されることはありません。ただこの国を守っていたಿದೆいるのです」

その言葉に人々は共感し声を上げ始めた。

「都合のいい話だな、ならば守ってみるがいい、おい! あれを持つてこい!」

リビンゾールの呼びかけに応じ、魔人兵達は古びた槍を抱えてきた。

リビンゾールはその中の1本を取り出した。

その槍はだいぶ古びている、まともに打ち合えばすぐにでも折れて

しまいそうだ。

「試してみよう」リビンゾールはニヤツとするといきなり姫に向かって投げた。

それは結界で多少の抵抗を受けたが、そのまま通過すると姫の顔のすぐ横を突き抜け後方で武装していた兵に突き刺さった。兵は心臓を突かれそのまま息絶えた。

「なにっ！」あわてて王と妃の護衛兵は前に飛び出し盾をつくる。

「姫！ 御下がり下さい！」姫を3人の護衛兵が盾となって連れ戻した。

「なるほどな、この槍はまだ力を失ってはいないという事か。おい！ 兵に槍を持たせろ！」

魔人兵はそれぞれ手に取ると30人の部隊を揃える。

「進め！」

号令と共に槍を持った30人の魔人兵は城門に進んでいく、すると魔人兵は結界に戻される事無く城内へ進んでいった。

「王様！」護衛兵が陣を組む。

「結界を通る道が出来たな、そのままそこで待機させろ！ 一気に攻撃を開始する！」

槍を持った兵達は城門に槍で橋の形を取った。それは結界の中にトンネルの役割を果たした。

そこから魔人兵は城の中に雪崩れ込んだ。

護衛兵は臨戦態勢をとり王は剣を抜き叫んだ。

「皆の者！ この国を何としても死守するぞ！」

王の号令と共にルードシアの命運を賭けた戦が始まった・・・

「槍を持った奴を倒せ！ 結界を元に戻せば奴らは入って来くることは出来ない！」

王の指示で10人の護衛兵が戦いの隙をついて城門に走った。それを援護するように王は部隊を率いて戦いの中に身を投じていった。

「魔人ども、どうした！ 王はここにいるぞ！」

レイド王は果敢に前線で戦った。その援護は以外にも多くの魔人を引き寄せると城門に向かった兵達は隙を見て槍を持った兵達に切りかかった。

「そうはさせるか！」リビンゾールはその兵に向けて手を伸ばすと首を捉えた。

「ぐっ！」兵が動かなくなるのを見るとリビンゾールはその兵を王の前に放り投げた。

するとみるみるうちに石となっていった。

「これは！？ 王をはじめ兵達の目がそれにくぎ付けとなった。

リビンゾールはゆっくりと王の前に出てきた。

「私に触れるものは全てこうなる」

リビンゾールが出てきたことで戦いは一時中断し魔人兵はリビンゾールの後方に控えた。

「さあ、王よ。どうする？ まだ戦うつもりか？」

リビンゾールは石像の兵に足を乗せ、腕を組みながらニヤつく。

『それはこっちのセリフだ』

城内に響き渡る太く強い声。

「誰だ！？」「リビンゾールは声の主を探す。「何者だ！」

「誰でもいい、あとはお前たちだけだ」

その人はリビンゾールの後ろ、城門から現れた。

見ると槍を持っていた者達、そして外にいた者すべてが倒されていた。

魔人兵の1人が城外の様子を見ようと城門から出ようとするが結界に押し戻される、結界が元に戻っていた。

「きさま、どういうことだ！？」「リビンゾールが構えをとる。

「私から逃げる事はできない。お前が結界の中に入るのを待っていた」その人は淡々という。

「お前が・・・守護神か、顔を見せる！」

その人は全身をマントで包み顔は見えないように布で巻いていた。その人はリビンゾールの問いには答えずにレイド王に視線を移す。

「レイド国王、我が主の意向により参上致しました。なんなりとご命令を・・・」胸に手を当てる。

レイド国王は事態をどう捉えてよいのか理解しがたい状況ではあったがこれを好機と判断した。

「そつ、そうか！？ それは心強い！ では、魔人達を倒すのに力を貸してくれるか？」

「かしこまりました、では」その人はリビンゾールに歩み寄る。「ザルギスは夜明けと共に滅びる」

その言葉にリビンゾールは腕を振りかざす。

「何をいう、ハデス様を倒せる者はこの世に存在しない！」手を伸ばすと足を掴んだ。

「これでおしまいだ！」

先ほどの兵と同じようにその人はみるみる石になってしまった。

「口ほどにもない！　おい、かかれ！」

城内に残っていた魔人兵は雄たけびを上げると再び攻撃を始め、リビンゾールはレイド王のもとに歩み寄っていた。

「残念だったな、口だけの奴だったようだ」両手を軽く上げながら言う。

「仕方がない、だがお前を倒す！」王は剣を向ける。

リビンゾールは本気なのか？　といった感じで言葉を返す。

「無駄だ、人間の力では俺を倒せん。触れた者は全てあのようなになる」

振り向いて石となったその人を指した。

「なんだと、どういう事だ！？」

その人は動いている・・・そして何事も無かったかのようにゆっくり立ち上がった。

「レイド国王、その魔人は既に力を失っている」

王はその言葉に咄嗟に反応するとリビンゾールの心臓目掛けて剣を突き刺した。

「なにっ！」

剣はリビンゾールを貫き徐々に黒い煙を出しながら消えていった。

「どういう事だ・・・なぜ」リビンゾールはその人を見つめたまま蒸発して消えていった。そして間もなく最後に残っていた魔人兵も護衛兵により倒された。

民や兵達、そこにいた者達は歓喜の声を上げた。

その人は王に一礼をすると姫を見た。同じく一礼をすると城門から足早に消えて行った。

「あの人……」姫は以前見た光景を思い出していた……

エルードとルイスドールは依然互角の戦いをしていた。

「どうしたエルード！ その程度か！？」

ルイスドールは蛇のように腕をしならせ逃げるエルードを壁に追い詰めた。

「どうした、手も足も出せないか！？」

一呼吸置くとエルードは身を屈め全身に力を込めると言った。

「ルイスドールよ」

「なんだ！？」

「リビンゾールがなぜお前をこの城に残したのか、その訳を知っているか？」

「なんだと！？」

「教えてやろう！ 足手纏いだからだ！」

エルードは瞬時にルイスドール目掛けて飛び出した。その速さにルイスドールは反応できなかった。

「強い……な」先を急ぐエルードの後方でルイスドールの体から首が落ち蒸発していった。

山脈の城ソダイ城　ゝ　森の城リンシュン（前書き）

いよいよ闇の十人との戦いも最終決戦へ！

山脈の城ソダイ城　　森の城リンシュン

山脈の城ソダイ城

北の城カルガラ城で闇の十人の1人、ニベルを討つはずだったスーラン、サルージ、ラン、マドは、薄暗闇の中、ようやくニベルのいるソダイ城に到着した。

巨大な山をそのまま城にしたような造りはこれまで3人＋マドは見ることがなかった。

「大きいですね・・・」ランは月明りに照らされる巨大な山城を見上げた。

「ああ、こんなの見たことないよ」スーランも同意見だ。

「ってことはですよ？　ハデス城はもっと大きいんじゃないですかね？」サルージの言葉にみな頷く。

「そうだろうね・・・とにかくさっさとニベルを倒して皆と集合しないと。薄っすら日も出てきたよ」

スーランの言うさきの地平線に薄っすら光が灯り始めている。

「そうですね、急ぎましょう。でもどっから入ればいいんでしょう？」ランは入り口を探しながらマドを見る。

「マド、もう一度ニベルのいるところ探してみてくれなにかしら」

「そうだ、今度はしっかり見つけるんだよ！」スーランはマドを掴むと睨みつけた。

「はい、承知しました」

「なんだ？ やけに素直じゃないか？」

「そりゃね、ここまで飛んでくりや反抗する気も起きませんよ」スーランの握りに合わせてグツタリして見せた。

「なんだ疲れたのかい？ でも戦うのは私達だからね、ニベルを見つけたらゆつくりしてればいいよ！」

「ホントに？」むつくり起き上がる。

「ああ」

「なんて優しいのかしら、好きになっちゃいそうよ！」マドは急に元気になるとスーランの頬にチュツチュと口を伸ばした。

「いいから！ とつと探してきな！」スーランは照れ笑いをするとマドを引き離れた。

「はい！」マドは勢い良く城の頂上目掛けて飛んで行った。

マドは頂上付近の人気のない窓から城に入り、天井にカモフラージュしながら魔人達をやり過ごし、ニベルの部屋を探して回っていた。すると何処からかマドを呼ぶ声が聞こえた。

『私はここにいますよ』

「えっ？」マドは咄嗟に壁に並んでいる銅像の1つに姿を変えカモフラージュした・・・

ソクッと目だけを動かし恐る恐る見回してみるが誰もいない。

『ここまで来て』再びその声がマドを呼ぶ。

マドは警戒しながらもその優しい声に導かれるように進んでいった。

やがてマドは声に導かれるようにその部屋に入ってしまった。

そこにいたのは天使のような白い翼を持つ女性だった。長くたなびく金色の髪、それがゆっくりと振り返った。

「たった4人で来たの？」

その天使はまだ少女のようだ、ランと同じ年くらいだろうか。その大きい目はスカイブルーだ。

「えっ！？ ええ、はい」マドは返事に詰まった。

「私を倒しに？」

その問いに磨きのかかったモジモジを見せて答える。

「あの・・・たぶん、あなたではないと思います」さらに目をクリクリさせて可愛さをアピールする。

「そう、では誰を探しているの？」彼女は優しく微笑む。

「はい、えっと・・・ニベルって言う人・・・かな？」今度はちょっと頬を赤らめて見せる。

「そう。ニベルならソダイ城にいるのではないかしらね」

「ソダイ城に？」

「そうよ、ここはハデス城ですもの」そしておいで、と仕草をする。

「ハデス・・・城!？」

マドはまさかと思いつつ聞いてみた。

「・・・間違っていたらごめんなさい。あなた・・・ハデス・・・さん？」

その人はマドに近づくと赤い頬を優しく撫でた。

「そうよ、初めましてマドさん」

「何で私の名を・・・」マドは全身が凍りついた。

「すべて知っているわよ。私を倒しに軍を差し向けていることも」

なぜっ！？ マドはドキドキとハラハラが入りまじり思わず両手で目を覆ってしまった。

「ひゃー！ ごめんなさい！ ハデスつてもっと醜い化け物かと、あっ！ そうじゃなくてこんなに綺麗な人だとは思っていなくて！」
指の間からハデスのご機嫌を窺ってみる。

するとハデスは椅子に腰を掛けてマドに話しかけた。

「この戦いはもともと仕組まれたものの。私には戦える力なんて何も持っていないのよ」悲しそうな顔をするハデス、マドはその肩に身を寄せた。

「はい？ それってどういうこと？」

「全てはあの人の仕業・・・」細い声で答える。

「あの人？」マドの体がクエスチョンマークになる。

「私もよくは知らないけれど、この戦いは全てその人によって仕組まれたの」

マドは体をねじりグルグルと元に戻る。

「あのー よくわからないけど、あなたを倒しに来た私たちはどうすれば良いのかしら？」

マドは逆さまになるとハデスの回りをグルグルと回りながら聞いた。

「本当に倒すべきは、あの人です。マドさん・・・」

「はい！？」

彼女はマドを両手で優しく包むとマドはドキドキしながらその目を見つめた。

「マドさん、私をここから連れ出して・・・」

「エー！？」

そこに護衛の魔人が入ってきた。

「ハデス様、約3名到着したものとされます。攻撃をはじめますか？」

マドは咄嗟にハデスの頭の後ろに隠れるとハデスはその魔人に想像もつかない太い声で指示を出した。

「よい、その者達は私の仲間だ。ここに連れてきなさい」
「はっ！」

スーラン・ラン・サルージは魔人の案内で部屋に通された。

その魔人はなぜ人間を？ と、複雑な顔をしつつ部屋を後にしたが、ハデスに逆らう者は容赦なく消されることを知っていたので大人しく下がった。

たとえハデス様が人間とどういつながりがあるにせよ関わらないことが良い、その魔人はそう判断をした。

「マド！ どうしたの！？」天使の頭に乗って得意げになっているマドを見てランが叫んだ。

「頭が高い！ ここにおわすはハデス様なるぞ！」人差し指を下に向け、下に下にと鼻も伸びる。

「マド！」マドは真顔のランを見るとすぐに近づいた。

「冗談よ、ちょっと訳があつて」マドは人差し指を合わせながら目をキラキラさせてみせる。

「そうね、ちゃんと説明してくれる？」スーランがマドをつまんだ。そこにハデスが寄った。

「あなた方が探しているハデスは私です」

3人は顔を見合わせている。目をパチパチとするサルージがハデスに質問をした。

「どういうこと？　ここソダイ城じゃないの？」

そこにマドが割って入るとエヘへとすまなそうに言った。

「すいません。間違えちゃった・・・アハハ」

「まったくどうしようもない」スーランは呆れた顔で言う。

するとマドはハデスに身を寄せると3人を前にビシツと言いつつ放った。

「だから違うの！　それより敵はこのハデスさんじゃ無いのよ！」

マドはハデスと共にこれまでの経緯を皆に話した。

「そういうことなら一度戻って皆に話さないと・・・」スーランがどうしたものかと腕を組む。

「私も一緒に連れていってくれないか？」ハデスはスーランに聞いた。

「そうね、あなたの言うとおり本当の黒幕を探さないとな。マド、1人増えたけど飛べるでしょ？」

「もちろん！ 任せてちょうだい！」マドは今までにないくらい装飾に身を包んだ鳥に姿を変えた。

「おやおや？ 随分差があるんじゃない？」スーランがポンポンと翼を叩く。

「そんなことないわ！ いつもこんなでしょ」マドはいつにもまして得意げだ。

そんな2人の会話をハデスは微笑みながら見ていた。

「仲がいいですね。でもご心配なく、私飛べますから。後ろから付いて行きます」

そういうとハデスは天使の翼を広げ羽ばたかせてみせた。装飾をつけたマドとは明らかに差がある、これが本当の天使の翼ってやつだ。

「わあ、きれい！」

「ほんと！ とても美しい！」

しかしマドも負けじと大きな羽を広げ装飾を増やした。そんなマドにサルージが気を使って言った。

「立派立派！ さあ、頼むぞ！」

森の城リンシユン

「シエル、ご苦労だった」エドスは胸に手を当て敬意を表す。

「参謀、やめてください私のようなものに。もうこれで勘弁してください」シエルはお願いしますと、手を合わせる。

苦渋の決断をしたジエラはエドス率いるアルミア軍と共に森の城リンシユンに移動し、すでに城を制圧し終えていた。

森の城リンシユンはそれなりに強固な造りをしており、それに準ずる魔人兵を有していたが、アルミア軍が総攻撃を仕掛けてからわずか30分で制圧を終えた。

今回アルミア軍の指揮を執っていたのはあのシエルである。

今回の戦いにあたりエドスが事前にシエルを呼び『指揮を任せる』と令を発した時、シエルはそれを拒んだ。が、出来ないのなら軍を去れと言われていた。

それに対しシエルはこう言って返した。「私は誰よりも小柄で力がない。その上、誰も私に付き従う者などいるわけがない」と。

しかしこの結果はどうだ、予想外に出来過ぎたともとれる。だがエドスはシエルのその知略、軍師としての才能を早くから認めていた。

こんな逸話がある。

それはまだシエルがアルミア軍に入隊した日のこと、特別な能力や術を持つ獣人たちと、シエルが入隊した一般兵とに分かれ整列していた。シエルは一般兵が列をなす中の1つの先頭に立っていた。

そこにエドスが姿を現すと全隊を前に話を始めた。

エドスの話しは長々と続き、皆がそろそろ退屈し始めたころ、シエルは一般兵の中に魔人が潜んでいることに気づいた。どうやら1人や2人ではないようだ。

当然、誰もそれを知らない。恐らく隙を見てエドスを抹殺しようとしてもしているのだろう。

シエルはその魔人を匂いで嗅ぎ分けた、それは魔人特有の力びた土の匂い。

シエルは一度匂いを嗅いだものは忘れる事がない、小柄で力の無いシエルはこれまでに何度も魔人に捕えられ殺されることは無くとも酷い扱いを受けてきた。そのため、いつの間にか魔人の嫌な記憶とともに匂いをはっきり覚えている。

そんなことをエドスは知らずに延々と話を続ける。

そこにシエルが一步前に出た。

「こら！ エドス参謀の話し中であるぞ！」兵が近づき列に戻れという。

しかしシエルは怯むことなく言つてのけた。

「エドス参謀、長々と偉そうに話をしているが、あなたはそんなに偉いのですか？」

その言葉にさすがの兵たちも一瞬固まった。そこにエドスが言葉を返す。

「小さき者よ、私がこの国の参謀を務めるに不足だと申すのか？」

「そうです。私は見てくれは小さい。しかしあなたの想像を超える魔術を私は持っているのです」

ほほう、とエドスは続けた。

「そうか、そなたはあちらの部隊にいるべき者だと、そう言いたいのか？」

あちらとは特別な能力を持つ部隊のことだ。

「そうではありません、私はあちらの部隊にいる者達を指揮する立場にあると申しているのです」

シエルのその発言には、あちらにいる部隊の誰もが声を上げて反論した。

「小さき者よ、これだけの者達がそなたの発言に異を唱えておる」しかしシエルは鼻で笑うと言つてのけた。

「弱いものは吠えるものです。なんなら私がそれにふさわしい者だということを実証して見せて差し上げてもらいますよ」

エドスはシエルの度胸に手を叩いた。

「おもしろい、では証明して見せてくれ」

「いいでしょう、ではあちらの兵全員で私達一般兵を囲ってください」

エドスは少し考えたがしばしその余興に付き合う事にした。エドスは兵に指示し、一般兵をシエルの言つとおり特別な能力を持つ部隊

に囲わせた。

「さあ、小さき者よ。次はどうする？」

エドスをはじめ退屈していた兵達はその余興を楽しむようになってきていた。

ただ、エドスに付き従う近衛兵はそれとは逆で、シエルの無礼な振る舞いに腹を立てていた。

では、とシエルは手を後ろに回すとふんぞり返ってエドスに近づいていく。

すると近衛兵はもうがまんならん、とばかりにシエルの腕を掴みエドスの前に引き出すとシエルはエドスの前で倒れこんだ。

「よいよい、大事な指揮官であるぞ。丁重に扱え」エドスは皮肉を込めて言う。

すると兵達は一斉に笑い出した。

そんな中でシエルはエドスに目配せをした。回りはリラックスした中ではあったがエドスはシエルに何かを感じ取った。シエルはそれを確認すると立ち上がり、再び後ろで腕を組んだ。

「オホンッ、ではエドス殿、1つ聞いてもよろしいでしょうか？」

エドスは微笑んではいるが目は何かをとらえている。

「指揮官殿、なんなりと」

「では、ここに集まった特別な能力を持つ部隊の方々は今ほどから私を馬鹿にしておられるようだが、本当は魔人よりも弱いのではないのでしょうか？」

すると再び反論の嵐に見舞われた。しかしエドスはどうやらそれを汲み取ったようだ。

「なるほど、指揮官殿のおっしゃる通りですな。ここはひとつ試してみましよう、それでよろしいでしょうか？」

「よい、そうしてくれたまえ」ニヤツとするとエドスは突然手を上げ、声を上げた。

近衛兵よ！ 十二方陣！

突然の号令ではあったが、鍛えられている近衛兵はすぐにその円を取り囲んだ。

それを確認するとエドス自ら出向き声を上げた。

黄泉封印！

エドスが広げた両手から繰り出す術が近衛兵につながる。それは白い光を持ち特別な能力を持つ部隊のさらに外を囲っている近衛兵全員につながり大きな円を描いた。

エドスは続けて術を繰り出すと大きな円は上空に上りドーム状に形をとった、結界である。

「仲間達よ、何も心配する事はない！ この中に紛れ込んでいる魔人を排除するだけだ！」

「魔人！？」

新兵達は動揺していたがそれに構うことなくエドスはドーム状の結界を徐々に押し下げる。

すると獣人以外の者達はその姿を維持できずに本来の姿になっていた。

「ぬうつ！ エドスめ！ 覚悟しろ！」

魔人の指揮官が飛び出すと20人ほどの魔人が一斉にエドスに飛び掛かった。

しかしその魔人達はエドスの体から突き出た太く長い毛によって射し抜かれ宙に浮いた状態で息絶えた。

「小さき者よ、そなたの名は」

「はい、シエルと申します。度重なる御無礼をどうかお許しください！」

シエルはエドスの足元にひれ伏し懇願した。エドスは身を屈めるとシエルに言った。

「シエルよ、たしかにそなたは私の想像を超える魔術を持っているようだ。どうだろう、今よりその魔術で私を魔人どもから守ってはくれまいか？」

すると仲間たちは皆シエルに賞賛の拍手を送ると、シエルはただただ深く礼をしていた。

「さすがだな、アルミア軍は」ジェラがフツとする。

「シエルは時に私より大胆な作戦をとることが出来る。そして仲間たちはその身を捧げる事に躊躇はしない」

エドスは確信を持った眼差しで手を翳した。すでに薄っすらと日が上ってきている。

そこにエルードと鳥獣28人が上空から駆けつけた。

「エドス参謀、ジェラ殿。遅くなりました」エルードは大役を終え、少し安堵の表情を浮かべた。

「エルード、待っていたぞ」エドスはエルードを抱き寄せた。

「エルード様、ご無事で何より・・・」シエルは涙を浮かべていた。

ジェラは妖魔人達に近づき送り出した鳥獣50人から28人になっているのを確認した。

「アルカ、皆の者、良くやってくれた。礼を言う」鳥獣28人は傷を負いながらも笑みで返した。

そこにエルードが話しかけた。

「ジェラ殿、急ぎ伝えなければならぬことがあります」

「なんだ」

「はい、残念ながらリビンゾールはこの計画を知っていたようです。そしてリビンゾールの配下のルイスドールが言うにはリビンゾールはすでにルードシアに向かっているようです」

「ルードシアに！？ それは本当か！？」エドスが聞く。

「はい、どうやらこの機会を狙っていたようです」

ジェラはまさかこのような形で不安が的中するとは思ってもいなかった。

どこで情報が漏れたのか思案してみたが思い当たる節が無い、かといってルードシアを放ってはおけない。

空間を繋ぎルードシアへ兵を向けるか、しかし残された力を今使えばここにいる兵達は帰る事が出来ないだろう。

ジェラは天を見上げた。

「ジェラよ、今は我慢するしかない。先にハデスを倒さなければ」

エドスは拳を握った。

「なんだ・・・」同時にエドスはそのに高速で近づいてくる音を感じ取った。

エドスは耳を澄まし音の方に目を向ける、そして兵に警戒の指示を出し、兵は翼竜の陣で構えた。

やがて白い尾を引き連れた者が高速で向かってくる、その場が一瞬
緊迫した。

それは迷うことなくこちらに向かってくるとその姿をとらえた。

「よい、手を出すな！」ジェラが叫ぶ、そしてその者はジェラのす
ぐそばに降り立った。

「ジェラ様」1人の姿になった超魔人がジェラの前に膝をついた。

「役目、大義であつた。その姿になつたという事は……」

「はいジェラ様、ですがシン殿は……」

「シンがどうしたというのだ！？ まさか……」それが超魔人であ
ると認識した皆は2人の会話に近づく。

「いえ……シン殿は鬼の子孫にあたる御人です。そして魔人アー
ミングが言うには『ハデス様よりも邪悪な者がこの世には存在する。
私はその者と戦うために神【シン】の国と取引をしたのだ』と。そ
してシン殿と魔人アーミングは共に神【シン】の国に向かいました。
また会う時が来るだろうと言い残して」

「神【シン】の国……今は伝説となつている国ではないのか？
それに鬼の一族とは……」エドスは顔をしかめる。「しかしジェ
ラよ、ハデスよりも邪悪な者とは？」

「私には分からない。いったい何がおきているというのだ」その問
いに答えられる者は誰一人としていなかった。

「あつ！ あそこじゃない？ ほら、みんな集まっているよ！」ス
ーランが黒煙の上がる城の麓に集合している人達を見つけた。「さ
すがね、リンシュンを制圧しているわ！」

「私達1番乗りかな〜!？」ランは嬉しそうに言う。

「お〜い！ お待たせ〜！」サルージは大きく手を振る。

ようやく地に降り立つとマドはグツタリして元の姿に戻るとランの頭に乗った。

「マド、ご苦労様」

「どう・・・いたしまして」

そこに真っ先にエドスが駆けつけた。

「みんな無事か？」

「ええ、特に何事も無く。ねっ！」スーランはランとサルージを見た。

「あ、ああ・・・」「そ、そうですね・・・」

「そうか、それはよかった・・・ラン殿、少しよろしいか？」エドスはちよつと気まずそうだ。

「はい？」

「私が話そう」超魔人がランに近づくとその姿にラン達は後ずさりした。

「心配いらない。私の超魔人だ」ジェラが後ろから顔を出すとホツとした。

そしてラン達はこれまでの経緯やシンの状況などを聞いた・・・

「そうですか。何か違うなっていう気はしていたんですね・・・」ランはどういう顔をすればいいのかと顔を伏せた。

「ラン、ひよつとしてその鬼の力が刀に力を与えていたんじゃない!?」そんなランにスーランは軽く肩を叩く。

「そうだランちゃん！ あんな破壊力持っているのはそれだよ、刀じゃなくてランちゃんが刀に力を与えていたんだ、そうだ間違いな

い！」

「そうなのかな・・・父さん」ラン自身、そう言いながらも少し変化を感じていたのは事実だ。サルージの言葉に納得するところもある。

「話は聞きました」突然、上空からハデスが皆のもとに降りてきた。

その降りてくる姿はまさに天使だ、しかしいままでは何処にいたのかと皆驚いていた。

おそらく朝日に反射して見えなかったのだらうと、その人にエドスが近づいて聞いた。

「美しい御方、あなたは？」

「あー！ ちょっとまって！」手を振りながらラン・スーラン・サルージの3人でハデスを囲んだ。

「これにはちゃんとした訳があつて！」スーランが近寄らないでと手を振る。

「美しい御嬢さんではないか。ラン殿の友人ですか？」構うことなくエドスは近づく。

「はい、エドスさん。初めまして」ハデスはペコリと頭を下げる。

「私をご存じとは光栄です。して・・・」エドスは顎に手をやる。ハデスは天使の翼をしまうと答えた。

「私はハデスです」

ピュ〜っと、冷たい風が吹き抜けていった。

「あゝ 言っちゃったよ・・・」3人は目を覆った。

「すいませんが・・・いま、なんと？」エドスはその大きな目をパチパチとする。

「ハデスです。あなた達が探している」

エドスは意味が分からずにラン達に視線を向けた。

「すまんがラン殿・・・どういうことかな？」ランは手を振りながらあわてて答えた。

「違うんです！ あの、本当の黒幕は別の人で！？ それで、えっと・・・このハデスさんはその黒幕に利用されていて」

そこにスーランがズイッと前に出ると「とにかく！ ハデスは敵じゃないの！ わかった！？」ビシツと言いつつ放った。それから皆はしばしラン達、そしてハデスの話しに聞き入っていた。

「仮にそれが本当なら黒幕は何処にいる？ 我々は誰と戦っていたのだ？ まさか知らんわけはないだろう？」ジェラはハデスに寄った。

「あの、知りません・・・」口をすばめる。

「では、先ほどエルードが言っていた事、ルードシアの件は？ 誰がそれに指示していたのだ？ ルードシアも仕組まれていたということか？」

エドスは何がなんだか、言っている自分が分からなくなってくると頭を抱えた。

「何がどういう事になっているのか・・・ここまで仕組んでおきながらそいつはなぜ出てこないのだ！？ 目的は何なのだ！？」

怒りのぶつけどころが分からなくなってしまったエドスだが、それは皆も同じ気持ちであった。

ようやく日が昇ったところでジェラ達は目的の無くなったこの戦いを終えて帰ることにした。

「ジェラよ、体は大丈夫か？」エドスの目には気力が感じられない。
「ああ、術が使えなくなっただとしても敵がおらんからな。手土産なしですまない」ジェラはそんなエドスを気遣った。

「ジェラのせいではない。そのうち黒幕も現れるだろう」エドスは自分を納得させるように言った。

ジェラは気力を振り絞るように空間を創り出すと平野に大きくアルミアの草原を映し出した。

「さあ、皆の者・・・」そういうジェラの声にも疲れが見てとれた。

その空間に、まずアルミア軍が最初に入っていく、続いてルードシア軍、さらには鳥獣達が入っていった。

そこへ上空に待機していたエルードがエドスに叫んだ。

「エドス参謀！ キシア隊長がこちらに向かっています！」

「なんだと！？」エドスの目に気力が戻る。

それを聞いたルードシア軍はキシア隊長を迎えに空間から戻ってくるやキシアのもとに駆けていった。

キシア隊が全員無事で戻ってくると駆け寄ったルードシア軍に囲まれ歓喜で迎えられた。

「無事だったのか！？」エドスはキシアに聞いた。

「はい、オラル殿がシグスレイを倒し我々にかけられていた術は解けました！」

「そうか、それは何より。で、オラル殿は？」キシアが振り返ると遠くから駆けてくるオラルを指した。

「まったく心配かけおって」エドスはニツと笑う。

そんなエドスを見ながらスーラン達がまだ遠くにいるオラルに駆け寄ろうとした時だった。

「エドス！ 急いでくれ！ 私の術が切れる前に！」ジェラの創った空間が徐々に小さくなってきていた。どうやらジェラの体力の限界が来たようだ。

「オラル！ 急いで！」スーランが必死になって手を振りながら叫んだ。

「駄目だ！ あの距離では間に合わん！ 残りたい者だけ残れ！」ジェラは必死に空間を繋ぎとめようとしたがそれから間もなく完全に閉じてしまった。

最終的にジェラ・エドス・エルード・ラン・スーラン・サルージ・マド・ハデス・超魔人が残った。

「やれやれ、手間取らせおって・・・」倒れそうになるジェラをエドスが支えた。

「大丈夫か？」

「ああ、だがしばらくは術を使えん・・・」言い方は強気だが体はグッタリしている。

「心配するな、私がついている」エドスは言いながらジェラを抱きかかえるとジェラはフツと笑みを浮かべ身をあずけた。

残った者達はオラルの到着を待っていた。

「なんだ・・・」

それを最初を感じ取ったのは超魔人であった。近づいてくるのは確かにオラルの様ではあるが、どこか雰囲気が違う。

うというかその周りの景色だけが歪んで見える。

「ジェラ様、あのもの人ではありません。何やら恐怖を感じます」
超魔人が恐怖という言葉を使うとは、ジェラは顔を向ける。

「確かに、何か巨大な力を感じる」エドスは無意識のうちに身構えた。

「そんなことないよ！ オラルだってば！」スーランは何言っているの？ といった感じた。

「そうさ、だいたいだんなはいつもあんな感じだよ！」サルージもスーランと同じ意見だ。

だが2人の言葉には誰も答えず、向かってくるオラルに視線が集まっている。

やがてオラルは皆の前に到着すると馬から降りた。

そして何気なく皆を見ると今までと少し雰囲気が変わっているようだ。

「どうかしたか？ 俺の顔に何か付いているか？」それを聞いたサルージはオラルに近づいた。

「だんな、心配しましたよ。帰ってこないんじゃないかって」

「そうか、すまなかったな。ちよつと予定が変わってしまったて、ところで皆ここにいるという事は魔人達、闇の十人を倒したってことか？」

「当たり前じゃない、口ほどにも無かったわよ！」スーランが得意げに言う。

「そうか・・・やはり『闇の十人』では役不足だったか」言いながらオラルがフツと笑った時、ハデスがサルージとスーランの袖を

引っ張って下がらせた。

「私はハデス！ あなたの声に聞き覚えがある！」ハデスは翼を広げると皆を守るように立ち塞がった。

「そうかハデス・・・城を出たのか」そう言うオラルの顔がにわか
に歪んでいた。

「皆下がれ！」

エドスは超魔人にジエラを預けるとハデスの前に出て攻撃態勢をと
った。それにエルードが応じハデスの脇を固める。

「そなた、オラル殿では無いな！？ 何処の誰だ！？」もはや親し
いものに言う言い方ではない。

オラルは、にわかになんだ顔を押さえると全身から黒い煙が立ち込
め始めた。それはみるみるうちにオラルを包んでいく。

その黒い煙にエドスは今までに無い圧力、そして恐怖を感じると
叫んだ。

「マド！ 急ぎ皆を連れていけ！」

「えっ！？ どうして？」マドは何のことかさっぱりだ。

「急げ！ 死にたいのか！」エドスのその目はマドを迷いから覚め
させた。

マドは慌てて鳥になるとスーラン、ラン、サルージ、馬を掴んで飛
び上がった。

すでにジエラは超魔人が抱え、はるか先に逃げている。

余程の事なのだろうとマドは今までにないくらいに力を振り絞り超

魔人の後を追ってその場を去っていった。

オラルを包む黒い煙の中でバチバチと雷が弾け、回りの蒸気を吸収し始める。その回りは嵐となり突風がふきあれると黒い煙は徐々に大きな球体になっていく。

「エドス参謀！」エルードはその圧力に耐えかねエドスに指示を仰いだ。

「心配無用だエルード、ハデスを連れて行け！ 早く！」
「はっ！ ご武運を！」

エドスは既に臨戦態勢だ。ここまでのエドスをエルードは見たことが無かった。

エルードはこの状況に太刀打ちできないと判断し、ハデスの手を取り嵐の中を飛び出した。

少しの時間が流れ、やがてオラルの回りの煙が徐々に消えていった。

「エドス……1人か？」

「そなた……」

「これが私だ」

「今回の黒幕……か！？」エドスは一步後退する。

「聞きたいことはあるだろうが、今はまだその時ではない」そういうとジェラの空間と同じものを作り出した。

「アルミア……美しい国だ。さあ、行ってくれ」

エドスもまた本能的に勝ち目は無いと理解するが、体はそれを拒む

かのように拳を握りしめていた。

「何故だオラル殿、答えてくれ！」

「エドス、そなた等ではまだ【奴】を倒せん」

「奴とは！？」

「一月後・・・その答えはミルアド大陸のミシユク国にある」

「ミシユク・・・オラル殿、やはりあなたは我々の敵ではない、そうだな！？」エドスはオラルの口元が緩んだのを確認すると続けた。
「では一月後・・・我々、そしてラン達はそなたを超える強さを身につけるだろう。次に会う時を楽しみにしていてくれ」

「ああ、そう願っている」

エドスはスツと構えを解くと笑みを浮かべ、そして空間に映るアルミアに入ってしまった。

オラルはそれを見届けると空間を閉じた。そして全身に太陽の日を浴びると、その光と共にその姿は消えて行った。

山脈の城ソダイ城　　森の城リンシュン（後書き）

奴とはいったい誰・・・

次回よりミルアド大陸編突入！　おたのしみに。

最終章　ヤマ国　『夜叉を継ぐ者』（前書き）

あけましておめでとうございます。

本年も引き続きのご愛読をよろしくお願いいたします。

昨日、「8月32日」書き終えました。

お気付きの方もいると思いますが、「オラル誕生物語」です。

これから先の物語でオラルの持つ能力を理解していただけると
思います。

荒削りではありますが是非読んでみてください。

それでは、ルードシア最終章を始めたいと思います。

最終章　ヤマ国　『夜叉を継ぐ者』

ヤマ国　『夜叉を継ぐ者』

闇の十人との戦いの後、オラルはテルート大陸のヤマ国にいた。
ルードシアのあるメルドール大陸とはちょうど地球の裏にあたる。

ヤマ国は昔、薬草の産地として世界中から注目されていた。
特に深手の外傷などを数日で治せる「ソウザ」と呼ばれる薬草は1
キロ程で一年は遊んで暮らせる程の高値で取り引きされていた。

「ソウザ」を巡っては時に戦の代償になり、また国を脅かす存在で
もあった。

やがて各地でソウザを巡って戦乱が起こり、「ソウザ」は絶滅した。
ヤマ国は荒れ果て、やがて魔人に土地を奪われると人々は山に追い
やられた。

そんななか、魔人は残っている人間を排除すべく日々「人狩り」を
娯楽の一つとしていた。

恐怖に怯える人々は洞窟に身を隠し、山頂付近に僅かな畑をつくり、
狩りをしながら生きながらえていた・・・

「はっ！」

「とうっ！」

「おりゃっ！」

オラルは山頂付近の岩陰で昼寝をしている所を威勢のいい声に起こされた。

「よし、今日はここまで！ 暗くなる前に帰るんだぞ！」

「はい先生！」

3人の子供が型の練習を終えると元気に駆けだして行った。

「精が出ますね」オラルは岩陰から声をかけた。

「・・・襲つてこなかったという事は、あなたは魔人では無いですね」先生と呼ばれていた人が振り向いてオラルを見た。

彼は黒い長髪を後ろで縛り、蔓のはちまきをしている。

やや浅黒だが目鼻立ちはハッキリ主張している、硬派な感じの青年だ。

「気づいていたのですか？ いや、邪魔してはと思って・・・しかし、もし私が魔人だったら子供たちを守れましたか？」いたずら心で聞いてみる。

すると彼はフツと笑みを浮かべると目の前の大岩に向かって拳を構えた。

「その時はこうしてやりますよ！」彼の一撃が放たれると、大岩は大きな音を立てて崩れていった。

「なるほど・・・」言いながらオラルは参りましたと降参した。

「ところであなた・・・ここで何をしていたのですか？」彼は自信に満ちた表情で言う。

「はい、私はオラルといいます。コルドの国まで行く旅の者です」

コルド？ 青年は反応した。

「コルドは逆の方角ですよ？」

「・・・そんなことは無い。ちゃんと地図通りに来ていますから」
オラルは持っていた地図を広げた。

「その地図、ちよつと見せてもらえませんか？」彼はその地図を一
通り見ると笑みを浮かべて言った。

「・・・これ、でたらめですね」

「でたらめ？ これなら間違いないからって言われて買ったんだけ
ど・・・」

「見事にやられましたね・・・これは土産用に出回っているもので
すよ」

オラルはそうだったのかと、笑うよりない。

「なんてこった、ではコルドは・・・引き返すしかないですか？」

「はい、ですがもうじき日も暮れます。夜は魔人が【人狩り】を始
めるので明日の方がいいでしょう」

「魔人ですか・・・」

「ええ」彼の答え方には、すでに人狩りは生活の一部のような言い
回しがあった。

「ではどこか隠れる場所を探さなくては」

「ハハ、このあたりに宿はないですよ。よかつたら私の家に来てく
ださい、皆も喜びます」こちらへ、と案内される。

「いいのですか？」

「ええ、旅の話など聞かせてください。それとさっきの技の事は内
緒にしておいてください」

「もちろん、助かります」

その人はシュラという。

シュラの住む家は山の中腹にある断崖絶壁の滝の裏の洞窟にあった。確かにここなら魔人に見つかることは無いだろう、なんせ入り口は川の中だ。

「オラルさん、泳げますか？」シュラは皮肉交じりに言う。

「ええ、なんとか」負けじと答える。しかし100m先は滝だ、川の流れは速い。

「では行きましょうか」言い終える間もなくシュラはその深みに飛び込む、オラルは薄笑いを浮かべるとシュラの後に続いた。

透き通った川の中では魚達が出迎えてくれた。

さらに深く潜ると岩陰に直径1メートルほどの穴があり、そこにシュラは消えた。

（行くしかないな・・・）

オラルは穴に体を入れるとスツと吸い込まれ、暗闇が覆った。

しかしすぐに視界が開け、呼吸が戻る。どうやらこの滝には幾つかの流れ出しがあるらしい。

浅い淵に上がるとそこに松明を持った子供たちが興味深げに近づいてきた。

「ねえねえ、おじさんだれ？」男の子が興味深々に覗き込んでくる。

「魔人さるん？」

「いや・・・ハハ」

「これこれ、御客人じゃ」後ろから老人が数人の若者を引き連れてきた。

「大丈夫ですか？」シュラが手を差し出した。

「ええ、すいません・・・しかし、よくこのような場所に・・・」

「ホッホッ、ここなら魔人共には見つからんからの。オラルさんとか言ったかの？ 歓迎しますぞ、下界からの客人は数年ぶりじゃよ」

鍾乳洞に住む家族は僅か5世帯であつた。

以前は1000人ほどがこの山に暮らしていたが魔人により住処を奪われ、ほとんどの住民はこの土地を去っていった。しかしシユラ達はこの土地を守るために残ったのだという。

オラルが長老に案内された場所は鍾乳洞の中にある円形の空間だ、ここにみんな集まっていた。

「長老、今夜も魔人が・・・」

「そうか、気を抜くな」そういうと若者は暗闇に消えて行つた。

「おじちゃんどうぞ！」子供達が温かい飲み物を持ってきてくれた。「ありがとう」その女の子はオラルに飲み物を手渡すと、はずかしそうに母のもとに走っていった。

「オラルさん、旅の途中だと聞きましたが？」シユラはオラルの隣に座ると子供達がその回りに陣取つた。

「ええ、コルドの友人に渡すものがあつて・・・」

「そうですか、ところでオラルさんの生まれはどちらですか？」

「ゴホッ！？ 生まれ！？・・・ええ、ルードシアです」答えに迷い、むせてしまった。

「るーどしあ〜？」

「ねえ〜？ それどこ〜？」子供達が長老に聞いた。

「ルードシアはのう、この下じゃよ！」長老は地面を指さして言つた。

「え〜っ！ この下はあたしの家だよ〜！？」

「わっはっはっ！ 確かなな！ じゃが、も〜っと下じゃよ〜！」

「わかんない！」

そこに女性たちが食べ物運んできた。

「さあ、これ食べて。力がつくわよ」長老の奥さんが差し出したのはこの土地で採れる芋だ。

それはとても甘く空腹を満たしてくれた。子供達もすかさず手に取るや美味しそうに頬張っている。

するといきなりブツ！　と一人の男の子が放屁した。

「くっせー！」回りの子たちは冷やかしながら楽しそうに逃げ回るが、逃げていた子もそれに続いた。

「これ、静かにせんかい、客人に失礼じゃろう！」長老に促されるまま子供達はどこかに消えて行った。

「やれやれ元気があるのはいいのじゃが、礼儀知らずでの。まあ大目に見てやってください」

短い食事を終えると長老が切り出した。

「それで、ルードシアからコルドまでとは、また大変な旅ですな。

差支えなければその渡すものとやらを教えてはいただけないですかな？」

「はい、これです」オラルは身に着けていた長い帯を外した。

「ほお、それですか・・・」

「ええ、見てくれはただの汚れた帯ですが大事なものです」

「そうですか・・・」

皆、期待外れといった感じだった。

これだけの長旅をするのだからきつと御大層なモノだと思っていたようだ。

それを察したシユラは聞いた。

「オラルさん、ルードシアや旅の話聞かせてくれませんか？」

オラルは帯をしまうと頷いた。

「そうですね。それではどこから話しましょうか」

そこに見張りの若者が走つてくると皆に叫んだ。

「大変だ、子供達が！」

「なんじゃと！」

理由を聞かず真っ先に飛び出して行ったのはシュラだった。

「さて、シュラ！」しかし長老の声は届かなかった。「みな武器を持て！」

子供達は鍾乳洞の抜け穴から出て遊んでいたところを魔人に見つかり2人が連れて行かれてしまっていた。

逃げてきた子供達はワンワン泣きながら若者達に連れられて戻ってきた。

「長老、アキとカエデが……」その名を聞いた2人の両親は泣き崩れた。

「残念じゃ……2人とも良い子であったのに」

「じいちゃん、ごめん」おいらが連れて行ったんだ！「ワンワン泣きながら言っているのは先ほど放屁した子だ。

みるとオラルに飲み物を渡してくれた女の子がいない。それと……一番最初に松明を翳して覗き込んだ男の子。

オラルは泣きじやくる男の子の頭を撫でると聞いた。

「2人を助けたいか？」

男の子はうんうんと頷く、オラルは顔を優しく包むと笑って答えた。

「心配するな」オラルはその子を抱くと長老に言った。

「長老、奴らの居所を教えてください」
しかし長老は首を振る。

「……無理じゃ、奴ら魔術を使う。我々に手は出せん」

確かに人間では魔人には太刀打ちできないのだろ。その場にいた者たちは、魔人に捕えられた者はあきらめるしかないというのが本音らしい。

それに対し、オラルは立ち上がって言う。

「長老、私がここまで何の苦勞もせずに旅を続けていると？」

するとそれを聞いた見張りの若者が近づいて言った。

「私が案内します！」

シユラは月明りの中、魔人の後を追って山を下って行った。

泣きじゃくるアキとカエデを抱えた魔人を見つけるのに時間はかからなかった。

「まで！」シユラは魔人の前に立ち塞がると構えた。

「ふふ、今宵はツイてる。人間を3匹も狩れるとは」魔人の両肩に抱えられたアキとカエデは泣きながらも必死にもがいていた。

「子供を返してもらおう！」ひと時、睨み合うと魔人は子供を下した。

「・・・いいだろう」

魔人の手を離れたアキとカエデは泣きながらシユラの下に駆けだした。

すると魔人は両手を長い刀に変え2人を追いかけ出した。

「そらっ、首をはねてしまっぞ！」逃げる2人を目の前にすると魔人はその刀を振り下ろした。

「・・・やるな、人間」シユラはアキとカエデを抱えて木の上にいた。

「すまんがここで待っていてくれ」

「うん・・・」

2人は一瞬理解できないようだったが、その高さに気が付くとしっ

かり木に掴まった。

シユラは下りて魔人と対峙するや全身に気を溜め構えた。

「人間よ・・・本気で俺とやるつもりか!?」首をかしげる。

「御託はいい、いくぞ!」

シユラは瞬時に飛び出すと、拳が魔人の顔面を捉えた。その顔を失った魔人は胴だけになるとその場に倒れた。

「こんなものか・・・」シユラは拳を見つめる。

しかし木の上のアキとカエデは驚きを隠せなかった。

「すっげー 先生!」

「つよいね〜!」

シユラは2人のもとへ飛び上がり、再び下すと頬を抓った。

「イダダダ!」

「もう勝手なことするなよ」

「は〜い!」

「よし、じゃ帰ろう」

「うん!」

アキとカエデの手を取って歩き出した時・・・シユラの脇腹から槍が突き出した。

「・・・くっ!」

振り返ると魔人の手が槍と化しシユラを貫いていた。

「せんせい!」

「心配するな、大丈夫だ!」

「でも!」

魔人は槍を戻すと歩み寄ってきた。

「どこに行くのだ？ まだ終わってないぞ」

シユラは2人を抱き寄せると小声で言った。

「アキ、カエデ。帰り道は分かるな、止まらずに走るんだぞ、いいな！」そういうと2人を押し出した。

「せんせい！」

「行くんだ！」

魔人はその様子を見ながらシユラに近づいた。

「無駄な事を。お前を片した後、すぐにでもつかまえてやる」それを聞いたシユラは魔人の前に立ち塞がった。

「ほづ、やる気か！？」

「・・・ここは通さん！」

「そうか？ なら力づくで通らせてもらうぞ！」魔人は両手を再び槍に変えると突き出した。

「くっ！」

シユラは右腕で槍をかわしたが、1つは左の足を貫通していた。

「これで逃げられなくなったな・・・さあ、どうする！？」

シユラは足の槍を抜くと膝をついた。

「確かに・・・だがここは通さん！」

シユラは残った気を振り絞ると魔人に飛びかかった。だがその拳は魔人の顔の直前で止まった。

2つの槍に突かれたシユラの体は宙に浮いていた。

「惜しかったな・・・だが所詮は人間、相手が悪かったな」

そのころ、オラルは兵と一緒にシュラの後を追っていた。

「ちよつとまって・・・」兵が静かに腰を下ろして辺りを伺った。

「何か、います」

ガサガサと音のする方に目を向けると・・・魔人に掴まっていたアキとカエデだった。

「アキ！ カエデ！」2人は兵に気づくと泣きながら駆け寄ってきた。

「無事だったか、シュラは！？」

「魔人とたたかって〜！」

「そうか・・・」

オラルは兵に言う。

「私が見てきましょう、あなたは子供を連れて戻ってください」

「しかし・・・」

「心配いりませんよ、シュラはとても強い御人です」

「わかりました」

笑顔を浮かべるオラルに安心した兵は、すぐに追っ手を向けると言い残して戻っていった。

オラルはその場から少し下りた所で子供を探しにきた魔人とバツタリ出くわした。

「今日は人間によく会う日だ」魔人はニツとする。

「・・・シュラはどうした」オラルは立ち塞がると聞いた。

「人間という生き物は、なぜそう無駄に強がるのか理解できん」

「そうか、俺が人間に・・・そう見えるんだな？」

「なに！？」

オラルは両手を合わせると念を込め、その手を徐々に広げると漆黒の空間が現れた。

「きさま・・・人間では無いのか！」

「ああ、おまえのその力・・・善の為に鍛え治してやる」

魔人は咄嗟に距離を置いて身構えた。

「きさま、魔人でも無いな・・・どこの誰だ！」

すると空間の一部が中心で目となり、その閉じていた瞳が開くと魔人はすでに下半身が空間に吸い込まれていた。

「なんだと!？」必死に吸い込まれまいと両手でオラルの手を掴んで堪えるが、やがて片手になった。

「助けてくれ! あんたのいう事は何でも聞く! だから！」

オラルはニツと笑う。

「そうか、何でも聞くか・・・では、槍となり新たな主に仕えるが良い！」

その目は懇願する魔人を一気に吸い込むとオラルは空間を閉じた。そして再び静寂が戻った。

オラルがシュラを抱えて皆のもとに着いた時、シュラの息は消えかかっていた。

「シュラよ、そなたは命の恩人だ！」アキとカエデの両親はシュラに寄り添い、その最後を看取る覚悟だった。

そこに長老が小瓶を持ってシュラに近づくと中の薬草を傷口に塗り始めた。

「長老・・・それは最後の・・・」

「ああ・・・だがシュラには何としても生きてもらわねば、あの御方に申し訳が立たん！」

「それは・・・」オラルは長老に聞いた。

「この子はあの夜叉様のたった一人の息子じゃ・・・」

オラルはその夜、長老から聞いた魔人の住处である切り立った山の

入り口に向かった。

長老の話によれば、この辺りを縄張りになっている魔人は100人ほどで、リーダーはガラムという名らしい。

薄っすらと日が昇って来たころ、オラルは切り立った山底を歩いていた。

やがて前方に、如何にもといった刺々しい魔人の城が見えてきた。すると空から1人の魔人が下りてくるとオラルの前に立った。

「おい、どこに行くつもりだ？」魔人は羽らしき骨をしまうと首を回した。

オラルはやれやれといった感じで構える。

すると魔人は「おいおい、本気でやろってんじゃないよな？」言いながら首をかしげた。

しかしオラルは無言のまま拳に念を込めた。

「おまえ・・・邪魔だ」

その拳を一気に突き出すと魔人の脇を目にも止まらぬ速さで気砲が突き抜け、城を直撃した。

「なに！？」魔人が振り向くと、城は跡形も無く崩れていった。

「きさまー！」魔人はオラルを睨みつけると体を震わせた。

「魔人を・・・一人残らずここに連れてこい」オラルは手を組むと首を回した。

ものの数分で魔人が集まるとオラルの前に数百の魔人が睨みをきか

せる。そのなかから部下を引き連れガルムが現れた。

「ガルム様、いきなりこの者が城を・・・」

「ミダ・・・お前はそれをただ見ていたのか？」

「いえ！ ただこいつがいきなり！」

そこにオラルが近づいた。

「不意打ちはお前らの専売特許ではなかったのか？」さらにオラルはガルムに近づくと額を合わせた。

「きさま、何者だ・・・」

「名はオラル、趣味は・・・魔人狩りだ！」

言い終える間もなくオラルは両手を広げると大きな球体を創り出し、そこに居るすべての魔人達を閉じ込めた。

「なんだと！ こいつ！」

魔人達はその手、この手で球体を破壊しようとするがビクともしない。

「きさま！ どういうつもりだ！」

オラルはニヤツと片手を球体から離すと、そこに槍を生み出した。

「この槍の力、善の力となって生まれ変わるがいい！」そういうと槍を球体に突き刺した。

その槍が光り始めると、球体に閉じ込められていた魔人達は槍に吸い込まれていった。

日が昇ったところ、オラルは洞窟の中の小さな部屋に入った。

そこには長老と、まだ意識の戻らないシユラがいた。

しかしあれだけの傷を負っていたシユラが、意識は戻ってはいない

が息を吹き返している。

「それがソウザ・・・ですか」

長老は微笑むとシユラの手を取った。

「最後のソウザでした・・・ですがこれで夜叉様に恩返しが出来たと思います」

長老はずっとシユラのそばを離れなかった。

「夜叉・・・」オラルは優しい眼差しでシユラの頬に手を当てる。

「長老、私はこれから人を探しに旅に出なければなりません」

「・・・そうですか。オラル殿、何とお礼を申したら」

「いえ、その代りと言ってはなんですが・・・これをシユラ殿が目を覚ましたら渡しては頂けないでしょうか」オラルは長い布と槍を出した。

「これは・・・」

「実は、旅の目的の1つに夜叉の後を継ぐ者を探していました。そしてこの土地で出会えた。これも何かの縁でしょう」

長老はいろいろと聞きたいようではあったが、じっとオラルを見つめた。すると長老はハッと、何か思い出したようだ。

「わかりました、必ずお渡しします・・・オラル殿」

「はい？」

長老は改めて座り直し、姿勢を正すと聞いた。

「これは風の噂ですが、先の戦いで夜叉様が・・・最後の願いを託された方がおられると聞きました」

オラルも同様に姿勢を正して答えた。

「・・・長老、今よりこの国に二度と魔人が現れる事はないでしょ

う」オラルはそういつと長老の手をとり微笑む。

「オラル殿・・・やはりあなた様は・・・」長老は堪えきれずに涙をながした。

その日の夜、アキとカエデが満面の笑みを浮かべて長老のもとに走ってきた。

「じい！」

「長老！ シュラが目を覚ましたよ！」

「おお！ そうか！」長老がアキとカエデに急かされて部屋に入った。

「おお！ シュラ。よかった、よかった！」

シュラは体を長老に向けると頭を下げた。

「長老・・・最後のソウザを」

「良いのじゃ・・・これであの御方に顔向けできる」長老はシュラの手をとり頭を下げた。そんな長老をシュラは優しく起こして言った。

「それと・・・夢の中で父に会いました。顔はハッキリとは見えませんでした・・・」

長老はシュラの目をジッと見つめると一呼吸置いてから話し始めた。

「そうか・・・シュラよ、どうやらそなたに話す日が来たようだ」長老はシュラを前に座り直すと、アキとカエデも長老の隣に「ちょこん」と座った。

「我々がこの土地に移り住む少し前の話じゃ・・・
ワシらは爺さんの代からザルギスという国にある湖の近くに住んでおった。」

ザルギスは今でこそ魔人の国ではあるが、当時は他にも多くの人や獣人が暮らしていた。

特に争いもなく、まあ、多少のもめごとはあったがそれなりに平和じゃった。

が、ある日を境に魔人達がザルギスを魔人の国にすると宣言し、一方的に人間と獣人を排除しだしたのじゃ」

「それは・・・」

「闇の十人衆・・・そう呼ばれていた。彼らは魔人の世界でも特に力のある者達の組織じゃ、奴らはザルギスにある土地や城を次々に奪い取っていった・・・」

そしてワシ達と生き残っていた少数の獣人たちは結束し、湖にあるルメイロト城を拠点にして戦いを続けていた。じゃが・・・」長老は苦悶の表情を浮かべた。

「長老・・・」

「ああ、闇の十人衆。そのなかの一人、リビンゾール！ 奴が来たことによつて状況は一変した。

殺戮を好むやつの手によつて仲間が次々に殺されていった。そして残った者達は城に籠城したのじゃ。

その時に残っていた者達は約千人ほどじゃった・・・

それに対し魔人達はネズミ一匹逃げられないような数で城を囲んでいた。

やがて我々もこれ以上は勝ち目がないと見るようになっていった。

じゃが、せめて女、子供は逃がしてやりたい。そう思い、地下に抜け穴を造ったのじゃ。

そしてあの日・・・」

「あの日？」

「そうじゃ。女、子供を城から逃がそうと行動を起こした日じゃ。そう、雨の日と決めていた。

じゃが、その計画が魔人に知られていたことをワシらは知らなかった。

奴らは全軍で総攻撃を仕掛けてきおった。

当時ワシは女、子供を逃がすための護衛役の一人だった。そして何としても必ず逃がすと、この命を懸けていた。

ワシは城の外の状況は分からなかったが、地下に女、子供を集め指示を待っておった。

やがて状況が悪化してくると・・・指示が来た。

それも総大将自らが駆けつけてくれた、生まれて間もない子供を連れて・・・。

我々は、総大将の指示に従い地下通路から逃げ出した。

湖は、樽にロープを繋いだイカダのようなもので渡った・・・」ここまで話すと長老は涙をこらえていた。

「じい」

「ああ・・・すまんの。

そしてようやく岸についたのじゃが・・・この計画を知っていた魔人達が待ち構えておった。あんときはさすがに覚悟したよ」

「そうですか。しかし長老は今、ここにいます」

「そうじゃ。誰じゃかわからんが、そこにいた魔人を全て倒してくれた。それも、たった一人で」

「長老・・・」

なにやら笑みを浮かべた長老は涙を拭うと深呼吸して続けた。

「その御方は、魔人を倒すと私達に逃げる道を教えてくれた。そし

て城に向かって飛んでいかれた」

「飛んで!? すっげー その人! ねえ、長老! その人は、どうなったの!」

「おしえてー おしえてー!」アキとカエデの頭には正義のヒーローに映っている。

「アキとカエデはもう会ったことがあるだろう?」

「!?!」

「あの、おじちゃん?」

「ああ・・・恐らく。いや、間違いないだろう」

「長老、では・・・」

「そうじゃ、シュラ。そなたの父は夜叉という名じゃ。そして総大将だった御方じゃ」

「その方は・・・」

「あの戦いで・・・闇の十人衆の手により石像にされたと聞いている」

「そうですか・・・ではオラル殿とはいったい」

「察するに彼は人間ではないのだろう。だが魔人でもない。しかし間違いなく我々を救ってくれた御方じゃ!」

そこまで聞いたシュラはゆっくりと立ち上がった。

「長老、だいぶ気分がよくなってきました。少し外の空気を吸ってきます」

「ああ・・・今日は星がとても綺麗じゃよ」

続く・・・

最終章　ヤマ国　『夜叉を継ぐ者』（後書き）

シュラという名の、新たな戦士の活躍にご期待ください！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0434x/>

ルードシアの守り人～黒?～

2012年1月7日14時55分発行